浅川扇状地遺跡群

吉田古屋敷遺跡(3)

―ＪＲ吉田東町踏切除去（市道吉田朝陽線）事業地点―

２００７・３

長野市教育委員会

序

善光寺平は、東縁に上信越国立公園山系より延びる火山性の東部山地、西縁を海底等の隆起による堆積性の犀川丘陵山地に囲まれた南北に長い盆地です。

盆地の内部では、千曲川によってもたらされた沖積地とそこに注ぎ込む大小の河川による扇状地が発達しています。

このような複雑多岐にわたる地形の上に、現在の長野市街地が成り立っていています。そこにはそれぞれの地形や立地に応じて様々な生活や生産活動がみられ、原始・古代から営々と続いてきた人々の英知の集合をみることができます。

当遺跡は、飯縄山を水源とする浅川が形成した広大な扇状地上に立地し、通称「浅川扇状地遺跡群」と呼ばれる長野盆地の北部を代表する遺跡で、扇端部の北側に位置しています。

ここに「長野市の埋蔵文化財第118集」として刊行いたします本書には、この度の発掘調査によって得られた成果を掲載しております。　連綿として綴られてきた人々歴史の中のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立て頂ければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力ならびに発掘調査に際しまして多大なご尽力を賜りました関係諸氏、発掘作業に携わって頂きました作業員の皆様、また報告書刊行に至るまでご指導頂きました関係機関・各位に深く感謝申し上げます。

平成19年３月

長野市教育委員会
教育長　立岩　睦秀

例　　言

1　本書は、長野市建設部道路課が主管するＪＲ信越線吉田東町踏切除去（市道吉田朝陽線道路改良）事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。

2　調査は、主管課の依頼を受け長野市教育委員会埋蔵文化財センターの直轄事業として実施した。

3　調査地は、長野市吉田３丁目860－10番地他に所在する。

4　発掘調査は、平成７年～11年度に実施し、調査面積は約2,400㎡である。

5　遺跡名の（３）は、長野市教育委員会が吉田古屋敷遺跡において実施した発掘調査歴順による。ちなみに（１）は北長野駅前Ｂ－１地区市街地再開発事業、（２）は民間共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

6　調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）で保管している。遺跡の略号は「ＡＹＦＢ」である。

7　本書は、調査によって確認・検出された遺構・遺物を中心にその基本資料を提示することに重点をおいた。資料掲載の要点は下記のとおりである。

＊　資料は、検出されたものの中から時期が明確に把握できるものを中心に掲載した。ただし、特殊なものはこの限りでない。時期や性格不明のものは掲載対象からはずしたが、これらに関しての図面・出土遺物等は閲覧しえるように保管してある。

＊　遺構番号等は、調査順に付してあり、出土遺物等の検索の都合上から調査時に用いた番号をそのまま使用している。

＊　遺構に略号を用いた。ＳＡは竪穴住居址、ＳＫは土坑、ＳＪは土壙墓、ＳＮは集石遺構、ＳＤは溝跡・河川跡、ＳＥは井戸址、ＳＸは性格不明遺構をそれぞれ表す。

＊　遺構の測量は、平面直角座標系第Ⅶ系の座標値と日本水準原点の標高を基準とするコデックシステムを援用するため株式会社写真測図研究所に委託した。現地にて１：20の縮尺で基本原図を作成し、本書では基本的に１：80の縮尺で提示した。ただし、集石等の微細図はこの限りではない。

＊　遺構図中のアミ掛け部は焼土・炭化物の範囲を示す。

＊　遺物実測図は、土器類を１：４、石器類を１：２または１：３の縮尺を基本として提示した。

＊　土器実測図の内、弥生時代土器の赤彩部は密点アミ掛け、土師器の黒色処理部は粗点アミ掛けで表示した。

＊　遺物番号は各時代ごとに通し番号で付し、必要に応じて縄文時代土器はＪ、弥生時代土器はＹ、古墳時代土器はＫ、平安時代土器はＨ、中世土器はＴを番号前に付した。

＊　出土土器観察表の記載は次の要領でおこなった。

番号：実測図番号と写真番号は一致する。　法量：実際の計測値または図上復元による計測値を記した。

遺存度：図示した部分の遺存状態を表す。

目　次

序・例言・目次

Ⅰ　調査の経過……1
1　調査に至る経過……1
2　調査の経過……2
3　調査の体制……11

Ⅱ　調査地周辺の環境……12
1　地理的環境……12
2　考古学的環境……14

Ⅲ　調　査……17
1　縄文時代の遺構と遺物……17
住居址……17　性格不明遺構……23　土坑……25
石器等実測図……33　遺物写真……39　石製品等観察表……42
2　弥生時代の遺構と遺物……45
住居址(中期)……45　住居址(後期)……47　性格不明遺構……50
土壙墓……54　合口土器棺墓……54　土坑……55
石製品実測図……56　遺物写真……57　土器観察表……58
3　古墳時代前期の遺構と遺物……60
溝址(環濠)……60　A区土坑……72　性格不明溝址(方形周溝墓)…75
E区土坑……78　土器写真……79　土器観察表……82
4　平安時代の遺構と遺物……89
環状溝址……90　溝址……90　土壙墓……90
集石遺構……91　土坑……93　井戸址……93
性格不明遺構……93　土器写真……94　土器観察表……94
5　中世の遺物……93

Ⅳ　結　語……95

報告書抄録・奥付

挿 図 目 次

1図　市道吉田朝陽線道路改良計画及び調査区位置図…… 1
2図　A区遺構分布図…… 2
3図　B区遺構分布図…… 4
4図　C区遺構分布図…… 5
5図　E区遺構分布図…… 7
6図　F区遺構分布図…… 8
7図　調査位置図…… 12
8図　調査地周辺の地形図…… 13
9図　調査地周辺の字境図…… 14
10図　吉田町東遺跡…… 15
11図　CSA3実測図…… 18
12図　CSA3出土土器実測図…… 18
13図　CSA3出土土器(2)・土製品実測図… 19
14図　CSA3埋甕実測図(3)…… 20
15図　CSA4、CSK5～6実測図…… 21
16図　CSA4出土土器実測図…… 22
17図　CSA5実測図…… 23
18図　CSA5出土土器実測図…… 24
19図　BSX1実測図…… 24
20図　BSX1出土土器実測図…… 24
21図　土坑・焼土坑実測図…… 26
22図　土坑・焼土坑実測図…… 27
23図　土坑出土土器・土製品実測図…… 29
24図　FSK2出土土器実測図…… 30
25図　土坑・検出面出土土器実測図…… 31
26図　土坑・検出面出土土器土製品実測図… 32
27図　小型石器・土製品実測図…… 33
28図　住居址・土坑出土石器実測図…… 34
29図　土坑・検出面出土石器実測図…… 35
30図　検出面出土石器実測図…… 36
31図　住居址・検出面出土石器実測図…… 37
32図　住居址・検出面土坑出土石器実測図… 38
33図　CSA1実測図…… 45
34図　CSA1出土土器実測図…… 45
35図　FSA4実測図…… 46
36図　FSA4出土土器土製品実測図…… 46
37図　FSA8実測図…… 47
38図　FSA1・FSK31実測図…… 48
39図　FSA1出土土器実測図…… 48
40図　FSA2実測図…… 49
41図　FSA2出土土器土製品実測図…… 49
42図　FSA3実測図…… 50
43図　FSA6実測図…… 51
44図　FSA6出土土器実測図…… 51
45図　FAS7実測図…… 52
46図　FSA7出土土器実測図…… 52
47図　FSDZ1実測図…… 52
48図　BSJ1(木棺墓)実測図…… 53
49図　BSJ1出土土器実測図…… 53
50図　BSJ1出土玉類実測図…… 53
51図　BSJ2実測図…… 53
52図　合口土器棺墓(FSJ3)土器実測図… 54
53図　土坑実測図…… 55
54図　土坑・検出面出土土器実測図…… 55
55図　住居址・検出面出土土器および石製品実測図…… 56
55図　ASD1実測図…… 61
56図　ASD1土層断面図…… 62
57図　ASD1－Ⅰ出土土器実測図…… 63
58図　ASD1－Ⅰ出土土器実測図…… 64
59図　ASD1－Ⅰ出土土器実測図…… 65
60図　ASD1－Ⅰ出土土器実測図…… 66
61図　ASD1－Ⅱ出土土器実測図…… 67
62図　ASD1－Ⅱ出土土器実測図…… 68
63図　ASD1－Ⅱ出土土器実測図…… 69

64図　ASD1－Ⅲ出土土器実測図 …… 70
65図　ASD1－Ⅲ出土土器実測図 …… 71
66図　ASD1－Ⅲ・A検出面出土土器実測図 72
67図　ASD1－Ⅲ出土土器実測図 …… 72
68図　A区土坑実測図 …… 73
69図　A区土坑出土土器実測図 …… 74
70図　ESDZ1(方形周溝墓)実測図 …… 76
71図　ESDZ1出土土器実測図 …… 77
72図　ESK1実測図 …… 78
73図　ESK1出土土器実測図 …… 78
74図　ESD2(環状溝址)実測図 …… 89
75図　ESD2出土土器実測図 …… 89
76図　FSJ1実測図 …… 90
77図　FSN1次検出面実測図 …… 91
78図　土坑・溝址実測図 …… 92
79図　SX・検出面出土土器実測図 …… 93
80図　E検出面出土土器実測図 …… 93

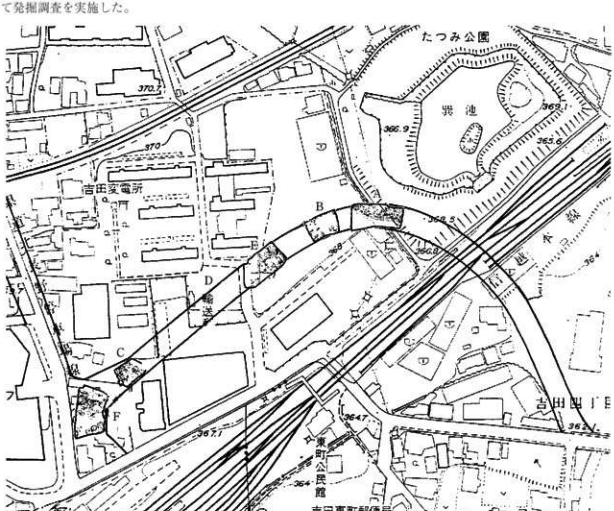
Ⅰ　調査の経過

1　調査に至る経過

調査地の近接地では、平成５年度に長野新幹線建設事業に伴う浅川扇状地遺跡群（新幹線地点）、平成６年度に緊急地方道路整備事業（北長野通り）および民間宅地造成事業に伴う吉田町東遺跡、平成７年度には民間共同住宅の建設事業に伴う吉田四ツ屋遺跡の発掘調査が行われ、縄文時代から平安時代にかけての集落跡と周知されるようになった。

調査地は北長野駅の北側に位置し、市街地再開発事業地でもあり、また北長野通りの道路改良事業も進展しつつあり、交通の要衝でもあった。しかし、市道吉田朝陽線はＪＲ信越線と交差するため、開かずの踏切と悪評高い道路であった。そこで、長野市は踏切を立体交差でアンダーパスにする道路改良計画を具現化することにし、平成７年度から工事の着手にかかった。

そこで、前述したとおりこの事業地は明らかに吉田古屋敷遺跡の範疇にあるとの確証を得ていたので、工事着手に先立ち建設部道路課長名の発掘調査の実施依頼を受けて、事業の進捗にあわせ平成７年度から11年度に亘って発掘調査を実施した。



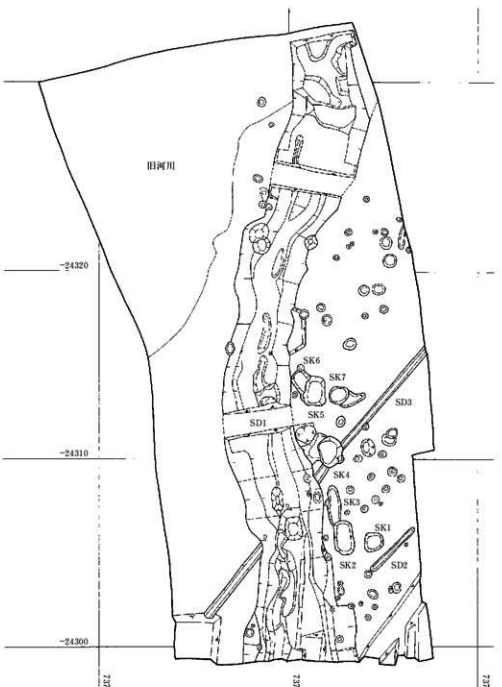
１図　市道吉田朝陽線道路改良計画及び調査区位置図（１：2,500）

2　調査の経過

［平成７年度、A区］

【調査地】長野市吉田３丁目868－１番地他【調査期間】12月25日～２月６日（稼動22日）【調査面積】650㎡

【調査概要】現地表下約210cmに遺構面があり、縄文時代後期土坑１基、弥生時代後期末から古墳時代初頭の環濠と推定される大溝址１条・溝址２条・土坑６基の他に時期不明の河川跡等を確認した。大溝址からは北陸系土器の影響を受けた土器類を含む多量の土器が出土した。



2図　A区遺構分布図（１：200）

Ⅰ－1　A区全景

Ⅰ－2　A区遺構検出

Ⅰ－3　ASD1調査

Ⅰ－4　ASD1調査

Ⅰ－5　ASD1調査

Ⅰ－6　ASD1調査

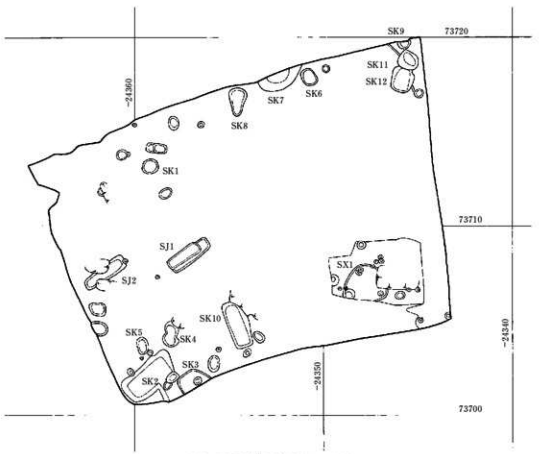
Ⅰ－7　A区遺構測量

Ⅰ－8　A区清掃

［平成８年度、Ｂ区］

【調査地】長野市吉田３丁目868－27番地他【調査期間】10月11日～31日（稼動15日）【調査面積】300㎡

【調査概要】検出した遺構は、縄文時代後期の土坑１基・性格不明遺構１基、弥生時代後期の木棺墓１基・土坑１基、平安時代の性格不明遺構１基・小穴等である。縄文時代の性格不明遺構は住居址状を呈しており、円形の掘り込みの中央から深鉢の胴下半部が正置状態で出土した。木棺墓は棺材の小口痕が明瞭に確認され、ガラス製玉類が出土している。平安時代の遺構は土壙墓状で大型動物の歯が出土した。



３図　Ｂ区遺構分布図（１：200）

Ⅰ－９　Ｂ区全景

Ⅰ－10　Ｂ区遺構検出

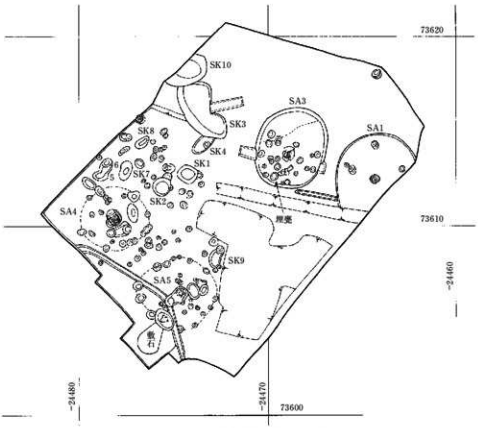
Ⅰ－11　B区調査

Ⅰ－12　B区調査

［平成９年度、C区］

【調査地】長野市吉田３丁目868－40番地他【調査期間】９月１日～25日（稼動13日）【調査面積】280㎡

【調査概要】縄文時代中期の住居址３軒と土坑10基・溝址１条・37個の小穴、弥生時代後期の住居址１軒を検出した。旧建築物による撹乱が著しく遺構面の残存状況は良くなかったが、縄文時代の柄鏡式敷石住居址とこれに伴う石囲炉の確認は特記できよう。隣接する北長野駅前Ｂ－１地区市街地再開発事業地や（財）長野県埋蔵文化財センターが調査した北陸新幹線建設地点などの縄文時代遺構と関連するものであろう。



４図　C区遺構分布図（１：200）

［平成10年度、D・E区］

【調査地】長野市吉田３丁目860－10番地他【調査期間】６月15日～７月３日・９月18日～10月16日（稼動48日）

【調査面積】600㎡

【調査概要】本年度の調査地は中部電力㈱の前身である長野電灯等の跡地であり、当時の建物の基礎コンクリート

Ⅰ－13　C区全景

Ⅰ－14　C区調査

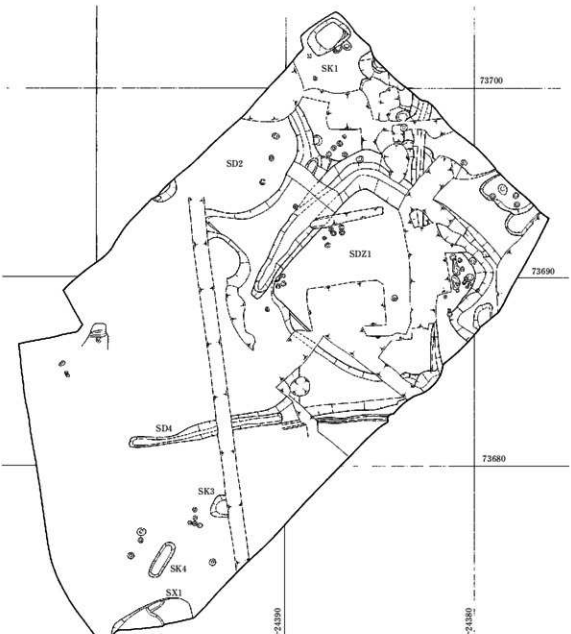
Ⅰ－15　C区調査

が残存しているばかりでなく、この建築物を解体撤去の際の撹乱がいたるところでみられた。従って遺構の確認は撹乱を免れた部分に限定され、縄文時代後期の土坑１基と小穴、弥生時代後期の住居址１軒・土坑２基・溝址４条・小穴、古墳時代初頭の方形周溝墓状遺構・土坑各１基、平安時代の環状溝址１基と土坑・溝址・小穴等を検出した。古墳時代初頭の土坑から体部穿孔のある完形の壺が出土している。また、古墳時代の方形周溝墓状遺構の上部はすでに削平されていたものの、溝内から遺棄されたと思われる土器群を検出した。

［平成11年度、Ｆ区］

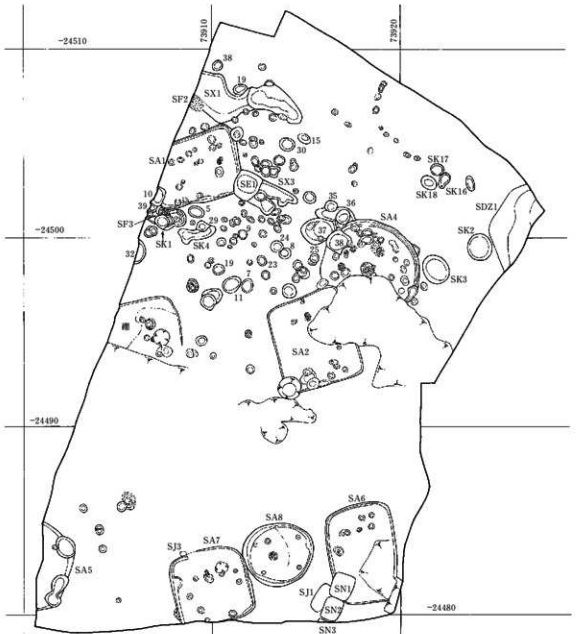
【調査地】長野市吉田３丁目855－３番地他【調査期間】６月１日～７月９日（稼動39日）【調査面積】700㎡

【調査概要】本年度の検出遺構は住居址７軒（弥生中期２・後期５）、墓２基（弥生後期土器棺１・平安土壙墓１）、集石址３基・井戸址１基等がある。浅川扇状地遺跡群の特色でもあるが、遺構検出面が現地表から約80㎝で、縄文時代から平安時代まで同一面で検出される点から時期を特定することができなかった遺構も多い。



5図　E区遺構分布図（1：200）

Ⅰ－16　E区全景



6図　F区遺構分布図（1：200）

1－17　F区全景（南面より）

Ⅰ－18　F区全景（南より）

Ⅰ－19　F区全景（西より）

Ⅰ－20　ＥＳＤＺ１調査

Ⅰ－21　ＥＳＤＺ１調査

Ⅰ－22　ＥＳＤＺ１調査

Ⅰ－23　ＥＳＤＺ１調査

Ⅰ－24　Ｆ区調査地

Ⅰ－25　Ｆ区遺構検出

Ⅰ－26　ＦＳＡ２調査

Ⅰ－27　ＦＳＡ１調査

3　調査の体制

長野市域における埋蔵文化財の保護については、学術調査ならびに史跡等の整備事業に関わる調査を文化財課が担当し、各種開発行為に伴う対応は埋蔵文化財センターが直轄事業として行っている。

［平成７年度～11年度］

調査主体者　長野市教育委員会教育長　滝澤忠男（～H10）・久保　健

総括責任者　埋蔵文化財センター所長　丸田修三（～Ｈ９）・小林重夫（H10）・中島昌之

庶務係　所長補佐兼庶務係長（小林重夫）（契約・出納事務、庶務、Ｈ９主幹）・宮澤秀幸（H10）

職員　青木厚子

調査係　所長補佐兼調査係長　矢口忠良

主査　青木和明（Ｈ９社会教育課異動兼務）・千野　浩（Ｈ８～）

主事　（千野　浩）・飯島哲也（調査主任）・風間栄一・小林和子

専門主事　清水　武（～Ｈ９）・荒木　宏（H10～）

専門員　中殿章子・山田美弥子・寺島孝典（Ｈ７）・西沢真弓・小野由美子（調査員）・永井洋一（Ｈ７）・堀内健次・藤田隆之・勝田智紀（Ｈ８～９）・宮川明美（Ｈ８～）・小林まゆ佳（Ｈ８～、調査員）・清水竜太（H10～）

発掘作業員　岩崎寛治郎・岩崎利子・大日方久子・倉島邦子・清水かおる・滝澤歌子・辰野政治・中島芳江
中村忠彦・原山嘉三郎・侍井春子・松雄よし子・松沢たつよ・丸山良子・村橋寿美男

整理作業員　岡沢治子・小泉ひろ美・塚田容子・徳成奈於子・西尾千枝・向山純子・武藤信子

測量等委託　株式会社写真測図研究所

［平成18年度］

平成15年度より機構改革により文化財課埋蔵文化財センターとなる。

調査主体者　長野市教育委員会教育長　立岩睦秀

教育次長　島田政行

総括管理者　文化財課長　北村真一郎

総括責任者　局主幹

兼埋蔵文化財センター所長　矢口忠良（編集、土器実測）

庶務担当係長　宮澤和雄

職員　吉村久江

調査担当係長　青木和明

主査　風間栄一・小林和子

主事　宿野隆史

専門員　森田利枝（縄文時代土器実測・執筆、遺物写真）・小出泰弘
遠藤恵実子・長瀬　出・山野井智子・石丸敦史・山岸千晃
小池勝典・柴田洋孝

石製品材質同定者　長野市立博物館（茶臼山自然史館）学芸員　畠山幸司

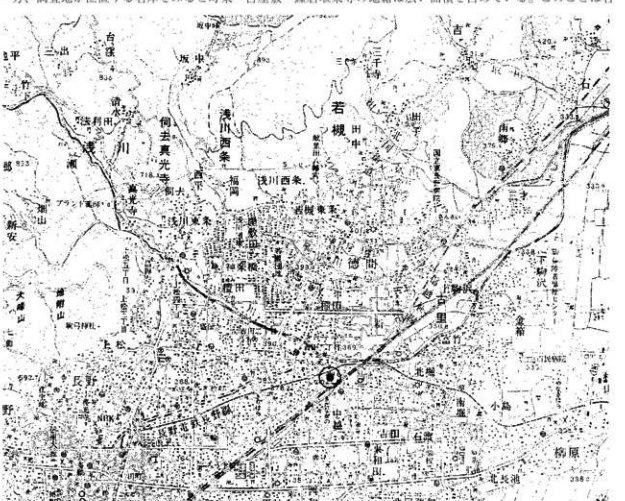
作業調査員　青木喜子（遺物図浄書）・池田寛子（遺構・遺物図浄書）・多羅沢美恵子（石器実測・浄書）
武藤信子（遺構整図）

Ⅱ　調査地周辺の環境

1　地理的環境

旧長野市の最高峰飯縄山（1917.4m）を水源とする浅川は山間地を侵食しながら流下し、真光寺の通称「浅川原口」を扇頂部にして広大な扇状地を形成する。流路を南東に向けていた浅川は、その後千曲川と犀川の影響を受けて調査地付近より北東に向きを変えて流下し千曲川に注ぎ込む。ことほどさように調査地は浅川扇状地の扇端部に位置する。また、吉田小学校西の他力橋あたりから浅川は天井川となり、ＪＲ信越線と交差する部分では線路の上を長野電鉄線とともに高架となる。調査地は浅川に対峙する位置にあり、天井川をみることになる。しかし、天井川化したのはそう古いこととは思えず、字境図（９図）を瞥見すると左岸上流から西山田・砂田・五反田・雲雀河原・南原の字名が流路に沿ってみられ、字の面積も下流にいくに従い拡大し、河川敷化していることが読み取れる。更に下流域の弘誓・四本柳・大上・大道北等の字名地籍は扇状地の地形に沿って八方に広がっている点に注目される。すなわち字名が確立する以前の扇状地内の浅川は、上流域では谷地形で、下部中流域では河川地形に、下流域では乱流地形を呈していたものと推測される。

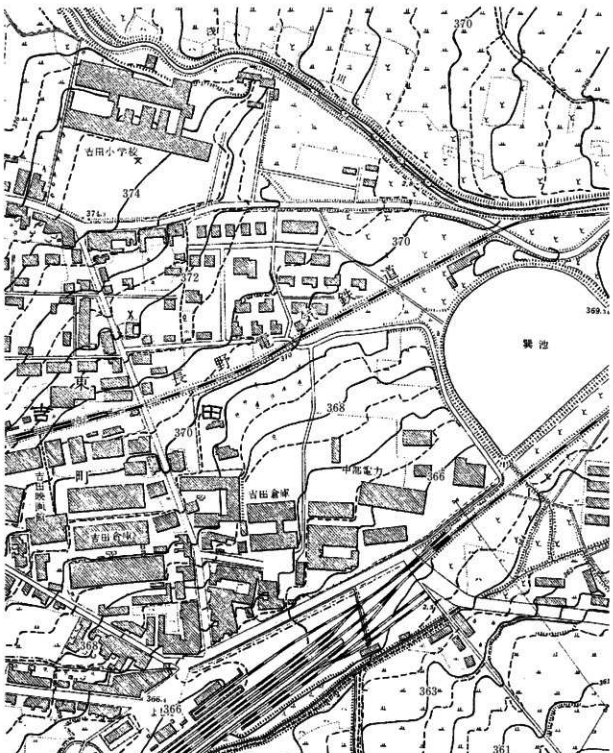
一方、調査地が位置する右岸をみると町東・古屋敷・鐘居堰東等の地籍は広い面積を占めている。このことは右



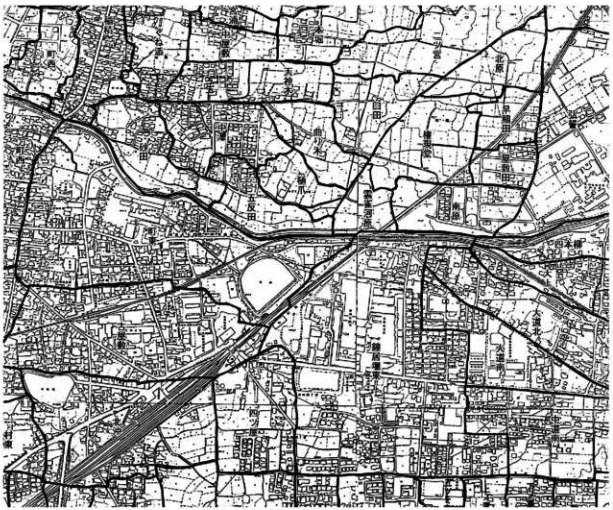
7図　調査位置図（1：50,000）

岸の傾斜はなだらかなものであり、地形の急激な変換がなかったことを意味していることと思え、比較的安定した地であったことをうかがわせる。

調査地の微地形を大正15年測量・昭和27年修正図（８図）からみてみる。調査地は標高366mから368mにかけての地形上に位置しているが、北側が崖地化しており、南側は等高線が南東に張出し微高地になっている点注目される。



８図　調査地周辺の地形図（１：3,000、大正15年測量・昭和27年修正図）



9図　調査地周辺の字境図（1：20,000）

2　考古学的環境

吉田地区は早くから開発の波が押し寄せ、宅地化や各種の事業所の建設が進み、埋蔵文化財包蔵の内容に不明の点が多くあった。ところが近年再開発による新たな展開をみせ、地点的ではあるが徐々に遺跡の存在や内容等が明らかになりつつある（10図）。

1　吉田古屋敷遺跡―北長野駅前Ｂ－１地区市街地再開発事業地点―

平成７年に標記事業に伴い約750㎡を発掘調査した。縄文時代後期前葉敷石住居址１軒・同中葉集石土坑１基・同小期不明の溝址２条、弥生時代中期住居址２軒と環状溝址１基・同後期住居址１軒と木棺墓１基、古墳時代後期住居址５軒、奈良時代住居址１軒、中世溝址等を確認した。縄文時代後期の敷石住居址は長野市において初見のものである。特記遺物に銅製丸鞆が出土している。

長野市教育委員会『浅川扇状地遺跡群　吉田古屋敷遺跡』長野市の埋蔵文化財第84集　平成９年

2　吉田古屋敷遺跡（２）―ボレスタースティションシティ北長野建設地点―

平成15年度に標記の共同住宅建設に伴い約200㎡を発掘調査した。調査地は全体に撹乱が数箇所みられたが、

遺構に影響を与えるものはなかった。検出した遺構は弥生時代中期の住居址３軒・土坑１基、平安時代の合口甕棺墓を含む埋葬土坑２基を検出した。弥生時代中期の土坑は甕が正位の状態で埋置され、他個体の土器を蓋にしているものであるが、性格は不明である。合口甕棺墓からは小児の歯が出土している。この他に縄文時代後期の土器が出土している。

長野市教育委員会『浅川扇状地遺跡群　桐原宮西遺跡・権現堂遺跡（２）・吉田古屋敷遺跡（２）・返目遺跡』長野市の埋蔵文化財第108集　平成17年

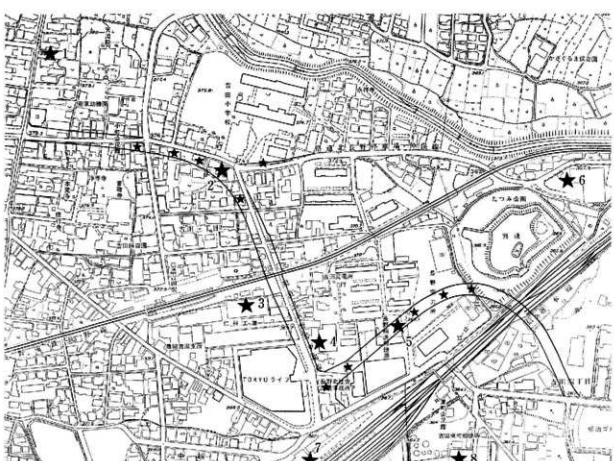
3　浅川扇状地遺跡群―北陸新幹線建設地点―

平成５年度に（財）長野県埋蔵文化財センターにより発掘調査が実施された。本調査地に関与するＪＲ北長野駅周辺（W11・12区）からは縄文時代中期後半の加曽利Ｅ系の埋甕が数個検出され、屋外埋甕が想定されている。この他に弥生時代後期の合口壷棺墓が検出されている。

（財）長野県埋蔵文化財センター他『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書５』平成10年

4　吉田四ツ屋遺跡―グランドハイツ北長野開発事業地点―

平成７年度に北長野駅南側で標記の共同住宅建設に伴い約1,300㎡を発掘調査した。遺構面は２面あり、縄文



吉田町東遺跡（１宅地造成地点、２北長野通り地点）　吉田古屋敷遺跡（３Ｂ－１再開発地点、４共同住宅建設地点、５ＪＲ吉田踏切除去地点）　６辰見池遺跡　７浅川遺跡群（新幹線地点）　８吉田四ツ屋遺跡

10図　調査遺跡分布図（１：5,000）

時代後期の住居址２軒、弥生時代中期の住居址４軒・同後期の住居址２軒・土器棺墓１基、古墳時代前期の住居址２軒・墳丘墓２基、平安時代の住居址６軒・溝址５条の他多数の土坑や小穴を検出した。土器棺墓からはガラス小玉・管玉が出土している。墳丘墓は前方後方形の溝が巡るものと想定される。もう一つの墳丘墓からは壺形埴輪が出土している。

長野市教育委員会『浅川扇状地遺跡群　吉田四ツ屋遺跡　三輪遺跡（６）　裳河原遺跡』長野市の埋蔵文化財第75集　平成８年

5　吉田町東遺跡―民間宅地造成地点―

平成６年度に実施した発掘調査で弥生時代後期住居址２軒、同後期末から古墳時代初頭の大溝址２条、平安時代の住居址２軒を確認した。大溝は同一遺構と考えられ、一辺14mの方形区画を呈するものと思われる。検出面や撹乱層から縄文時代中期の土器片が多量に出土しており、近隣に遺構の存在が予想される。

長野市教育委員会『浅川扇状地遺跡群　二ツ宮遺跡（２）吉田町東遺跡』長野市の埋蔵文化財第71集　平成７年

6　吉田町東遺跡―北長野通り道路改良地点―

平成６年度から17年度にかけて緊急地方道整備事業に伴う発掘調査を断続的に実施した。平成６年度では弥生時代後期住居址１軒、古墳時代後期から奈良時代住居址３軒の他河川跡・溝址・土坑等を検出した。14年度の調査では約1,000㎡を発掘し、弥生時代から平安時代にかけての住居址22軒・井戸址３基・溝址６条のほか浅川旧流路を確認した。住居址の年代主体は古墳時代後期にあり、カマド構築材や住居廃絶後のカマド破壊行為が明瞭に認められるものが半数以上にのぼる。平安時代の住居址は調査地の東側に集中して存在する。

長野市教育委員会『浅川扇状地遺跡群　吉田町東遺跡（２）』　長野市の埋蔵文化財第112集　平成18年

7　辰巳池遺跡―アルピコ建設（株）吉田宅地造成地点―

平成15年度に標記の開発事業に伴い約500㎡を発掘調査した。既存建物により破壊されているものが多くみられたが、住居址10軒（古墳前期１・奈良２・平安７）・土坑３基（弥生中期１・平安２）・平安時代溝址４条の他に小穴を検出した。この他に縄文時代中期後半の土器が出土している。遺跡の性格は浅川縁辺の小集落跡と思われる。

長野市教育委員会『篠ノ井南条遺跡・浅川扇状地遺跡群辰巳池遺跡・本郷前遺跡』長野市の埋蔵文化財第103集　平成16年

この他に吉田地域には、弥生時代後期前半「吉田式土器」の標式遺跡である吉田高校グランド遺跡があるが今回の調査成果に影響がないので割愛する。また、辰巳池遺跡の対岸に位置する稲田南土地区画事業地内で天神木遺跡・樋爪遺跡・権現堂遺跡が調査され、弥生時代中期から中世に至る遺構・遺物を検出している。

長野市教育委員会『長野吉田高校グランド遺跡』長野市の埋蔵文化財第22集　昭和62年

長野市教育委員会『長野吉田高校グランド遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第97集　平成13年

長野市教育委員会『浅川扇状地遺跡群天神木遺跡　樋爪遺跡　権現堂遺跡』長野市の埋蔵文化財第104集　平成16年

Ⅲ 調 査

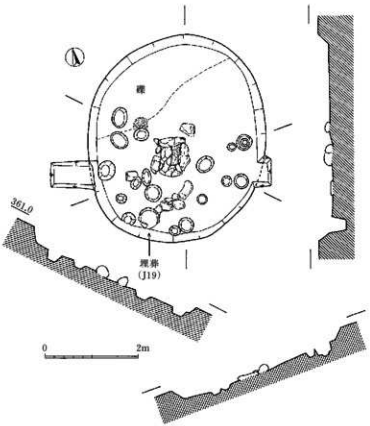
1 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は調査地南側のC区とF区に集中して認められる。特にC区においては弥生時代中期のＳＡ１を除き、遺物の出土状況から他の遺構も当該期の所産と思われる。遺物が出土して時代・時期が把握できる遺構は、C区では住居址３軒・土坑３基・小穴多数、F区では土坑８基・焼土坑１基等を確認した。この他の調査区においても遺構の存在がないわけではなく、B区では土坑（ＳＫ１）・性格不明遺構（ＳＸ１）各１基、A区では土坑（ＳＫ１）１基が検出されている。しかし、住居址等の居住遺構は認められなく、単独的な在り方を示しており集落の外縁に位置する遺構と考えられる。

Ｃ３号住居址（ＣＳＡ３）

［遺構］（11図） C区の北側に位置し、近接遺構に弥生時代のＣＳＡ１がある。形態は円形を基本としているものと思われるが、やや南北軸が長い。南北4.4m・東西3.8m・検出面からの壁高24cmの規模になる。長軸方向はＮ13°Ｅを指す。炉は遺構の南側に偏して構築された「コ」の字形態の石囲炉である。石材は長軸60cm程の河原石を各辺１個が用いられているが、西側は２個の石材が確認されたものの炉の構築材とは考えられなく、住居廃棄後の所産と思われる。深さは炉石頂部から30cm程になる。小穴が10数個検出したが、主柱穴としての規格ある配列を見出せないし、北側からは小穴が確認されなかった。そのため本住居址における小屋組みは不明と言わざるをえない。南壁際に大型の深鉢の胴上半部を埋置した埋甕（14図19）が認められ、この位置が入口部と想定される。

［遺物］（12～14図１～19） １・６はＲＬ縄文で幅広な沈線楕円文、蕨手文で区画される。２は平口縁に１箇所把手のつく深鉢。地文はＬＲ縄文で口縁部無文帯直下に横回転、その下は縦方向に回転する。胴部上半は４単位の沈線渦巻き文、下半は逆Ｕ字文で区画される。３は４単位の波状口縁深鉢。地文はＲＬ縄文を主に縦方向に回転する。胴部は沈線の連結Ｕ字文によって区画される。４は波状口縁の深鉢で嘴状の突起を有するもの。５は平口縁の深鉢。地文はＲＬ縄文。低平な隆帯によって区画され、区画内は幅広にナデられる。７は口縁部無文帯から下は条線地文のみ。８は台付深鉢。垂下する隆帯によって８単位に区画される。地文はＬＲ縄文。９は注口土器の注口部。10・11・12も圧痕隆帯を持つ。10の地文はＬＲ縄文で口縁部に１段横方向に回転させる。11の地文は無節の縄文。12は沈線地文。14はＲＬ縄文地文で口縁部下を強くナデまわす。15はＲＬ縄文地文に沈線の蕨手懸垂文と逆Ｕ字文で区画した鉢。13・16は把手が両側に付くいわゆる両耳壺。ともに把手の中央を部分を凹ませる。16は隆帯で横位区画文をつくる。地文はＬＲ縄文。13はＲＬ縄文を幅広の沈線で区画する。19は楕形深鉢の埋甕。圧痕隆帯を持つ。口縁部無文帯下に四分の一巡らせた隆帯を片方上巻き、片方垂下させて巻く。地文はＬＲ縄文。胴部に無文帯をつくる。17は土偶。腹面・背面ともに沈線で文様を描く。胸部上には爪形状の圧痕が残る。18は土製円盤。［中期後葉・加曽利Ｅ式Ⅱ～Ⅳ期］：深鉢が多数を占め、他に台付き深鉢・注口土器・鉢・両耳壺が出土している。土製品は土偶・土製円盤がある。土器の系統として、加曽利Ｅ系（２・３・５・13～16）、大木系（１・４・６）、曽利系（７）、圧痕隆帯文系（10～12・19）が混在する。曽利系の割合は低い。加曽利Ｅ系土器；口縁部に幅狭の無文帯を持ち、区画を沈線で描くものと隆帯で描くものがあるが前者の割合が高い。大木系土器；特徴的な突起を持ち、屋代遺跡群出土のいわゆる「大木系土器取り残され型」に相当するものであろう。圧痕隆帯文系土器；縄文地文と短沈線地文があり、後者は中・南信に分布を持

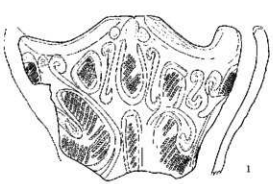


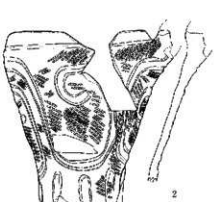
11図　ＣＳＡ３実測図（１：80）

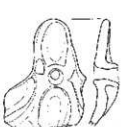
Ⅲ－１　ＣＳＡ３

Ⅲ－２　ＣＳＡ３炉

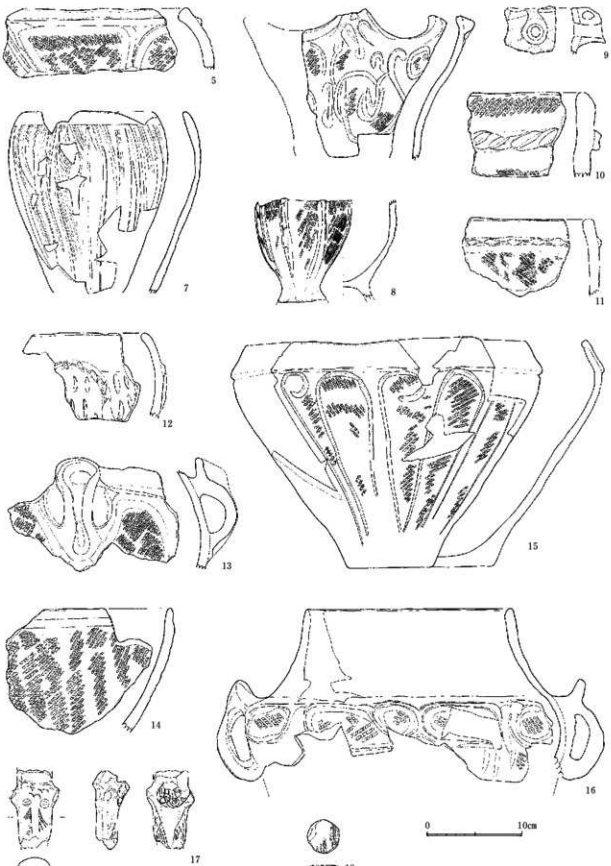
Ⅲ－３　ＣＳＡ３埋甕



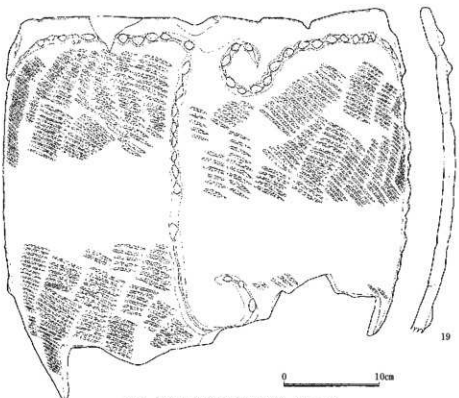




12図　ＣＳＡ３出土土器実測図（１）（１：４）



13図　ＣＳＡ３出土土器（２）・土製品実測図（１：４）



14図　ＣＳＡ３埋甕実測図（３）（１：４）

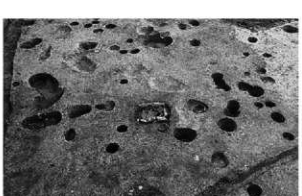
つ唐草文系土器の影響を受けたものかもしれない。隆帯の形態も様々である。

この他に打製石鏃２個（27図78・79）・打製石斧11個（28図105～115）・チャート製の磨製石斧（27図103）・砥石（32図190）・剥片石器（31図178）が出土している。

Ｃ４号住居址（ＣＳＡ４）

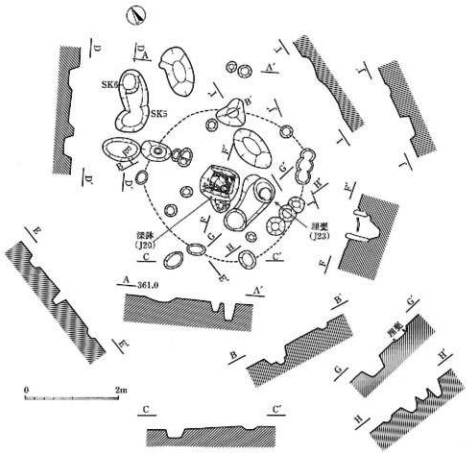
［遺構］（15図）　Ｃ区の南西に位置し、炉を中心にして円形に取り巻く小穴を以って住居址と認定した。もとよりこれは主柱穴の範囲を想定するもので住居址の規模を示すものではない。形態は円形を呈し、柱穴間における規模は南北3.4m・東西3.2mを測る。炉は「コ」の字形を呈する石囲炉で、長軸50cm前後の角礫が配置される。深さは65cm程になり、南東隅に小型の深鉢（16図20）が据え置かれ、底面には土器片（24）が敷かれていた。炉の開口部方向はＮ43°Ｗ方向を指し、軸線上の柱穴間中央に両耳壷（23）が埋設されている。柱穴は等間隔ではないが推定部（点線）のものをあて、６個円形配列を予想する。

［遺物］（16図20～24）　20・21は深鉢。地文は無文で器面は板状工具によって平滑に調整される。20は口縁部下に



Ⅲ－４　ＣＳＡ４

Ⅲ－５　ＣＳＡ４炉



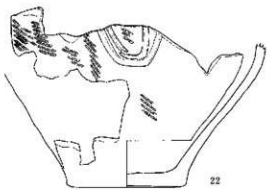
15図　ＣＳＡ４、ＣＳＫ５～６実測図（１：80）

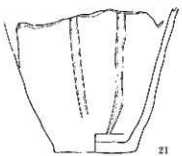
断面三角形の隆帯を巡らす。21は幅広の沈線２条が２単位配される。22は鉢であろう。ＬＲ縄文地文に縦位の沈線楕円文で区画される。23は両耳壺。把手は失われている。肩部に隆帯を巡らし、ＲＬ縄文を縦方向に回転させる。24は椭形深鉢。口縁部下に圧痕のある隆帯を巡らし、ＬＲ縄文を斜め方向に回転させる。縄文原体結節部の回転痕が残る。[中期末・加曾利Ｅ式Ⅳ期]：加曾利Ｅ系の両耳壺は頸部の文様帯を失い地文のみとなる。圧痕隆帯文系の深鉢は１条の圧痕隆帯を口縁部にめぐらせる。

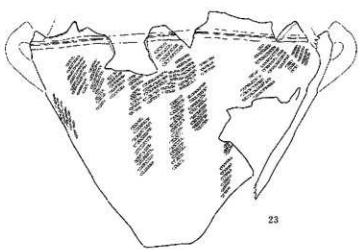
石器としては打製石斧（28図116）・磨製石斧（31図174）が各１個出土している。

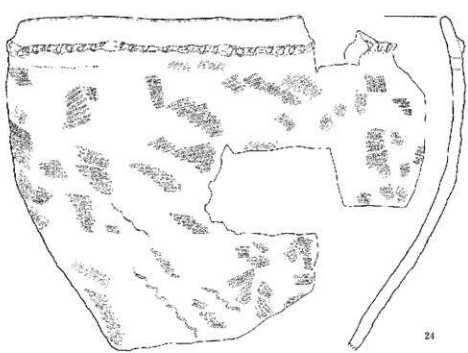
Ｃ５号住居址（ＣＳＡ５）

[遺構]（17図）　ＣＳＡ４の東に近接する。この遺構も炉を中心にして円形に取り巻く小穴を以って住居址と認定し、主柱穴の範囲を想定したもので住居址の規模を示すものではない。形態は円形を呈し、柱穴間における規模は直径3.7m前後になるものと思われる。南西部に巾着袋形を呈する河原石による敷石遺構が付属し、所謂「柄鏡形敷石住居址」の範疇に入るものである。この部位を入口部とすれば炉芯にかけての住居址の軸線はN31°Ｅ方向になる。柄部の敷石は拳大から人頭大の河原石を長軸が南北になるようにほぼ平担に配置されている。長軸1.65m・短軸最大幅1.3m・掘り込み５cm程の規模になる。炉は推定遺構の中央に設けられるが、北側で土坑状の遺構と重複している。石囲の形跡は認められなく、長軸（南北）94cm・短軸60cm・最深38cm規模の隅丸長方形を呈する土坑状のものである。北側に土器片の貼付けが認められ、土器敷炉の可能性もある。柱穴はＣＳＡ４と同様に等間隔ではないが推定部（点線）のものをあて、６個円形配列を予想する。この他住居址内に３基の土坑状掘り込みや数個の小穴がみられるが、本遺構に関与するものかは不明である。ただ、敷石に接続する土坑は外縁に石列がみられることから住居址に付属する可能性がある。



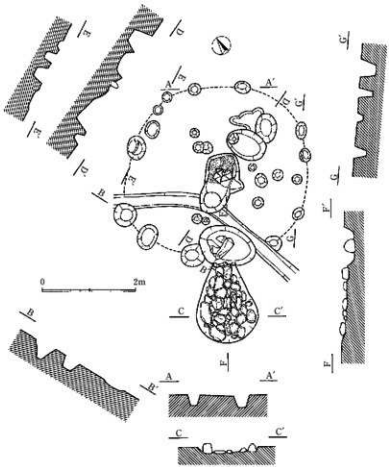






0 10cm

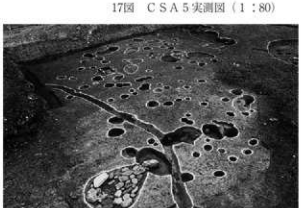
16図　ＣＳＡ４出土土器実測図（１：４）



17図　ＣＳＡ５実測図（１：80）

Ⅲ－６　ＣＳＡ５

Ⅲ－７　ＣＳＡ５敷石



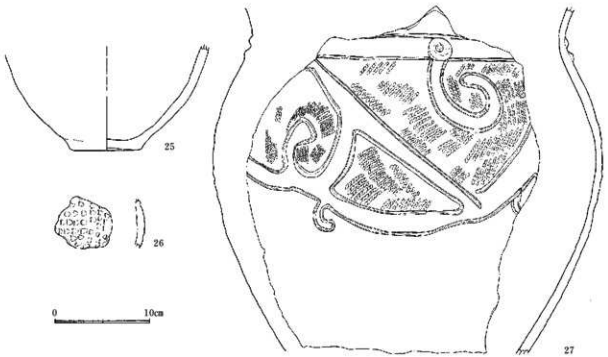
Ⅲ－８　ＣＳＡ４（上）・５（下）

Ⅲ－９　ＣＳＡ５炉

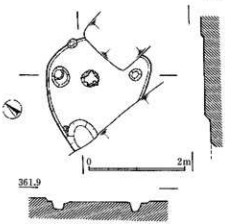
［遺物］(18図)　25は無文の鉢。丁寧な器面調整が施される。26は中越地方の後期初頭にみられる三十稲場式土器の破片である。27は称名寺式の深鉢。地文はＬＲ縄文。沈線によるＪ字文と斜行文で区画され、頭部には刺突痕のある円形浮文が貼付される。［後期初頭］：三十稲場式土器・称名寺式土器の深鉢。

Ｂ１号性格不明遺構（ＢＳＸ１）

［遺構］(19図)　Ｂ区の北東隅部からトレンチ調査により確認された遺構である。部分検出であるため形態は定かでないが、壁の状態から隅丸三角形を呈するものと思われる。検出面からの壁高は６㎝である。遺構内から柱穴と思われる２個の小穴を確認したが、炉および焼土等は認められない。小穴間に性格不明の深鉢（19図28）が掘



18図　ＣＳＡ５出土土器実測図（１：４）



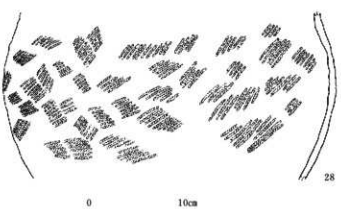
19図　ＢＳＸ１実測図（１：80）

Ⅲ－10　ＢＳＸ１

え置かれていた。

［遺物］(20図28)　口縁部と底部を欠いた状態で出土した。ＬＲ縄文地文のみの深鉢。

［中期後葉？］



20図　ＢＳＸ１出土土器実測図（１：４）

Ａ１号土坑（ＡＳＫ１）

[遺構]（21図） Ａ区で唯一の当該期の遺構である。調査区の西側に所在する。形態は不整円形を呈し、南北1.0m・東西1.0m・深さ65cmを測る。底面は平坦である。

[遺物]（23図29～40） 29・30は波状口縁の浅鉢の波頂部。沈線によって施文される。33は土偶の右足。34・37は深鉢の把手部分。40は沈線によるM字状の区画であろう。[後期]：37・40は称名寺式、他は堀之内式土器？。

Ｂ１号土坑（ＢＳＫ１）

[遺構]（21図） Ｂ区の北西に位置する。この調査区で当該期の遺物が出土している遺構は他にＢＳＸ１がある。形態は不整隅丸方形状を呈し、南北0.7m・東西0.8m・深さ24cmの規模である。底面は幾分鍋底状になる。

[遺物]（23図41） 頸部が強く括れる深鉢。頸部より下に施文される。地文はＲＬ縄文で、沈線によるＲ字状の区画文が描かれる。[後期初頭]：称名寺式土器。

Ｃ２号土坑（ＣＳＫ２）

[遺構]（21図） 当該期のＦＳＡ４の北東に隣接している。形態は円形を呈し、直径0.95m・深さ25cm程の規模になる。底面は鍋底状を呈する。

[遺物]（23図42） 頸部が緩く括れる器形の深鉢。緩い波状口縁部に突起が１箇所付くものと考えられる。地文はＬＲ縄文で、沈線によるM字状の区画文が描かれる。[後期初頭]：称名寺式土器。

Ｃ３号土坑（ＣＳＫ３）

[遺構]（22図） Ｃ区の北西に位置し、ＣＳＫ４・10と重複関係にある。形態は楕円形土坑が２基連なるような形を呈する。長軸（南北）推定3.6m・最大幅0.88m・深さ15cm程の規模を想定する。底面は平坦である。

[遺物]（28図123） 打製石斧が１個出土している。

Ｃ10号土坑（ＣＳＫ10）

[遺構]（22図） ＣＳＫ３と重複し、西側は調査区域外にある。形態は楕円形を呈し、長軸（南北）の規模は1.25m前後と予想する。検出面からの掘り込みは30cmである。

[遺物]（23図43～46） 43は圧痕隆帯を持つ深鉢。綾杉状の沈線地文。44は深鉢の口縁部。頸部が強く括れる器形と考えられる。内外面に沈線で施文される。45は深鉢の胴部。沈線で渦巻き文と斜行文が施文される。46は中空の突起を持つ土器で全体形は不明である。沈線で渦巻き状に区画する。地文はＬＲ縄文。[中期後葉～後期前葉]：圧痕隆帯文系の深鉢は下方に渦を巻くタイプ（43）。加曽利Ｅ系の異形土器（46）。44・45は堀之内Ｉ式土器。

打製石斧が７個（28図117～122、31図173）出土している。すべて破損品である。

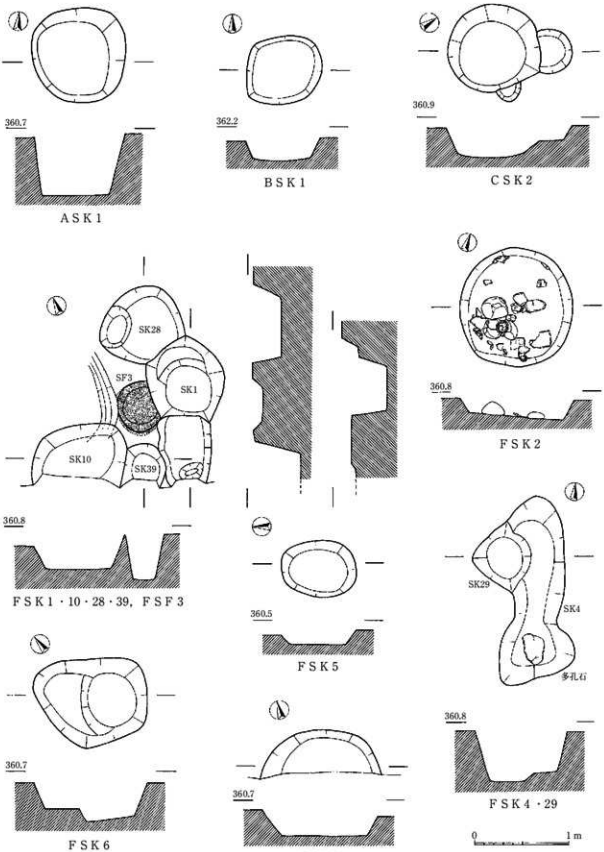
Ｆ１号土坑（ＦＳＫ１）

[遺構]（21図） 調査地の北西側に位置する土坑群のひとつで、ＦＳＫ28・ＦＳＦ３と重複関係にある。このうちＦＳＫ28は当該期の遺構であるので、ＦＳＦ３も当該期の可能性がある。形態は二段掘りの様相がみられるが、他の遺構との重複を考慮して円形と推定する。規模は直径0.8m・深さ50cmである。ちなみにＦＳＦ３は遺構全面に焼土が認められ、直径0.55m・深さ14cmの円形土坑である。

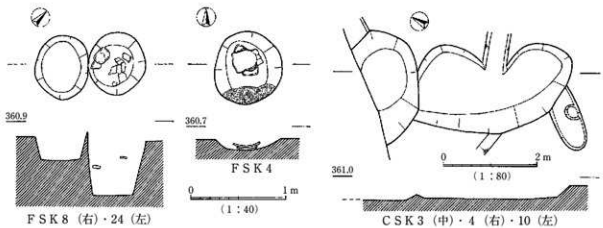
[遺物]（25図57・58） 58は無文の深鉢。内外面とも丁寧に器面調整される。57は器台の類か。外面は板状工具で調整される。[後期前葉]：堀之内Ⅱ式土器の新しい方。石神類型？。

Ｆ２号土坑（ＦＳＫ２）

[遺構]（21図） Ｆ区の北に位置し、ＦＳＤＺ１に近接する。形態は円形を呈し、直径1.2m・深さ15～20cmの規模になる。底面は平坦であるが、西から東に傾斜を有する。底面および覆土には自然礫とともに土器片が混在していた。



21図　土坑・焼土坑実測図（1：40）



22図　土坑・焼土坑実測図（1：40、1：80）

[遺物]（24図49～56）　53～55は深鉢の底部。55は網代底。49～51は波状口縁の深鉢。いずれも口縁部が無文帯で、1箇所か2箇所に突起を持つと考えられる。49はＬＲ縄文の地文。円環状の突起を持つ。50はＬＲ縄文の地文。2条の細い沈線によって連結U字状に区画される。「8」の字状の突起を持つ。51はＬＲ縄文の地文。胴部上半は沈線による連結U字文・下半は逆U字文で区画される。円環状の突起を持つ。52・56は大型の深鉢。低平な隆帯が口縁部下に巡る。52はＬＲ縄文の地文。56はＲＬ縄文の地文。[縄文時代中期末～後期初頭]：加曾利Ｅ系の波状口縁深鉢（49～51）と粗製深鉢（52・56）。

Ｆ４号土坑（ＦＳＫ４）

[遺構]（21図）　調査地の北西側に位置する土坑群のひとつで、ＦＳＫ29と重複関係にある。形態は溝状を呈し、長軸（南北）２ｍ前後の規模になる。深さは45cmを測り、南端底面から自然石利用の多孔石が出土した。

Ｆ５号土坑（ＦＳＫ５）

[遺構]（21図）　調査地の北西側に位置する土坑群のひとつであり、単独での検出である。形態は楕円形を呈し、長軸（南北）0.8m・短軸0.6m・深さ17cmの規模である。底面は平坦である。

[遺物]（23図47）　土偶の足の部分。外側に踏ん張る形態である。打製石斧１個（29図131）が出土している。

Ｆ６号土坑（ＦＳＫ６）

[遺構]（21図）　Ｆ区の中央南側に位置し、北西側土坑群のひとつである。遺構は２基の遺構が重複しているものとみられ、本土坑は隅丸長方形を呈するものをあてる。長軸0.85m・短軸0.7mを測り、底面は西に傾斜して西壁下で40cmの深さになる。

[遺物]（25図60）　底部から直線的に立ち上がる朝顔形の深鉢。土圧によって歪んだものか、口縁から胴部が扁平な状態に復元された。地文はＬＲ縄文で、渦巻き文と斜行文、その上下に帯縄文が配される。内面口縁部には２条の沈線が引かれる。[後期前葉]：堀之内Ⅱ式土器の新しいものか加曾利Ｂ式土器。

Ｆ８号土坑（ＦＳＫ８）

[遺構]（22図）　Ｆ区の北側中央に位置し、ＦＳＫ24と接する。形態は円形を呈し、直径0.65m・深さ65cmの規模になる。ちなみにＦＳＫ28は形態が円形で、長軸0.68m・深さ25cmを測る。

[遺物]（23図48）　深鉢の底部。板状工具で器面調整される。土錘状の土製品（27図104）が出土している。

Ｆ28号土坑（ＦＳＫ28）

[遺構]（21図）　当該期のＦＳＫ１と重複関係にあり、西側に小穴がみられるが本遺構と関係ないものと思われる。形態は卵形を呈し、長軸（南北）0.83m・深さ20cmを測る。底面は平坦である。

［遺物］（26図77） ミニチュア土器。手づくね成形。

Ｆ32号土坑（ＦＳＫ32）

［遺構］（21図） 調査地の北西側に位置する土坑群のひとつであるが、南側半分ほどは調査区域外にある。形態は円形を呈するものと思われ、検出部から直径1.2m・深さ25cmの規模を推定する。底面は平坦である。

［遺物］（25図61） 波状口縁深鉢の突起部分。地文はＲＬ縄文。幅広の沈線楕円文によって区画される。［中期後葉］：大木系土器。

Ｆ４号焼土坑（ＦＳＦ４）

［遺構］（22図） ＦＳＫ３の西に位置し、単独検出である。形態は円形を呈し、長軸（南北）0.88m・深さ12cmの規模になる。底面は鍋底状になり、南側の一部に焼上が認められた。

［遺物］（25図59） ２条の垂下する圧痕隆帯を持つ深鉢。地文はＲＬ縄文。［中期後葉］：圧痕隆帯文土器。

Ａ区検出面の遺物 石製品（31・32図）：古墳時代初頭のＡＳＤ１から磨製石斧３本（175・176、183）・磨石（184）・石皿（192・197）・磨台石（193）が出土した他、検出面から打製石鏃（27図82）１個を得た。

Ｃ区検出面の遺物 土器（25図62～64）：62は弥生時代の住居（ＣＳＡ１）の床面下から出土した。平口縁に１箇所突起が付く深鉢。地文はＬＲ縄文で沈線によるＪ字状の区画文が描かれる。63は波状口縁の浅鉢。内外面に沈線で施文される。64は圧痕隆帯を持つ深鉢。地文は棒状工具による押圧痕。［後期初頭～前葉］：62は称名寺式土器。63は堀之内式土器。64は三十稲場式土器か。

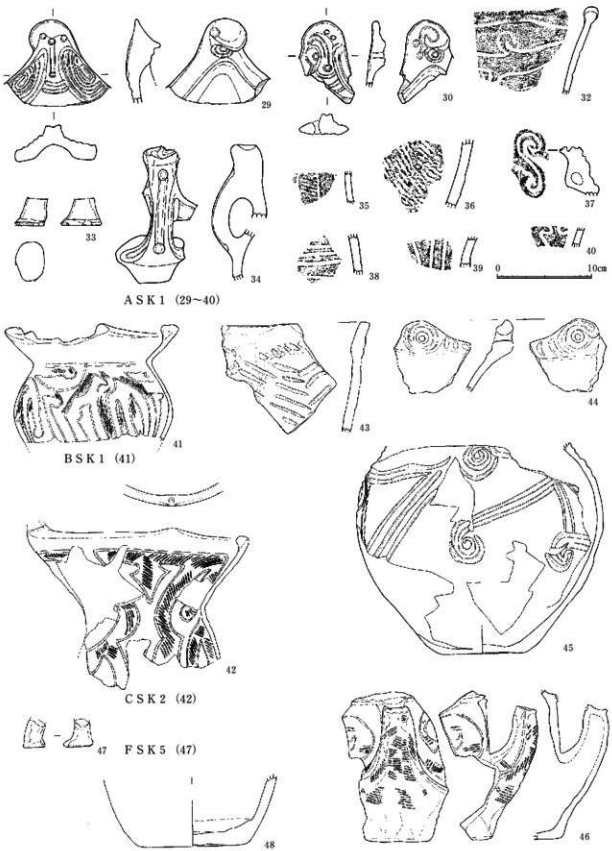
石製品（29・32図）：検出面から打製石斧６個（124～129）・多孔石（191）１個が採集されている。

Ｄ区検出面の遺物 土器（26図65～67）：65・66は細い沈線によって結紐文が描かれる。67は丸胴に大きく外反する頸部をもつ器形であると考えられ、口縁外面は帯状に沈線で施文、口縁部から頸部にかけて刻みをつけた細い隆帯が斜めに貼付けられる。［後期前葉］：堀之内Ⅱ式土器の新しい方。石神類型？

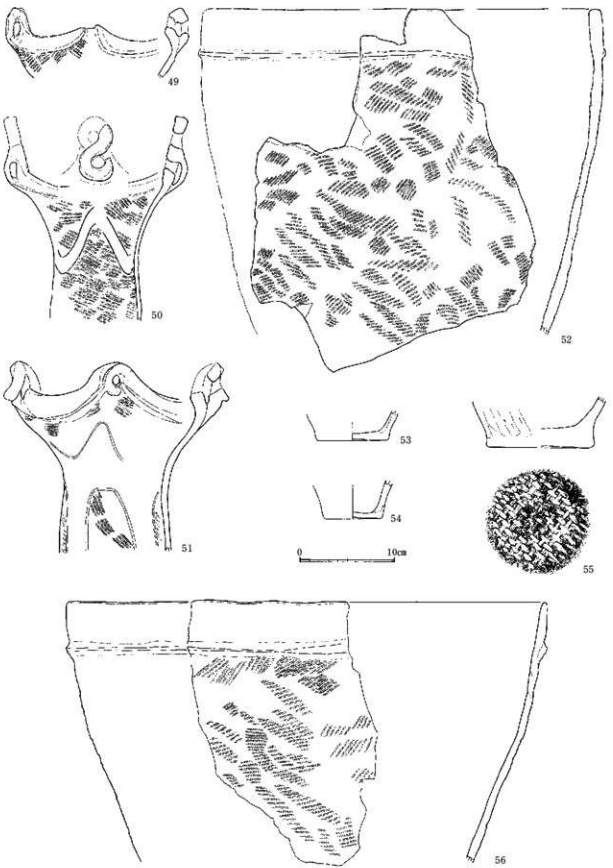
Ｅ区検出面の遺物 石製品（29図）：打製石斧１個（130）採集されているにすぎない。

Ｆ区検出面の遺物 土器（26図68～76）：68は深鉢の胴部。地文はＬＲ縄文。対になった沈線楕円文を５単位配し、さらに単位ごとを区画する。区画間に蕨手文が配される。70は平口縁の深鉢。地文はＲＬ縄文。沈線逆Ｕ字文によって区画されるものであろう。71は深鉢の底部。地文はＬＲ縄文。沈線によって区画される。74は無文の深鉢底部。内外面とも板状工具で調整される。69は両耳壺の把手部分。地文はＬＲ縄文。肩部は隆帯で区画されるものと考えられる。72は頸部で括れる器形の深鉢。口縁部に沈線による文様帯を持ち、刻みを持つ隆帯が頸部屈曲部まで垂下して貼付けられる。それと平行して２条の沈線の間に竹管による円形の押捺を施した帯が配される。胴部は斜行文と半月状の沈線によって区画され、地文はＬＲ縄文である。73は深鉢で地文は無節Ｒ縄文。胴部上半は沈線連結Ｕ字文、下半は逆Ｕ字文によって区画される。75は耳栓と思われる円筒形土製品。76は土偶か。［中期後葉～後期前葉］：68は加曾利ＥⅢ式、69・70・71・73はいずれも加曾利ＥⅢ式かⅣ式期。72は堀之内式土器。

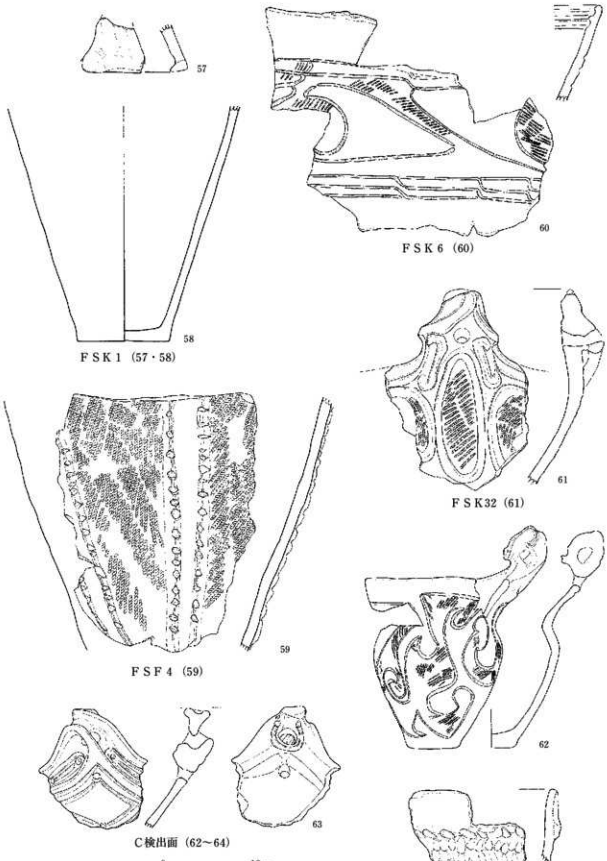
石製品（29～32図）：打製石斧が前記した遺構の他にＦＳＫ３（132～134）・ＦＳＫ７（135）・ＦＳＫ10（136）・ＦＳＫ26（137）・ＦＳＫ30（138）・ＦＳＫ39（139）・ＦＳＰ（140・148）から出土している。土器等の出土が認められなかったものの当該期の遺構と考えてもよいだろう。この他弥生時代後期の遺構からも出土しているが、混入品（143～147・149～151）である。また、平安時代の集石遺構（ＦＳＮ）から11個（161・163～172）の打製石斧が出土している。他は検出面からの採集品である。この他の器種として、石核と考えられもの（179・181）・掻器（180）・石棒（182）・凹石（186～188）・石皿（194・195）・磨台石（196）等が出土している。



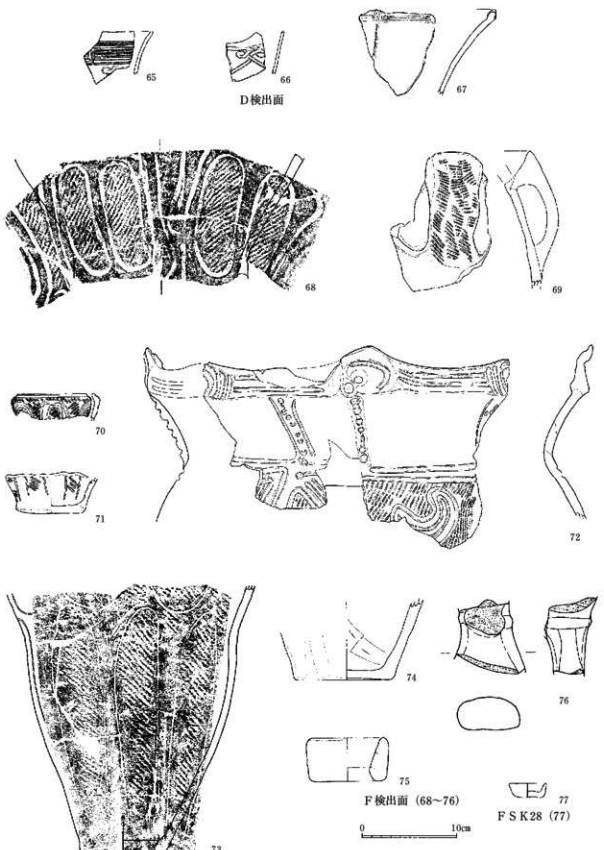
23図　土坑出土土器・土製品実測図（1：4）



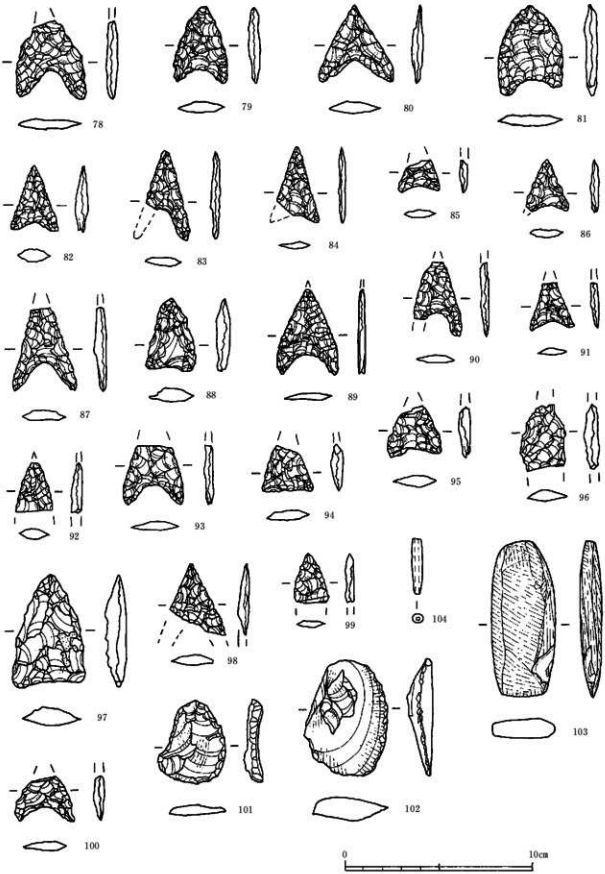
24図　ＦＳＫ２出土土器実測図（１：４）



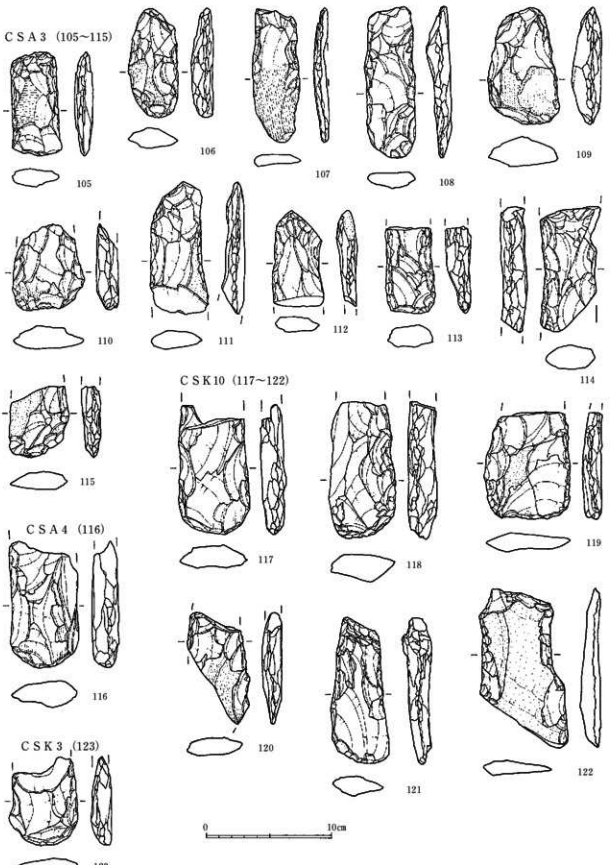
25図　土坑・検出面出土土器実測図（1：4）



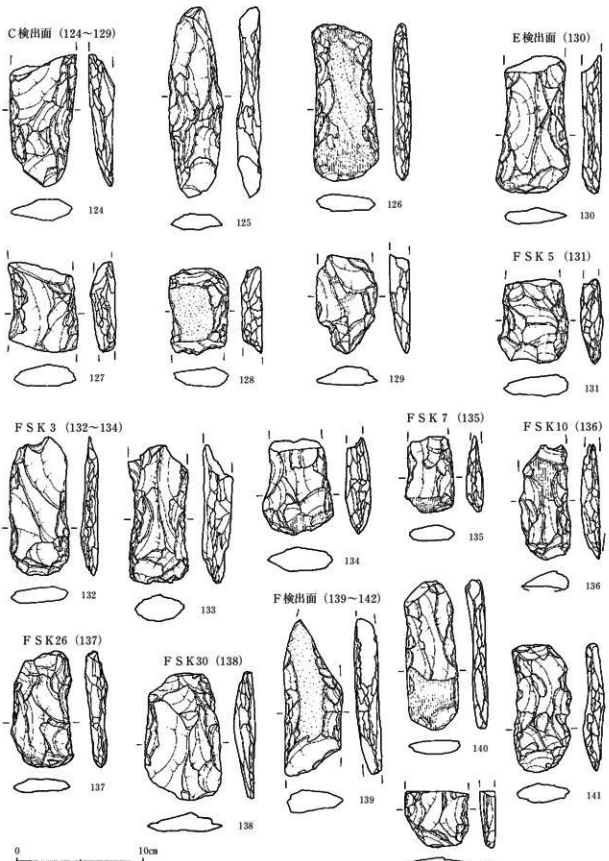
26図　土坑・検出面出土土器・土製品実測図（1：4）



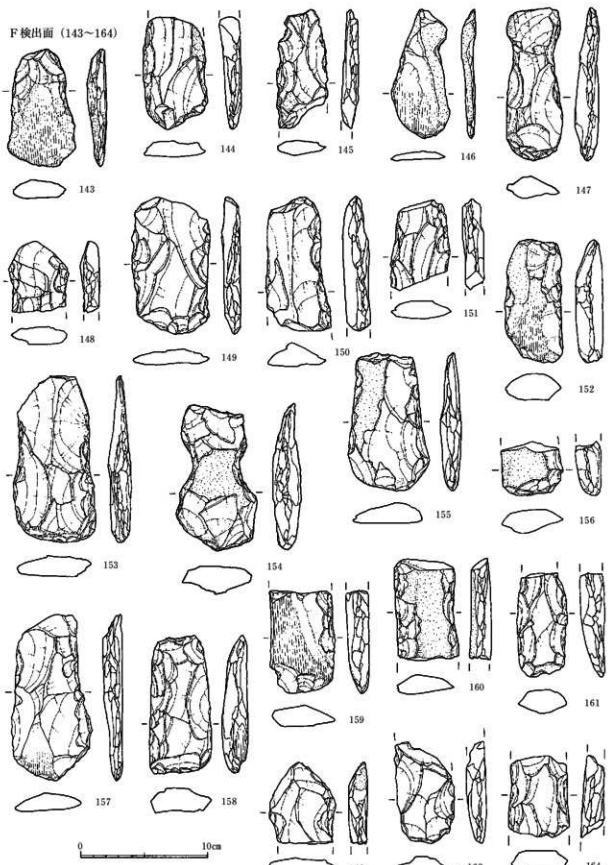
27図　小型石器・土製品実測図（1：1）



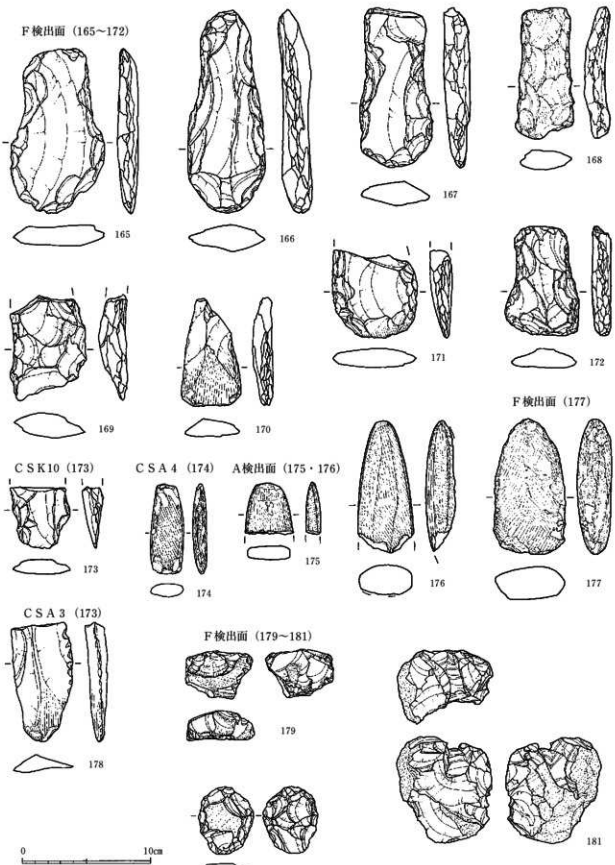
28図　住居址・土坑出土石器実測図（1；3）



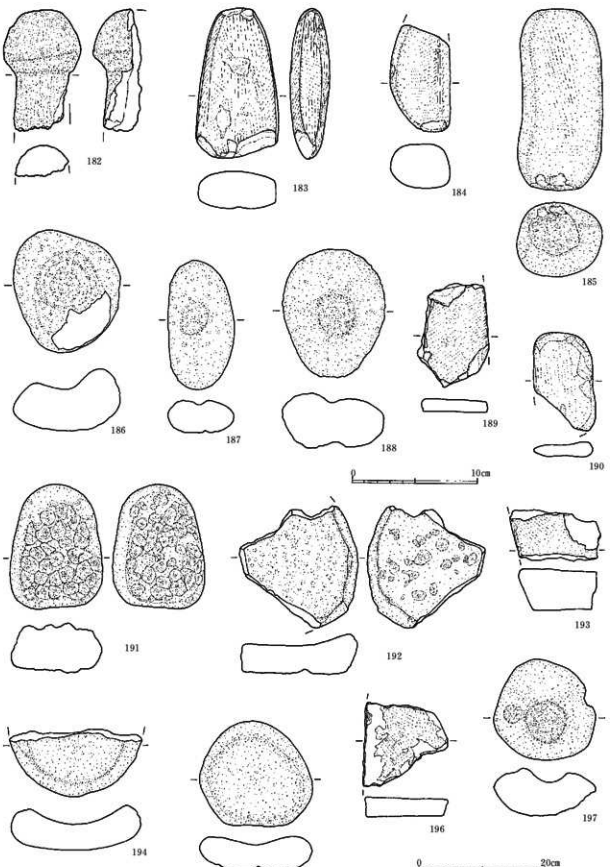
29図　土坑・検出面出土石器実測図（１：３）



30図　検出面出土石器実測図（１：３）



31図　住居址・検出面出土石器実測図（1：3）



32図　住居址・検出面土坑出土石器実測図（1：3，191～197は1：6）

CSA3

2

6

15

1

7

16

17

3

8

19

18

CSA4

20

21

23

CSA5

25

27

BSK1

41

CSK10

45

46

CSK2

42

FSK1

58

FSK2

50

51

FSK32

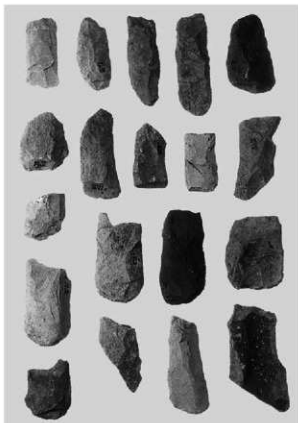
62

F検出面

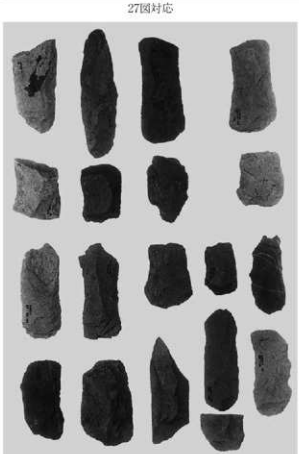
68

73

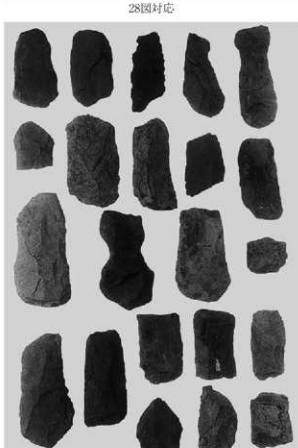
27図対応



28図対応



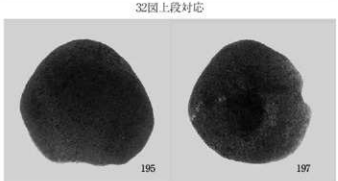
29図対応



30図対応

31図対応

32図上段対応



石製品・土製品観察表（27図）

番号	種　別	材　質	長・基底幅(cm)	重(g)	出土遺構等	備　考
78	打製石鏃	チャート	(2)・1.8	(1.02)	ＣＳＡ３	遺構所産
79	〃	黒曜石	2・1.8	0.67	〃	〃
80	〃	頁岩	2・1.95	0.72	ＦＳＡ８	
81	〃	黒曜石	2.35・1.6	1.33	〃	
82	〃	鉄石英	1.7・1.2	0.25	A検出面	
83	〃	黒曜石	2.4・(1.3)	(0.38)	C検出面	
84	〃	〃	2.0・(1.3)	(0.29)	ＦＳＡ１	
85	〃	〃	(0.9)・1.1	(0.17)	〃	
86	〃	〃	1.35・1.2	0.23	ＦＳＡ２	
87	〃	頁岩	(2.2)・1.7	(0.82)	ＦＳＡ７	
88	〃	チャート	1.9・1.3	0.88	ＦＳＡ６	
89	〃	〃	2.3・1.5	0.62	ＦＳＡ３	
90	〃	〃	(1.9)・(1.2)	(0.39)	F検出面	
91	〃	〃	(1.2)・1.15	(0.20)	〃	

番号	種　別	材　質	長・基底幅(cm)	重(g)	出土遺構等	備　考
92	打製石鏃	黒曜石	(1.3)・	(0.30)	F検出面	
93	〃	チャート	(1.6)・1.5	(0.59)	〃	
94	〃	黒曜石	(1.2)・1.35	(0.39)	ＦＳＸ１	
95	〃	〃	(1.4)・1.3	(0.41)	ＦＳＡ６	
96	〃	〃	(1.8)・(1.1)	(0.67)	F検出面	
97	〃	チャート	2.9・2.0	2.80	ＣＳＤ１	
98	〃	黒曜石	(1.8)・	(0.40)		
99	〃	〃	1.3・0.9	(0.24)		
100	〃	〃	(1.1)・1.6	(0.36)	ＦＳＮ１	
101	剥片石器	黒曜石	2.2・1.7・0.4	1	ＣＳＡ５	遺構所産
102	〃	〃	3.1・2.2・0.7	4	ＦＳＡ８	
103	磨製石斧	玉髄	4.1・1.7・0.5	8	ＣＳＡ３	遺構所産
104	土　錘	土	(1.5)・幅0.3	(0.08)	ＦＳＫ８	〃

（注）長（破損残長）・基底幅（推定幅）、重量（破損重量）

石製品観察表（28～31図）

番号	種別	材質	長・幅・厚(cm)	重(g)	出土遺構等	備考
105	打製石斧	安山岩	5.5・3.5・0.9	49	ＣＳＡ３	遺構所産・磨耗
106	〃	〃	5.8・2.7・1.1	79	〃	〃 〃磨耗
107	〃	〃	8.3・2.5・0.7	56	〃	〃 〃 〃
108	〃	〃	8.2・3.7・2.1	102	〃	〃
109	〃	〃	6.2・3.7・2.1	132	〃	〃 〃磨耗
110	〃	〃	・3.9・0.7		ＣＳＡ３	遺構所産・〃
111	〃	〃	・3.0・1.3		〃	〃
112	〃	〃	・2.9・1.0		〃	〃
113	〃	〃	・2.6・1.3		〃	〃
114	〃	〃	・2.8・1.3		〃	〃
115	〃	〃	・3.2・0.9		〃	〃
116	〃	〃	・3.6・1.4		ＣＳＡ４	〃 〃磨耗
117	〃	〃	・3.8・1.3		ＣＳＫ10	〃 〃 〃
118	〃	〃	・4.6・1.5		〃	〃
119	〃	〃	5.7・4.6・1.3	126	〃	〃 〃磨耗
120	〃	〃	・3.0・0.6		〃	〃
121	〃	〃	7.8・3.0・1.6	120	〃	〃
122	〃	〃	・4.5・1.1		〃	〃
123	〃	〃	・3.7・1.1		ＣＳＫ３	〃 〃磨耗
124	〃	〃	・3.6・1.4		Ｃ検出面	
125	〃	安山岩	10.2・2.9・1.3	136	〃	
126	〃	硅質砂岩	8.4・3.5・1.0	126	〃	磨耗
127	〃	〃	・3.7・1.4		〃	
128	〃	〃	・3.2・1.4		〃	
129	〃	〃	・3.3・1.1		〃	
130	〃	〃	・3.9・1.0		Ｅ検出面	磨耗
131	〃	〃	・3.8・1.2		ＦＳＫ５	〃
132	〃	〃	7.4・3.2・0.9	82	ＦＳＫ３	
133	〃	〃	・3.2・1.5		〃	
134	〃	〃	・3.7・1.4		〃	磨耗
135	〃	〃	4.1・2.7・0.9	37	ＦＳＫ７	〃
136	〃	〃	6.2・2.6・0.9	49	ＦＳＫ10	
137	〃	〃	6.2・3.2・1.1	76	ＦＳＫ26	磨耗
138	〃	〃	6.7・4.0・1.1	83	ＦＳＫ30	
139	〃	〃	・3.1・1.2		Ｆ小穴	
140	〃	〃	7.9・2.8・0.8		〃	磨耗

番号	種別	材質	長・幅・厚(cm)	重(g)	出土遺構等	備考
141	打製石斧	安山岩	6.8・3.1・1.1	71	ＦＳＡ５	
142	〃	〃	・3.4・0.9		ＦＳＡ７	
143	〃	〃	6.3・3.6・1.0	76	ＦＳＡ２	磨耗
144	〃	〃	・3.3・1.1		〃	〃
145	〃	〃	・2.8・0.9		ＦＳＡ３	
146	〃	〃	7.0・3.0・0.8	42	ＦＳＡ６	磨耗
147	〃	〃	8.2・3.1・1.3	46	〃	〃
148	〃	〃	・3.2・1.0		Ｆ小穴	
149	〃	〃	7.4・4.2・0.9	111	ＦＳＡ６	
150	〃	〃	7.1・3.2・1.4	120	〃	
151	〃	〃	・3.2・1.1		〃	
152	〃	〃	6.5・3.1・1.4	121	Ｆ検出面	磨耗
153	〃	〃	8.9・4.3・1.2	165	〃	〃
154	〃	〃	7.9・4.4・1.5	147	ＦＳＸ３	〃
155	〃	〃	7.2・4.4・1.2	126	Ｆ検出面	
156	〃	〃	・3.3・1.4		〃	
157	〃	〃	8.9・4.3・1.0	120	〃	磨耗
158	〃	〃	7.3・3.3・1.4	144	〃	
159	〃	〃	・4.3・1.2		〃	磨耗
160	〃	〃	・3.3・1.1		〃	〃
161	〃	〃	・2.7・1.4		ＦＳＮ	
162	〃	〃	・3.5・1.0		Ｆ検出面	
163	〃	〃	・3.1・1.1		ＦＳＮ	
164	〃	〃	・3.3・1.3		〃	
165	〃	〃	8.7・4.9・1.5	183	〃	
166	〃	〃	10.9・4.0・1.5	253	〃	
167	〃	〃	8.5・3.9・1.4	163	〃	
168	〃	〃	7.0・3.0・1.2	47	〃	磨耗
169	〃	〃	・3.8・1.4		〃	
170	〃	〃	5.7・3.2・1.1	63	〃	磨耗
171	〃	〃	・4.5・1.2		〃	〃
172	〃	〃	5.7・4.0・1.1	42	〃	〃
173	〃	〃	・3.1・1.1		ＣＳＫ10	遺構所産
174	磨製石斧	〃	4.8・2.7・0.8	28	ＣＳＡ４	
175	〃	蛇紋岩	・2.6・0.7		Ａ検出面	
176	〃	硬砂岩	・3.0・1.6		ＡＳＤ１	

石製品観察表（31・32図）

番号	種　別	材　質	長・幅・厚(cm)	重(g)	出土遺構等	備　考
177	磨製石斧	チャート	7.1・3.8・1.9		ＦＳＮ	
178	剥片石器	頁岩	6.0・3.2・1.0	30	ＣＳＡ３	遺構所産
179	石核？	黒曜石	2.4・3.5・1.5	42	ＦＳＫ32	
180	掻器	チャート	3.6・2.9・0.9	27	ＦＳＫ11	
181	石核？	玉髄	5.6・4.9・3.8	331	ＦＳＸ３	
182	石棒	安山岩	・4.2・		ＦＳＮ	
183	製石斧	蛇紋岩	8.1・4.4・3.2	374	ＡＳＤ１	
184	磨石	安山岩	5.7・3.2・2.3	232	〃	
185	敲石	〃	11.0・5.0・3.2	1050	ＣＳＤＺ１	両端打痕
186	凹石	火山弾	6.3・5.7・3.2	437	ＦＳＮ	
187	〃	〃	7.0・3.5・1.7	165	〃	凹部両面

番号	種　別	材　質	長・幅・厚(cm)	重(g)	出土遺構等	備　考
188	凹石	火山弾	7.8・5.5・3.0	410	ＦＳＮ	凹部両面
189	磨台石	安山岩	5.4・4.0・0.6	189	ＦＳＫ１	
190	砥石	砂岩	5.2・3.3・0.8	28	ＣＳＡ３	遺構所産
191	多孔石	安山岩	12.0・9.9・5.2		Ｃ検出面	
192	〃・石皿	火山弾	13.0・12.5・3.2		ＡＳＤ１	
193	磨台石	安山岩	4.9・9.2・4.3		〃	
194	石皿	〃	・13.0・2.8		Ｆ検出面	
195	〃	〃	11.3・11.9・3.5		ＦＳＫ31	
196	磨台石	〃	8.8・8.8・1.9		ＦＳＮ	
197	石皿	〃	10.4・10.8・4.6		ＡＳＤ１	

（注　安山岩はガラス質安山岩）

Ⅲ－11　調査地周辺の航空写真（平成２年、(株)ジャステック撮影）

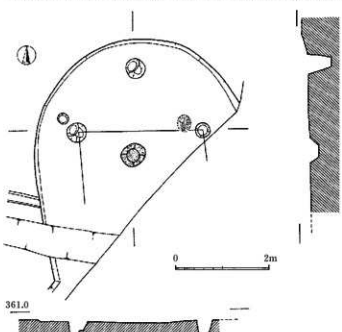
2　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は縄文時代と同様C・F区に集中して認められ、他の調査区ではB区で木棺墓・土坑各1基、D区で土坑1基を検出したにすぎない。居住施設では中期のCSA1・FSA4・FSA8の3軒、後期のものはすべてF区からの検出したものでFSA1～3・6・7の5軒である。この他に性格不明の大型溝址（FSDZ1）・木棺墓（BSJ1）・土壙墓（BSJ2・BSK10）・合口土器棺墓（FSJ3）がある。

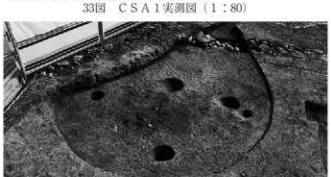
C1号住居址（CSA1）

[遺構]（33図）　C区の北東に位置し、東壁から南壁にかけて調査区域外へ伸びているため、調査では北側半分ほどを露呈したにすぎない。形態は小判状の楕円形を呈するものと思われ、東西壁寄りの小穴2個が柱穴の可能性がある。規模は長軸方向が不明であるが、東西方向は5m前後になるものと予想する。検出面からの壁高は6cmである。炉は柱穴間の内方に位置する地床炉である。東側柱穴際にも焼土が残存していた。

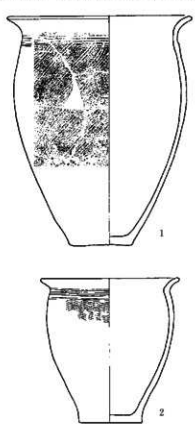
[遺物]（34図）　出土量は少なく、図示できる土器は甕2個体にすぎない。1は頸部に櫛描直線文を巡らし、その後肩部から体部下半にかけて2段にわたり斜行条線文を施す。なお、体部の一次調整はハケナデによっている。



33図　CSA1実測図（1：80）



Ⅲ－11　CSA1



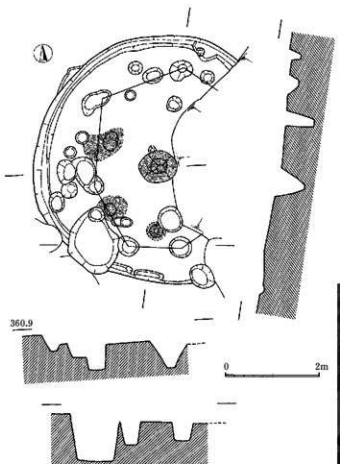
34図　CSA1出土土器実測図（1：4）

２は頸部の施文は１と同様であるが、体部は波状文である。

石器は打製石斧（55図50）・磨製石斧（51）が各１個出土している。

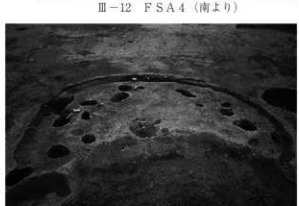
Ｆ４号住居址（ＦＳＡ４）

［遺構］（35図）　Ｆ区中央北に位置する。東側はＳＡ２と重複関係にあると共に撹乱を受けているため、調査では西側を中心とする遺構の３分の２ほどを露呈した。形態は円形を呈し、南北5.25m・壁高20cm程の規模になる。主柱穴は７角形の７個が想定される。炉は住居址の中央に設けられた直径約80cmの地床炉であるが、外周は焼土塊していない。また、深さ50cmを測るものの炉本来の機能は炭化物の状態から掘り込みに変換がみられる半分程の所が底面と推定する。西と南側の主柱穴間中央に５cm程の窪みを伴う焼土が認められ、副炉としての機能が考えられる。南壁下を除き周溝が掘られている。

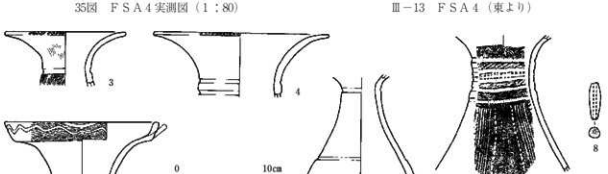


35図　ＦＳＡ４実測図（１：80）

Ⅲ－12　ＦＳＡ４（南より）



Ⅲ－13　ＦＳＡ４（東より）



36図　ＦＳＡ４出土土器・土製品実測図（１：4，8は１：２）

[遺物]（36図） 出土量は少なく、破片出土である。図示した器種はすべて壷である。3と4は素直に外開する口縁部から頸部で、口唇には縄文が、頸部には施描沈線文がめぐり、3の頸部には更に縄文が施文される。5の口縁部は受口状を呈し、引き出しにより片口をつくりだしている。口縁部の文様は波状文地に施描山形文が一周する。6は頸部から体部上半部かけての器形で、それぞれの部位に1条の施描直線文が巡る。外面はヘラミガキ調整の後赤色塗彩が施される。7は頸部から体部にかけての破片で、頸部に5条の直線文を巡らし、その間を上から縄文・施先刻文・縄文が施され、下段は無文である。体部には刺突による施描列点により区画し、条線文を充填した懸垂文が施される。この他に土錘状の土製品（8）が出土している。

石器は打製石斧4個（55図54～57）・太型蛤刃石斧の破損品（58）が出土している。特に57は大型製品で石鍬の別称が与えられている。

F8号住居址（FSA8）

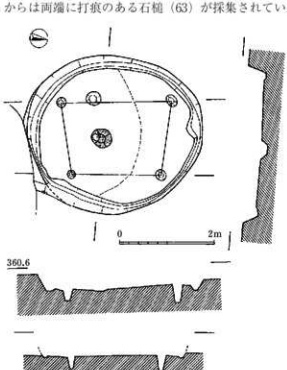
[遺構]（37図） F区の南側に位置し、左右を弥生時代後期のSA6・7に挟まれる。基本形態は円形を呈し、南北3.8m・東西3.35m・壁高36cmの規模である。炉は南北軸線南に偏してつくられた直径40cm・深さ16cmの地床炉である。主柱穴は台形状配列4個である。床面は中央に若干窪み堅緻である。壁下には周溝が巡る。

[遺物] 壷や甕の小破片が数点出土しているのみで、図示できるものはない。

石器は打製石斧2個（55図52・53）が出土している。

検出面の遺物

石製品（55図）：磨製石斧が4個（C区・62、F区・59～61）出土しており、61は再成形品と考えられる。A区からは両端に打痕のある石槌（63）が採集されている。



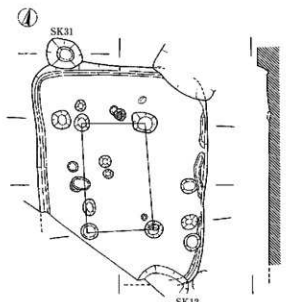
37図 FSA8実測図（1：80）

Ⅲ－14 FSA8・近接遺跡

Ⅲ－15 FSA8

F1号住居址（FSA1）

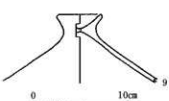
[遺構]（38図） F区の北西に位置し、調査では北西隅部を除きほぼ全形を露呈した。形態は隅丸長方形を呈し、長軸（主軸）方向をN15°Wにとる。規模は長軸4.6m・短軸3.6m・壁高20cmを測る。主柱穴は4個長方形配列に



38図　ＦＳＡ１・ＦＳＫ31実測図（１：80）

Ⅲ－16　ＦＳＡ１（南より）

Ⅲ－17　ＦＳＡ１地床炉（中央）



39図　ＦＳＡ１出土土器実測図（１：４）

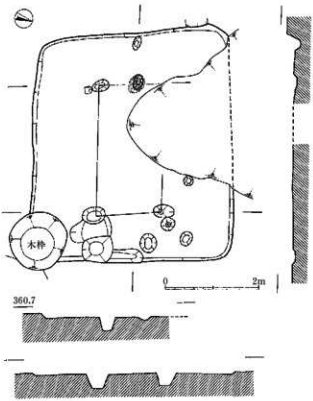
なる。炉は地床炉で、北側柱穴間の上方東に偏して設けられている。直径約30cm・深さ４cm程の規模で、底面は鍋底状を呈し焼土塊化している。炉内からは河原石が確認されたが、住居址内に同様な自然石が散在していることから住居廃絶後の所産と思われる。床面はそれほど堅緻なものではなく、東に傾斜を有する。東壁下に断続的な周溝状の溝がみられる。

［遺物］（39図）　住居址の露呈度の割には出土遺物が少なく、図示できる土器は蓋（９）が１個体あるにすぎない。外面はヘラミガキが施され、この器種には珍しく赤色塗彩が施される。

Ｆ２号住居址（ＦＳＡ２）

［遺構］（40図）　Ｆ区の中央に位置し、南東隅部および東壁から住居址中央にかけて破壊を受けている。北西隅部で中期のＦＳＡ４と重複する。形態は長方形を呈し、長軸4.8m・短軸4.2m前後の規模になる。検出面からの掘り込みは浅く、最深部で８cmを測るにすぎない。長軸方向はＮ101°Ｗである。主柱穴は４個長方形配列になるものと思われる。西壁際の中央に入口施設と推定される２個の柱穴が認められた。床面は平坦で、主柱穴範囲内付近は比較的堅緻な面をなす。炉は鍋底状の地床炉で、東側主柱穴間の中央に設けられている。

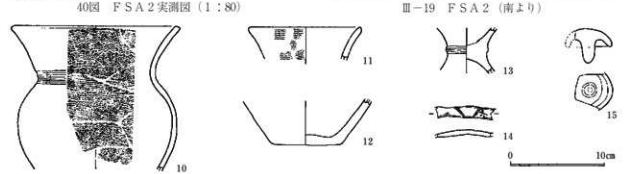
［遺物］（41図）　この遺構も露呈度の割には出土量は少ない。図示可能な土器片に甕（10～12）・高坏（13）がある。10は文様の順序が口縁部から体部にかけて上から下へ施文している。すなわち口縁部波状文・頸部７本２連



40図　ＦＳＡ２実測図（１：80）

Ⅲ－18　ＦＳＡ２（東より）

Ⅲ－19　ＦＳＡ２（南より）



41図　ＦＳＡ２出土土器・土製品実測図（１：４）

止廉状文そして体部波状文の順である。13は脚部との接合部に粘土紐を貼付し、１条の浅い沈線文を巡らす。この他に刻みがみられる棒状および茸状の土製品（14・15）が出土している。

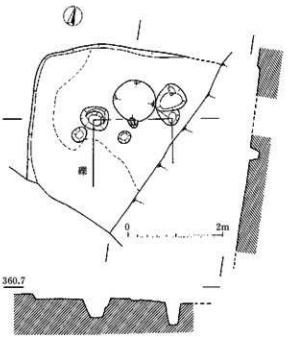
Ｆ３号住居址（ＦＳＡ３）

［遺構］（42図）　Ｆ区中央の南側に位置する。住居址の南壁側半分程は調査区域外にあり、東壁側は撹乱を受けているため、北西隅部を検出したにすぎない。形態は隅丸長方形になるものと思われるが、規模は不明である。検出面からの壁高は10cm前後である。主柱穴と思われる柱穴は北壁側で２個確認された。この柱穴間中央に地床炉が設けられているが、北側の一部が破壊を受けている。床面は平坦であるが、西側は小礫が浮き出す。

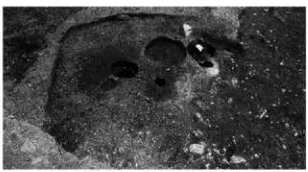
［遺物］　出土量は少なく、図示可能な土器片はない。

Ｆ６号住居址（ＦＳＡ６）

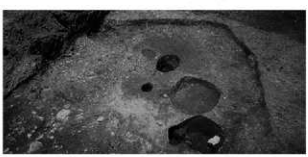
［遺構］（43図）　Ｆ区の北東隅に位置し。調査区内に全形があるものの北東側一部が破壊を受け、南東隅部は平安時代の１号集石遺構（ＦＳＮ１）と重複する。形態は隅丸長方形を呈し、長軸5.3m・短軸3.6m・東壁高22cmの規模になる。長軸方向はN96°Wを指す。主柱穴は４個長方形（台形）配列と推定され、西壁側の２個を確認した。炉はこの主柱穴間中央に設けられた鍋底状を呈する地床炉である。床面は東に傾斜を有し、東西間は中央に向け



42図　ＦＳＡ３実測図（１：80）



Ⅲ－20　ＦＳＡ３（南より）



Ⅲ－21　ＦＳＡ３（東より）

て窪む。西壁から南壁にかけて周溝状の小溝が確認された。

［遺物］（44図）　出土量は少ないが、大型の破片が多い。図示できるものは高坏（16～18）・片口鉢（19）・壷（20）・ミニチュア甕（21）がある。16の口縁部は内傾し、他のものとは異なる器形になり、内外面共に赤色塗彩は施されない。20は大型の壷で、頸部から上方および底部に至る体部屈曲部以下を欠損する。文様は肩部に櫛描Ｔ字状文が施文される。文様帯以外は赤色塗彩される。内面はヘラナデ調整で黒色を呈する。

石製品は砂岩製の砥石（55図64・65）と玉を思わせるチャート製の磨石（66）が出土している。

Ｆ７号住居址（ＦＳＡ７）

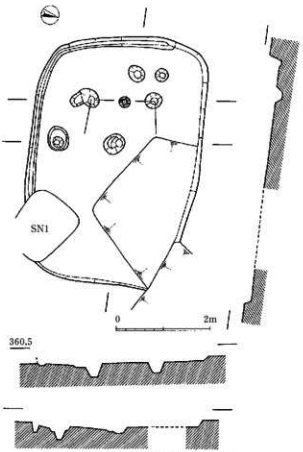
［遺構］（45図）　Ｆ区の東端に位置し、西壁の一部は調査区域外に伸びるもののほぼ全形を露呈した。東壁の一部は縄文時代のＦＳＡ８と重複し、北壁においては本住居址廃絶後合口土器棺墓がつくられる。形態は隅丸方形を呈し、主軸3.9m・東西軸4.2m・北壁高50cmの規模になる。主柱穴は４個方形配列のものと思われるが、南東に所在するものは定かでなかった。しかし、後に写真を見ると所定の位置が黒味を帯びている点、調査での見落としの可能性がある。南壁沿いに２個の小穴がみられ、入口施設の遺構と思われる。炉は鍋底状を呈する地床炉で、北側主柱穴間中央に設けられる。床面は平坦で、全体的に堅緻な面をなす。東壁下と西壁下には周溝状の小溝が掘り込まれている。

［遺物］（46図）　露呈度の割には図示可能な土器片は少ない。器種には壷（22･24）と甕（23）がある。壷は中型に属する。22は口縁部から肩部にかけて、24は体部下半から底部にかけての器形であるが、共に赤色塗彩が施されず、調整方法から同一個体の可能性がある。24の土器は北壁下から原形のまま出土した。23の施文は頸部の廉状文が先行する。廉状文は右回り施文で、８本２連止である。

Ｆ１号性格不明溝状遺構（ＦＳＤＺ１）

［遺構］（47図）　Ｆ区の北東端部に位置し、大型の溝になるものと思われるが、形態や規模等不明である。掘り込みは緩傾斜を有し、深さ70cm前後をはかる。底面は平坦で土器片と共に河原石の集石が認められた。

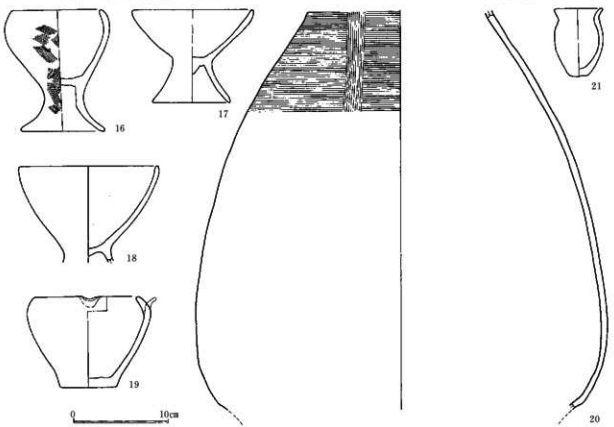
［遺物］　当該期の土器片が少量出土しているが、図示できるほどの破片はない。



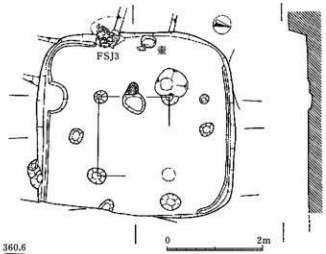
43図　ＦＳＡ６実測図（１：80）

Ⅲ－22　ＦＳＡ６

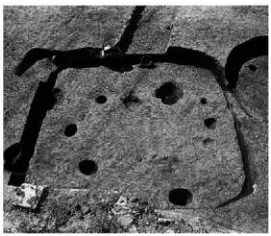
Ⅲ－23　ＦＳＡ６・近接遺構



44図　ＦＳＡ６出土土器実測図（１：４）

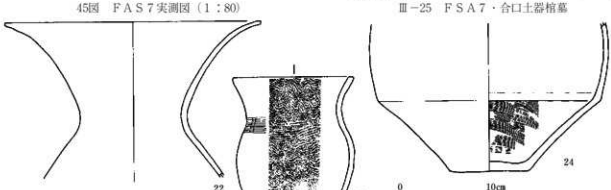


45図　ＦＡＳ７実測図（１：80）

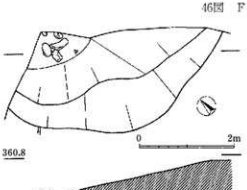


Ⅲ－24　ＦＳＡ７

Ⅲ－25　ＦＳＡ７・合口土器棺墓

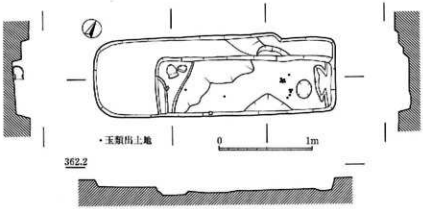


46図　ＦＳＡ７出土土器実測図（１：４）



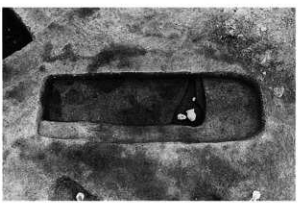
47図　ＦＳＤＺ１実測図（１：80）

Ⅲ－26　ＦＳＤＺ１



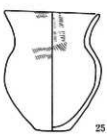
48図　ＢＳＪ１（木棺墓）実測図（１：20）

Ⅲ－27　ＢＳＪ１土器出土状態

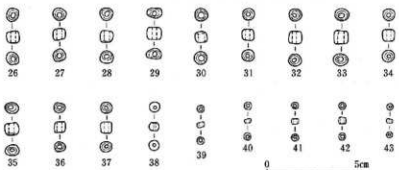


Ⅲ－28　ＢＳＪ１

Ⅲ－29　ＢＳＪ１玉類出土状態



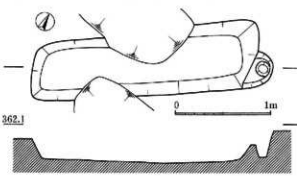
49図　ＢＳＪ１出土土器実測図
（１：４）



50図　ＢＳＪ１出土玉類実測図（１：２）

Ｂ１号木棺墓（ＢＳＪ１）

［遺構］（48図）　Ｂ区の西側に位置し、近隣に外法形態が同様なＢＳＪ２がある。形態は東壁・南壁を共有する長方形の２重構造になっており、二つの遺構が重複しているものか、当初計画の土壙墓を縮小したものかの判断は調査所見からは得られなかった。長軸線はＮ62°Ｅ方向を指す。外側の土壙は隅丸長方形を呈し、長軸2.55m・短軸0.84m・深さ７cm規模になる。木棺墓は長方形を呈し、長軸1.9m・短軸6.2m・検出面からの深さ15cm程を測る。底面は若干の凹凸がみられるものの平坦である。長軸の両壁際には木棺の小口痕が認められたが、西側のものは溝状に変形している。この変形溝状



51図　ＢＳＪ２実測図（１：20）

遺構からは木棺の上に据え置かれたであろう完形の小型甕・河原石が出土した。被埋葬者は東に頭部を向けて埋葬されたと思われ、頭部に当たる部位からガラス製玉類が集中して検出された。

［遺物］（49・50図） 副葬品としての完形の小型甕（25）と着装品としてのガラス白玉（26～37）・ガラス小玉（39～43）・水晶丸玉（38）が出土している。甕は内外面共にハケナデ調整後ヘラミガキが施され、丁寧に仕上げている。ガラス白玉はコバルトブルー、小玉はライトブルー、水晶丸玉は白色を呈する。

Ｂ２号土壙墓（ＢＳＪ２）

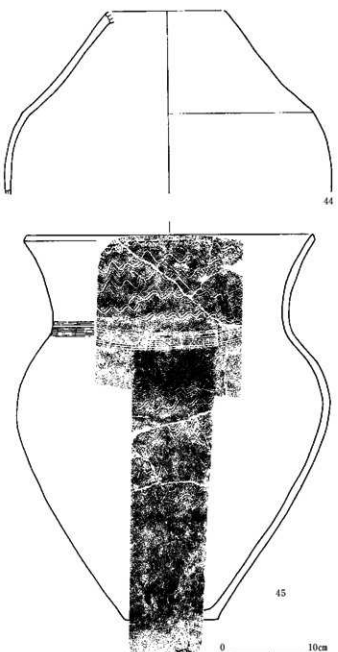
［遺構］（51図） ＢＳＪ１の西側に位置し、この遺構と形態・規模および長軸方向がほぼ同じことから当該期の所産と考える。形態は隅丸長方形を呈し、長軸2．4ｍ・短軸0．7ｍ・深さ20cmの規模になる。底面は幾分鍋底状を呈する。出土遺物はない。

合口土器棺墓（ＦＳＪ３）

［遺構］ ＦＳＡ７の北壁を掘り込んでつくられている。調査では前記の遺構の所産として把握していたため土坑の観察はしていない。完形の甕を主体部として、壷の体部下半を合わせ土器棺としている。壷の底部は抜かれている。土器から推定すると全長55cm前後の規模になるものと思われる。

［遺物］（52図） 棺本体の甕（45）・壷（44）の他に遺構内部からの出土遺物はない。

Ⅲ－30 合口土器棺墓（ＦＳＪ３）



52図 合口土器棺墓（ＦＳＪ３）土器実測図（１：４）

Ｂ７号土坑（ＢＳＫ７）

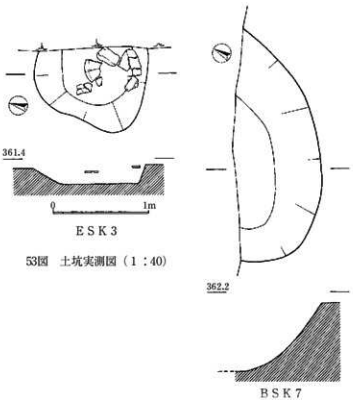
［遺構］（53図） 調査地の北東に位置し、調査では遺構の３分の１ほどを露呈したにすぎない。形態は楕円形を呈し、長軸2.5m超規模を推定される。掘り込みはなだらかな傾斜を有し、深さ73㎝を測る。

［遺物］（54図） 出土土器には高坏（46）の坏部と甕（47）の下半部の破片がある。

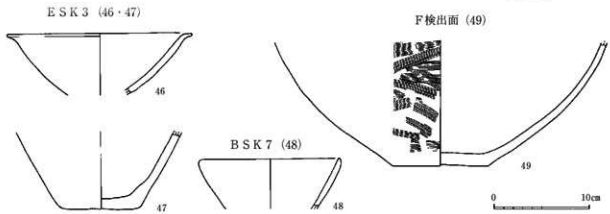
Ｅ３号土坑（ＥＳＫ３）

［遺構］（53図） Ｅ区の南西に位置し、東側は配水管により破壊される。形態は不整な隅丸方形を呈するものと思われる。東西の規模は不明であるが、南北1.2m・深さ20㎝程になる。

［遺物］（54図） 図示できる破片は無彩色の浅鉢（48）が１個体あるにすぎない。



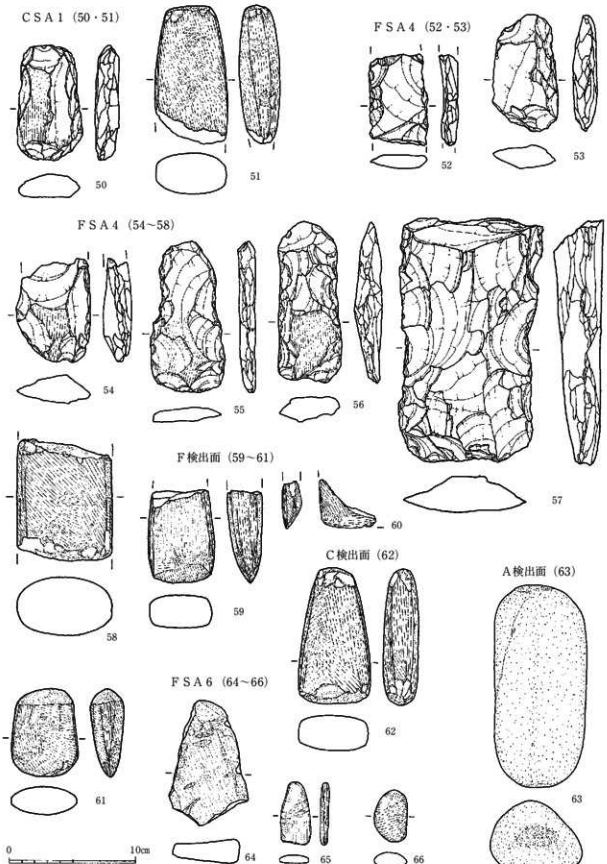
53図 土坑実測図（１：40）



54図 土坑・検出面出土土器実測図（１：４）

Ⅲ－31 発掘調査看板

Ⅲ－32 平成８年度従事者



55図　住居址・検出面出土土器および石製品実測図（１：３）

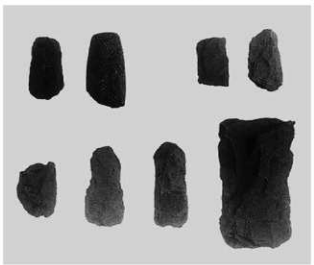
CSA1

FSA2

FSA7

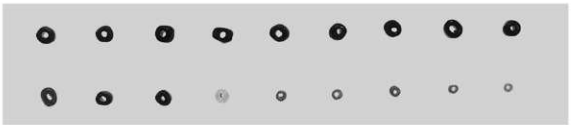
FSA6

FSJ3



55図上段対応

55図下段対応



ＢＳＪ１出土玉類（50図対応）

土器・土製品観察表

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	遺存	成形・調整等
	ＣＳＡ１（34図）					
1	甕	19.4	6.5	24.2	1/4	外：櫛描直線文・斜行条線文，内：ヘラナデ
2	甕	14.3	6.6	15.2	完形	外：　〃　・波状文　，内：　〃
	ＦＳＡ４（36図）					
3	壺	18.4			ママ	外：櫛描直線文・縄文，内：ヘラナデ
4	〃	18.7			1/3	外：　〃　・〃，内：アレ
5	片口壺	16.4			2/3	外：　〃　・山形文・波状文，内：ハケ→ヘラナデ
6	壺				1/3	外：ヘラミガミ・赤彩・沈線文，内：赤彩，ナデ
7	〃					外：沈線文・縄文・篦先刻文・縄文・列点文と条線文の懸垂文
8	土錘	長20・径６				外：ナデ
	ＦＳＡ１（39図）					
9	蓋				1/3	外：ヘラミガミ・赤彩，内：ヘラナデ，１孔
	ＦＳＡ２（41図）					
10	甕	17.8			ママ	外：７本２連止廉状文・波状文，内：ヘラナデ
11	〃	12.0			〃	外：波状文，内：アレ
12	〃		7.3		〃	外：アレ，内：ヘラナデ
13	高坏				〃	内外：ヘラミガミ・赤彩
14	棒状土製品				〃	刻文，幅６㎜・厚３㎜
15	茸状土製品				〃	直径５㎝・高3.3㎝
	ＦＳＡ６（44図）					
16	高坏	9.5	8.5	12.9	3/4	外：ハケナデ→ヘラナデ，内：ヘラナデ
17	〃	12.8	8.0	9.8	1/2	内外：ヘラミガミ・赤彩
18	〃	14.6			ママ	内外：　〃　・〃
19	片口鉢	11.0	6.0	8.5	完形	内外：ヘラナデ
20	壺				1/4	外：T字状文・ヘラミガミ・赤彩，内：ヘラナデ
21	甕	5.0	2.0	7.3	1/3	ミニチュア，内外：ナデ
	ＦＳＡ７（46図）					
22	壺	27.1			1/2	外：ヘラミガミ，内：ヘラミガミ・ヘラナデ，24と同一個体？
23	甕	12.8			ママ	外：７本２連止廉状文・波状文，内：ヘラナデ

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	遺存	成形・調整等
24	壺		8.4		〃	外：ヘラミガミ，内：ヘラナデ・ハケナデ
	ＢＳＪ１（49図）					
25	甕	10.0	3.6	13.6	完形	内外：ハケナデ→ヘラミガミ，嗣歯品
	ＦＳＪ３（52図）					
44	壺		10.5		ママ	外：ヘラミガミ・赤彩，内：ヘラナデ
45	甕	30.3	10.0	40.6	完形	外：ハケナデ・８本１連止櫛状文・波状文，内：ヘラナデ
	ＥＳＫ３（54図）					
46	高坏	19.6			1/2	内外：ヘラミガミ・赤彩
47	甕		7.8		〃	内外：ヘラナデ
	ＢＳＫ７（54図）					
48	浅鉢	14.7			1/4	内外：ヘラナデ
	Ｆ検出面（54図）					
49	壺	10.2			1/4	外：ハケナデ→ヘラナデ，内：ハケナデ→ナデ

ＢＳＪ１出土玉類観察表（50図）

番号	種別	材質	色調	直径・高（mm）	重（g）	番号	種別	材質	色調	直径・高（mm）	重（g）
26	臼玉	ガラス	コバルトブルー	6～7・5～7	0.35	35	〃	〃	コバルトブルー	6～7.5・6～6.5	0.35
27	〃	〃	〃	6～7・5～6	0.29	36	〃	〃	〃	5～6・6	0.24
28	〃	〃	〃	6.5～7・5.5～6	0.36	37	〃	〃	〃	6・6	0.27
29	〃	〃	〃	5～8・6	0.37	38	丸玉	水晶	白色	5・4	0.20
30	〃	〃	〃	6.5～7・6	0.31	39	小玉	ガラス	ライトブルー	4・3	0.04
31	〃	〃	〃	6・6～6.5	0.31	40	〃	〃	〃	4・2～2.5	0.04
32	〃	〃	〃	6.5～7・6	0.36	41	〃	〃	〃	3.5・3	0.05
33	〃	〃	〃	6～8・6～7	0.42	42	〃	〃	〃	4・3～3.5	0.06
34	〃	〃	〃	6～6.5・6	0.34	43	〃	〃	〃	3・2～2.5	0.04

石製品観察表（55図）

番号	種別	材質	長・幅・厚（cm）	重（g）	出土遺構等	備考	番号	種別	材質	長・幅・厚（cm）	重（g）	出土遺構等	備考
50	打製石斧	安山岩	6.3・3.5・1.2	116	ＣＳＡ１	遺構所産・磨耗	59	太型蛤刃石斧	斑レイ岩	・3.5・1.9		ＦＳＮ	
51	太型蛤刃石斧	砂岩	・3.9・2.1		〃	〃	60	〃	〃	・2.9・1.1		Ｆ検出面	Ｆ検出面
52	打製石斧	安山岩	・3.1・0.9		ＦＳＡ８	〃	61	〃	砂岩	4.7・3.6・1.9	142	〃	再加工品
53	〃	〃	6.3・3.6・1.4	101	〃	〃・磨耗	62	磨製石斧	〃	7.3・3.9・1.9	233	Ｃ検出面	刃部再調整
54	〃	〃	・3.9・1.5		ＦＳＡ４	〃	63	敲石	斑レイ岩	9.6・4.5・4.0	1022	ＡＳＤ１	
55	〃	〃	8.0・4.0・0.9	103	〃	〃・磨耗	64	砥石	安山岩	6.7・4.3・1.3		ＦＳＡ６	遺構所産
56	〃	〃	8.5・3.5・1.5	146	〃	〃・〃	65	〃	砂岩	3.3・1.6・0.4		〃	〃
57	〃	〃	・7.2・2.6	(445)	〃	〃	66	磨玉	チャート	2.8・1.8・0.7		〃	〃
58	石錘	斑レイ岩	・5.1・3.1	(666)	〃 炉	〃							

（注　安山岩はガラス質安山岩）

3　古墳時代前期の遺構と遺物

当該期の時期の比定には難しいところがある。弥生時代後期の土器の伝統を色濃く残しており、また、北陸系の土器の影響を受けた在地系土器が目立つようになり、新たな土器文化を形成している。そのため節題に古墳時代前期と表示したが、正確には弥生時代後期末から古墳時代初頭の所産と位置付けたい。検出した遺構は居住施設がなく、環濠と思われる大溝（ＡＳＤ１）・方形周溝墓形の大溝（ＥＳＤＺ１）・墓と推定される土坑（ＥＳＫ10）およびＡ区に集中する土坑群等である。

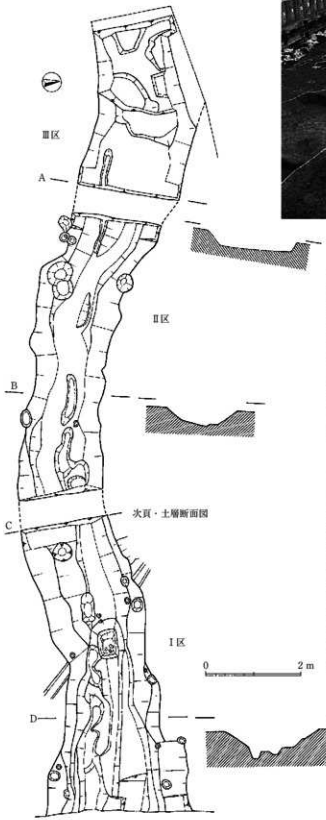
Ａ１号溝址（環濠？、ＡＳＤ１）

［遺構］(55図)　Ａ区の中央から南東隅にかけて幾分蛇行気味に緩貫する。東端と西端中央を結ぶ遺構軸線はほぼ東西方向で、検出した部分は全長約34ｍである。断面形態は基本的にＵ字形であるが、56図では左側の傾斜は右側よりなだらかである。この土層断面図をみるかぎり、この地点付近から西側は掘り込みが２回行われているようで、原初（１次）の溝は幅約３ｍ・深さ64センチの扁平なＵ字形を呈していたものが６層の堆積土によって深さが半減してしまう。この段階で溝の復旧にあたり、底面を更に掘り下げて中間点で幅1.3ｍ・深さ50cm程の溝に改修する。ただし検出面からの溝の上面規模は2.6ｍに縮小している。断面図から規模をみると、Ａ地点―幅４ｍ・深さ60cm、Ｂ地点―幅2.8ｍ・深さ64cm、Ｃ地点―幅３ｍ・深さ95cm、Ｄ地点―幅４ｍ・深さ88cmを測る。溝幅は３～４ｍと一定していなく、深さも西から東にかけて数値を増すようである。また、この区に散在する土坑や小穴のあり方に注目され、これらの遺構のほとんどが溝の東側に展開している（２図）。本大溝が環濠としての機能を有するならば環濠内集落は東側に形成されている可能性がある。

土器類は１次溝の堆積層（56図６～８層）からの出土は少量にすぎず、図示可能な土器片はない。これに対し２次溝からの出土は多量で、多様な器種がある。調査では土層確認壁を境に西から Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区に分割し、１層を上層、２・３層を中層、４・５層を下層として取り上げた。量的にはこの調査区分順に多く、その多くは３層と４層からの検出であり、投棄状態での出土であった。この所見から短期間のうちに本来の環濠的溝機能の終焉を迎えたことを意味しているようである。

［遺物］(57～67図)　取り上げ調査区別に記載する。

Ⅰ区（57～60図）　器種には高坏（１～10・12～30）・器台（11）浅鉢（31・32）・鉢（34）・コップ形土器（32）・広口壷（35・38・39・40～42）・台付広口壷（44）・ミニュチュア甕（36）・ミニチュア壷（37）・有脚壷（44～46）・壷（47～51）・台付壷（52・53）・甑（54・55）・甕（56～76）・台付甕（77～88）がある。高坏は在地の箱清水式期の長脚で口縁部が大きく外開するラッパ状を呈する大型のもの（１・４）は少なく、在地系の短脚で浅鉢形の坏部を形成するもの（５～８・12～28）が増加する。このような中に北陸系土器の影響を受けたと思われる坏部に稜を有する有段高坏（２・３）や筒状長脚高坏（29）・棒状長脚高坏（30）がみられるようになる。長脚のものには切れ長の三角透かし孔（４・29）が、短脚のものには円孔（15・18・19・23・24・26・27）や三角透かし孔（５・８・20・21）が穿たれるものが多い。24は５列３段、27には10列３段の円孔がみられる。29個体の高坏を図示したが６・９・10・13・15・18～20・22・23・26の11個体は赤色塗彩が施されなく、無彩化の傾向がうかがわれる。器台は１個体確認され、北陸系の装飾器台に原形を求める。９の坏部および34の大型鉢の形態は、口唇部が面取りされるなど箱清水式期にはみられない器形である。コップ形土器も同様である。広口壷のうち40は甕形態であるが、内外面に赤色塗彩が施されている点からこの器種に含め、41も40と近似形態であるので同器

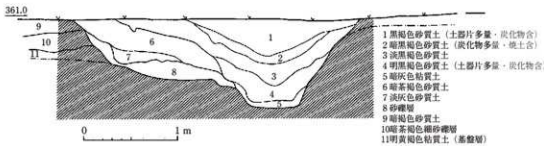


55図　ＡＳＤ１実測図（１：80）

Ⅲ－33　ＡＳＤ１（西より）
（55図上方より下方を望む）

Ⅲ－34　ＡＳＤ１（東より）

Ⅲ－35　ＡＳＤ１－Ⅰ区土器出土状態



56図　ＡＳＤ１土層断面図（１：40）

Ⅲ－36　ＡＳＤ１土層断面図（56図対応）

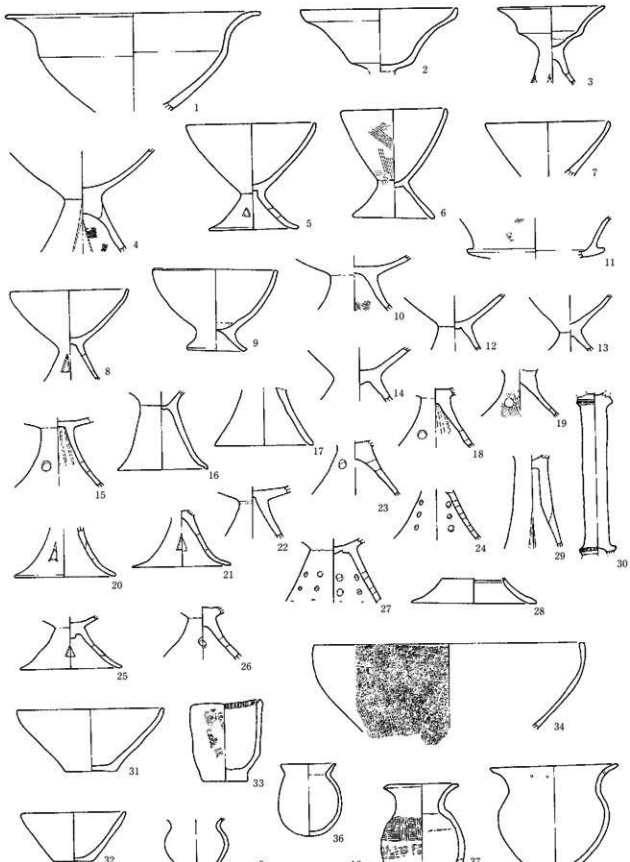
Ⅲ－37　ＡＳＤ１土層断面図（東端部）

Ⅲ－38　ＡＳＤ１土器出土状態（Ⅱ区西端）

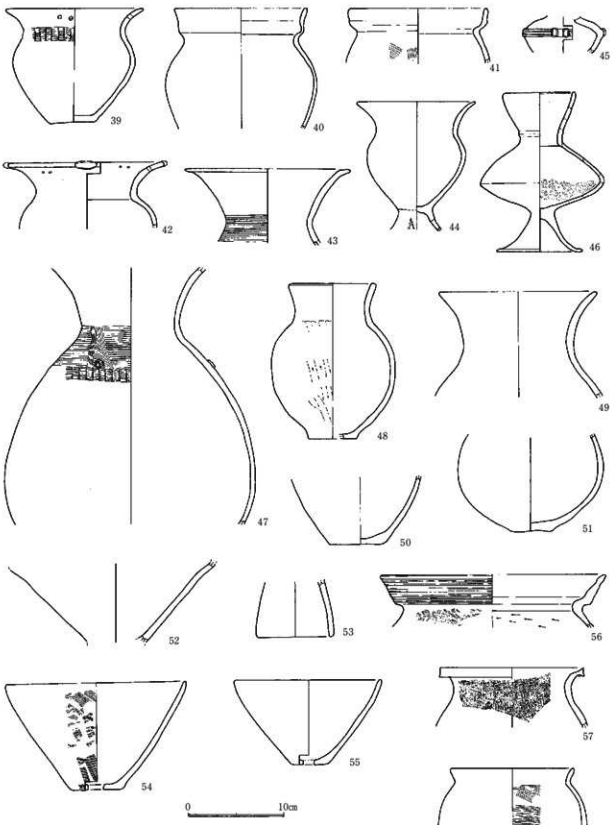
Ⅲ－39　ＡＳＤ１土器出土状態（Ⅰ区）

Ⅲ－40　ＡＳＤ１土器出土状態（Ⅰ区）

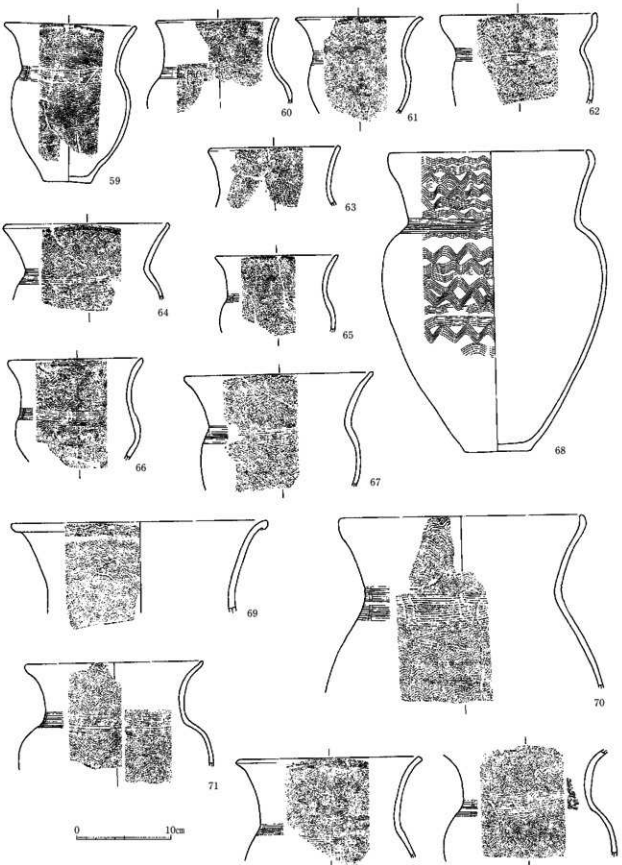
Ⅲ－41　ＡＳＤ１土器出土状態（Ⅰ区）



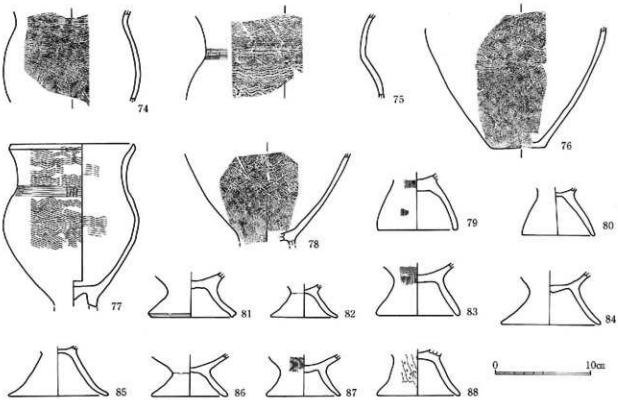
57図　ＡＳＤ１－Ｉ出土土器実測図（１：４）



58図　ＡＳＤ１－Ｉ出土土器実測図（１：４）



59図　ＡＳＤ１－Ｉ出土土器実測図（１：４）

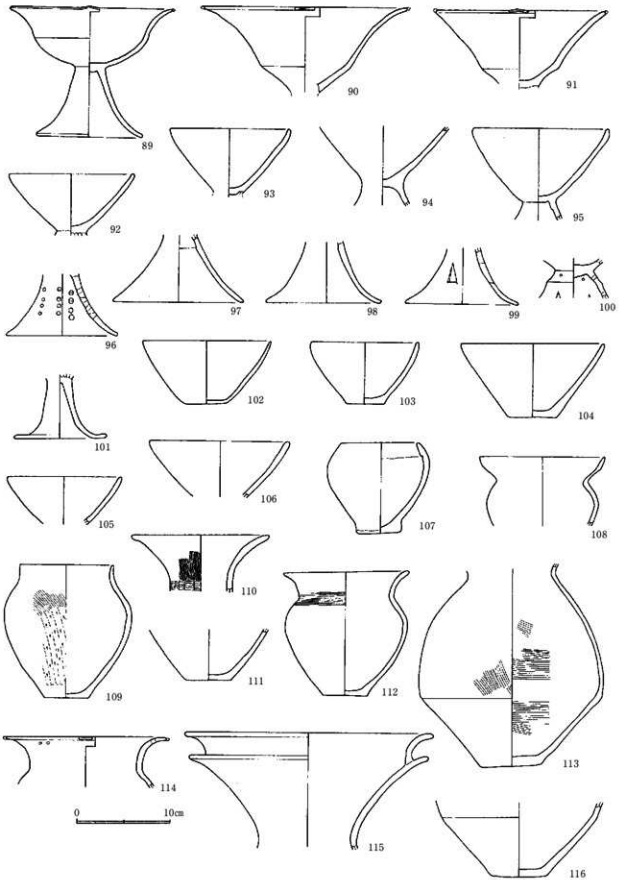


60図　ＡＳＤ１－Ⅰ出土土器実測図（１：４）

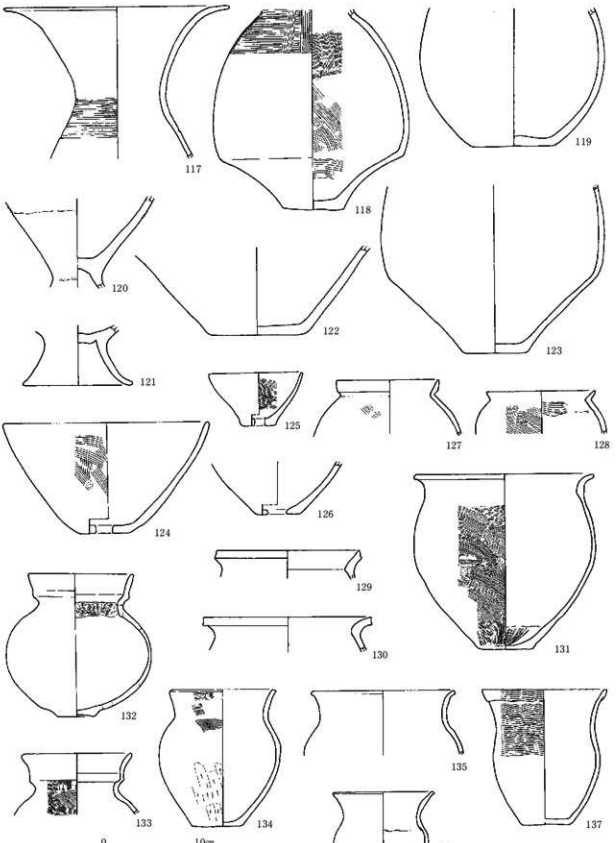
種とした。次の有脚壷と同様に北陸系の土器である。壷においても箱清水式土器の流れの中にあるものは47の中型壷が１個体あるにすぎず、他は他地域系の土器の影響を受けているものと思われる。台付壷の存在も珍しい。甕・台付甕は逆に在地形のものが多く出土している。施文は頸部に廉状文を巡らした後、上下に波状文を施すものを基本としている。内面の調整はヘラミガキ様のヘラナデによるものが多い。こうした中にハケナデ調整を多用する北陸系の土器（56～58）が混在する。

Ⅱ区（61～63・67図）　器種には高坏（89～101）・浅鉢（102～106）・無頸壷（107）・短頸壷（109）・広口壷（108・111・112・114・132・133）・壷（110・113・115～119・122・123）・台付壷（120・121）・甑（124～126）・甕（127～131・134～144・147・151～159）・台付甕（145・146・148～150）がある。これらの土器群から箱清水式期にみられない土器を抽出する。高坏では坏部の低位部に稜を形成し、口縁部が大きく外反するもの（90・91）、脚部が有稜をなすもの（100）、裾部が外開しラッパ状形態になるもの（101）がある。広口壷では108・132・133を抽出する。壷のうち115の器形は箱清水式期後半に出現するようで、大型に属する壷や高坏にみられる。外開する口縁部に、更に外反する口縁部を付加したものでいわば二重口縁土器と称せられよう。甕のあり方はⅠ区と同様であり、ハケナデ調整で無施文のもの（127～131）が混在する。134～136は在地系の器形であるが、口唇部は面取りされ、文様は描かれない。以上の土器は北陸系の土器の影響を受けているものと思われる。（157～159は67図に掲載）

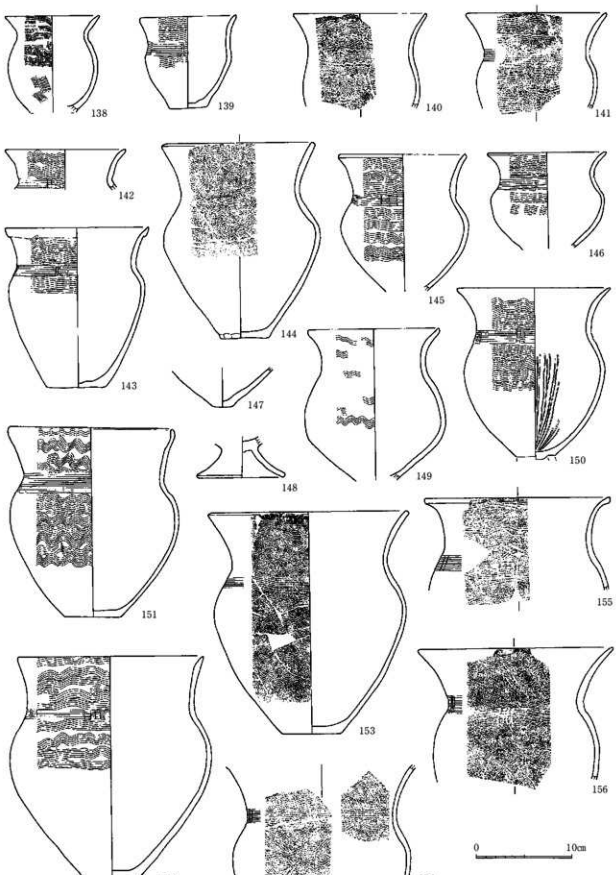
Ⅲ区（64～66図）　器種には高坏（160～168）・蓋（169）・片口鉢（170）・無頸壷（171）・直口壷（171）・台付広口壷（173）・広口壷（174）・壷（175～184）・甕（185～192・194～197）・台付甕（193）がある。この区の特徴は高坏が減少し、壷が増加の傾向にある。特に壷においては大型のものが目立つ。甕類においては在地系のもののみで外来系のものはみあたらない。北陸系の土器の影響が認められるものを抽出する。高坏では口縁部が幅広に直立し、体部との接合部が稜を呈するもの（160）と底部がしき締まり体部に稜を形成するもの（164）の２形



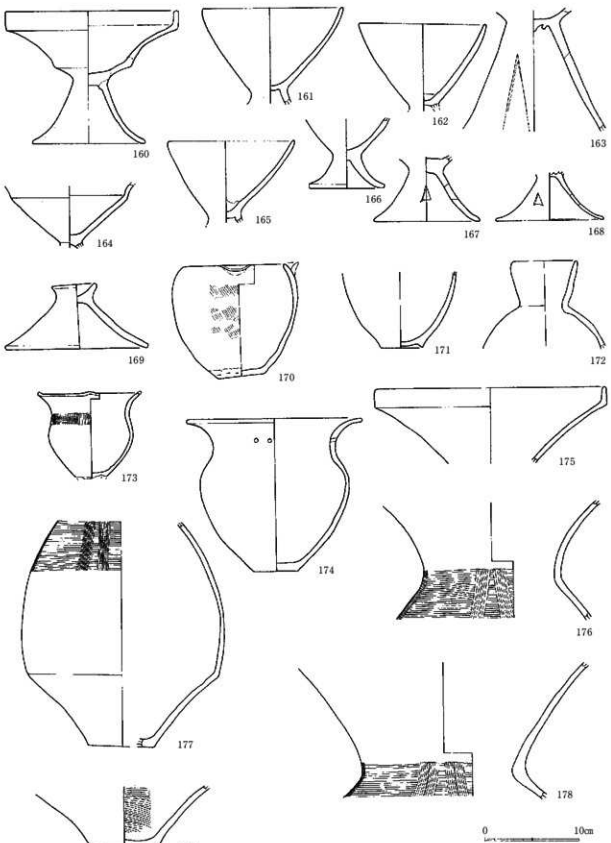
61図　ＡＳＤ１－Ⅱ出土土器実測図（１：４）



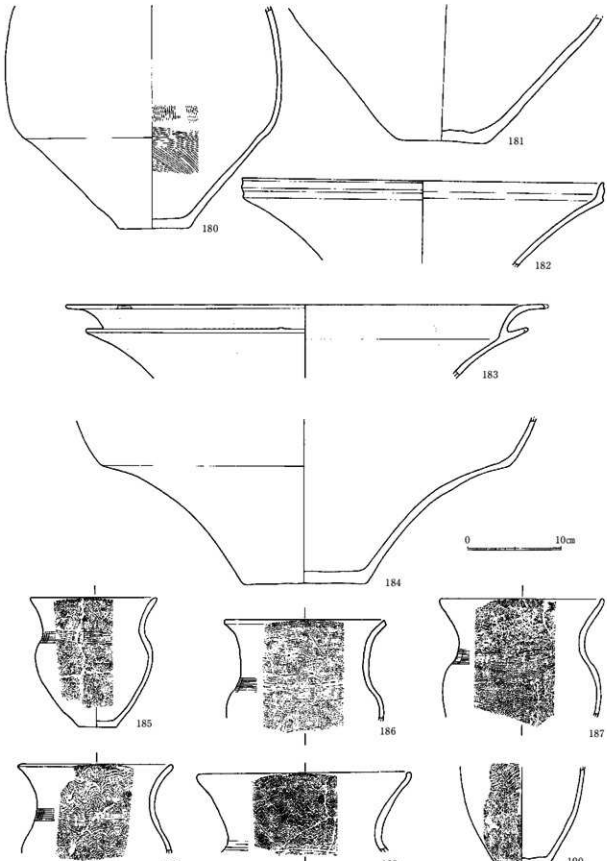
62図　ＡＳＤ１－Ⅱ出土土器実測図（１：４）



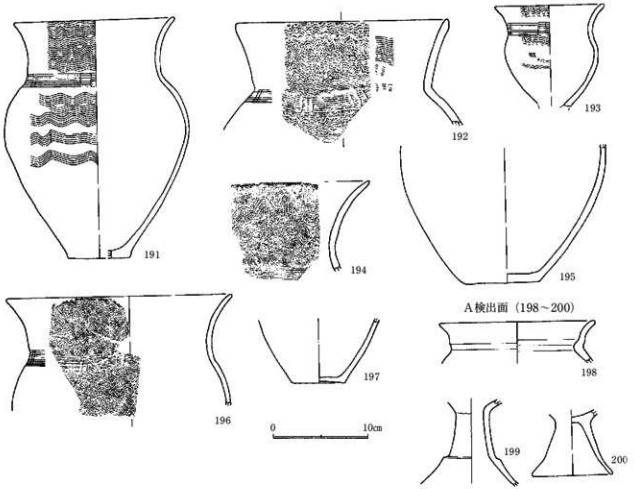
63図　ＡＳＤ１－Ⅱ出土土器実測図



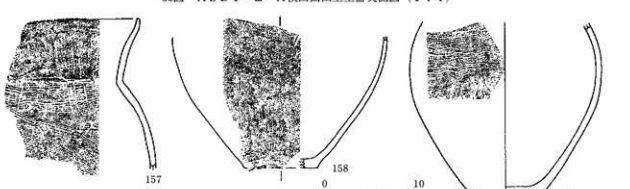
64図　ＡＳＤ１－Ⅲ出土土器実測図（１；４）



65図　ＡＳＤ１－Ⅲ出土土器実測図（１：４）



66図　ＡＳＤ１－Ⅲ・Ａ検出面出土土器実測図（１：４）



67図　ＡＳＤ１－Ⅲ出土土器実測図（１：４）

態がある。壷では口縁部が高坏の160と同様に直立する壷（175・182）や二重口縁の壷（183）がある。これらは共に内外面に赤色塗彩が施され、在地の土器の系譜も受け継いでいる。172の直口壷も外来系土器の影響を受けている。

土坑群（68･69図）　ＡＳＤ１の東側（内側）に掘り込まれた６基からなる土坑群で、溝址と併行するように展開している。周辺に散在する小穴群も当該期のものと考えられる。ちなみＡＳＤ１は縄文時代の所産である。

Ａ２号土坑（ＡＳＫ２）

［遺構］　ＡＳＫ３と重複関係にある。形態は隅丸長方形を呈し、長軸1.8m・短軸1.1m・深さ32cm程の規模にな

る。長軸方向はN82°Eを指す。底面は平底である。

［遺物］ 高坏（201～203）・甕（204）の破片が出土している。202には三角透かし孔と３段の円孔が、203は脚中位の鈍い稜を境に２段の三角透かし孔が穿たれている。甕の施文は帯状の波状文を描いた後櫛状文を巡らす。

Ａ３号土坑（ＡＳＫ３）

［遺構］ 形態は不整な長楕円形を呈する。長軸2.2m・短軸0.75m・深さ20cm程の規模になる。

［遺物］ 図示可能な土器片はない。

Ａ４号土坑（ＡＳＫ４）

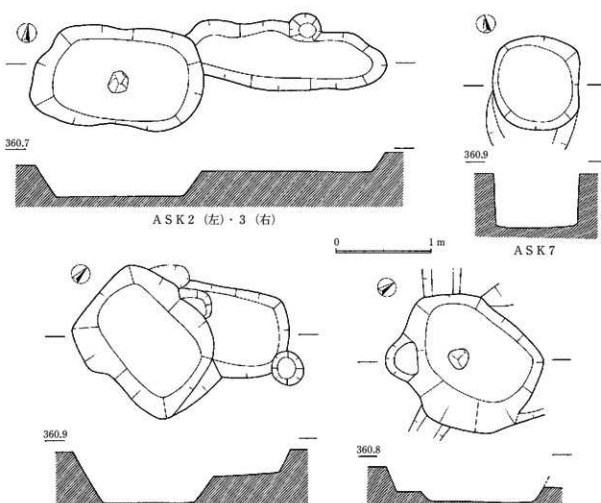
［遺構］ 形態は不整な楕円形を呈し、小穴や溝址と重複関係にある。長軸1.5m・短軸最大1.3m・最深40cmの規模になる。短軸方向はほぼ南北である。底面は平坦で、20cm大の河原石が置かれていた。

［遺物］ 器種には高坏（205）・広口壷（206・207）・壷（208・209）・甕（210～213）がある。207の有段口縁部や208の直立する口縁部などは北陸系土器の影響がうかがわれる。213にはハケナデ調整痕が顕著である。

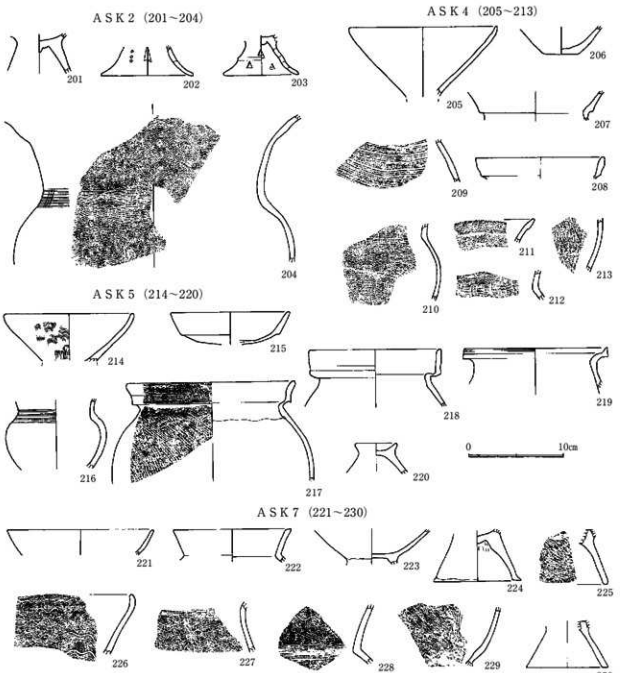
Ａ５号土坑（ＡＳＫ５）

［遺構］ 土坑群の西端に位置し、ＡＳＫ６と重複関係にある。形態は隅丸長方形を呈し、長軸1.6m・短軸最大1.25m・深さ50cm程の規模になる。短軸方向はほぼ南北である。底面は平坦である。

［遺物］ 器種には高坏（214）・小型丸底鉢（215）・広口壷（216）・蓋（220）・甕（217～219）がある。広口壷を



68図　A区土坑実測図（１：40）



69図　Ａ区土坑出土土器実測図（１：４）

除き赤色塗彩はみられない。小型丸底鉢や甕は北陸系土器の影響を受けた器形である。

Ａ６号土坑（ＡＳＫ６）

［遺構］　ＡＳＫ５と重複しているため長軸（東西）の規模は不明である。形態は隅丸長方形を呈するものと思われ、南北軸0.95m・深さ30cmを測る。長軸方向はＮ51°Ｅである。底面は鍋底状になる。

［遺物］　図示可能な土器片はない。

Ａ７号土坑（ＡＳＫ７）

［遺構］　ＡＳＫ５の南側に隣接しており、不整形土坑と重複している。形態は隅丸方形を呈し、南北軸1.0m・東西軸0.9m・深さ55cmの規模になる。南北軸方向はＮ13°Ｅを指す。底面は平坦である。

［遺物］　器種には高坏（221）・甕（222・226～288）・台付甕（223～225・229・230）がある。

Ｅ１号性格不明溝址（方形周溝墓？、ＥＳＤＺ１）

［遺構］（70図）　Ｅ区の北側に位置し、平安時代の円形溝址（ＥＳＤ２）と西側で，ＳＤ３とは東側遺構内で、ＳＤ４とは南側溝址内で遺構としての重複関係にある。この他この調査区は旧中部電力の敷地であり、会社存続時の撹乱が著しい。溝の形態は方形を呈するものと推定されるが、東側においては各種の掘り込みと撹乱のためもう一歩判然としない。南東隅部の形態から溝は全周しなく、方形周溝墓における陸橋部状になるものと思われる。このような形態から方形周溝墓の性格が認められるものの、埋葬主体部の予想される位置が前述した撹乱により確認しえなかったことと南側の溝形態が明確に把握できなかった点から性格不明遺構として取り扱う。規模は検出面の計測から、南北内法7.8m・東西内法8.2m前後になる。残存状況が良い北側と西側の溝幅が1.5～1.8mを測ることから、南北外法9.6m・東西外法10.2mの最大規模を予想する。南北軸方向はN40°Ｅである。溝の断面は平底のＶ字形を呈し、検出面からの最深は64cmを測る。遺物の多くは陸橋部付近の北東隅部から出土している。

［遺物］（71図）　出土遺物量は多くない。図示可能な土器はすべて壺類である。231と237の口縁部は鈍い稜を形成

Ⅲ－42　ＥＳＤＺ１（北東より）

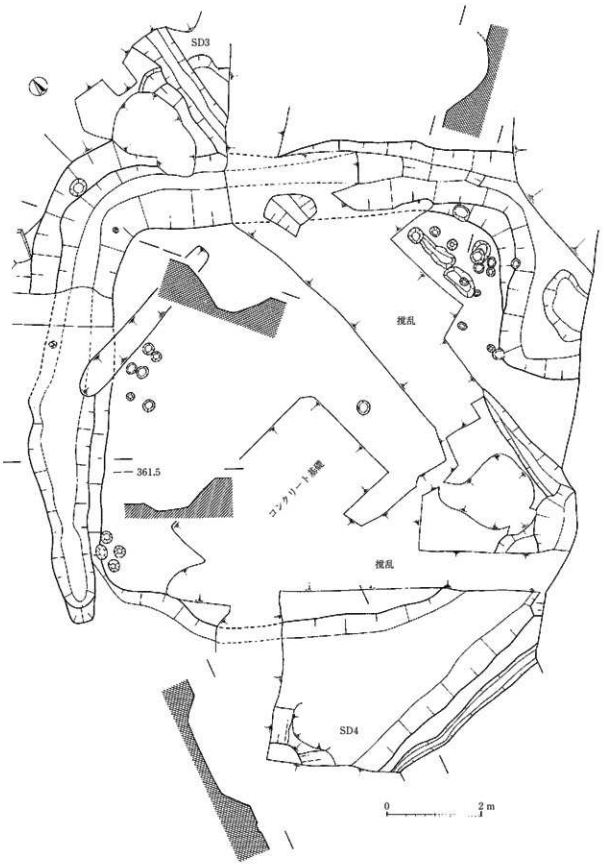
Ⅲ－43　ＥＳＤＺ１（南西より）

Ⅲ－44　ＥＳＤＺ１（北東隅部）

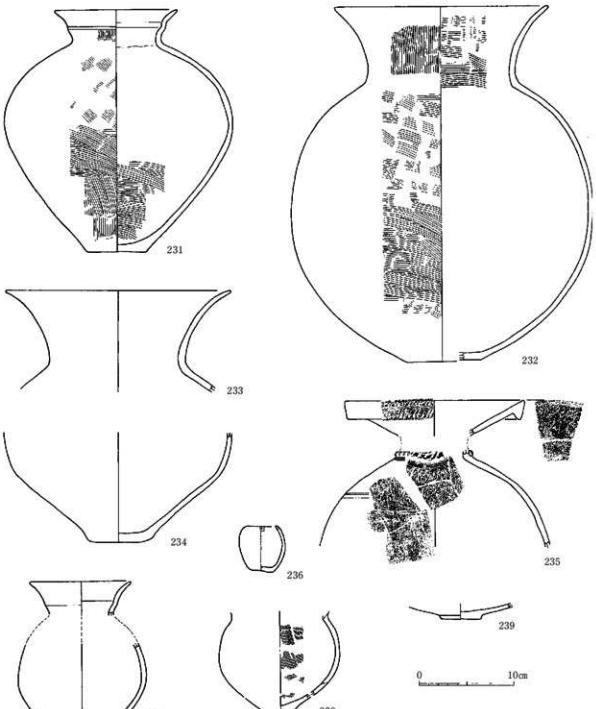
Ⅲ－45　ＥＳＤＺ１（南西隅部）

Ⅲ－46　ＥＳＤＺ１（北東陸橋部）

Ⅲ－47　ＥＳＤＺ１土器出土状態



70図　ＥＳＤＺ１（方形周溝墓）実測図（１：80）



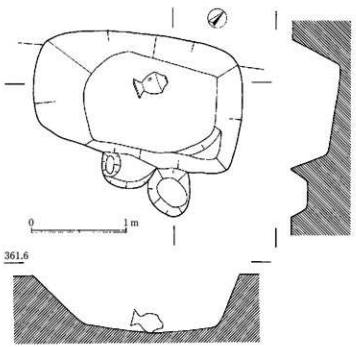
71図　ＥＳＤＺ１出土土器実測図（１：４）

し、北陸系土器の影響を受けている。234は体部から底部にかけての器形で、箱清水式期の系譜のもとにあるが、232は球形の体部になり箱清水式期の土器形態から脱却している。239は濃尾平野に中核を有する所謂「パレススタイル壺」で、今回の調査で唯一確認された東海系土器である。器形は不接合の文様破片の直径から求めたもので、不確実な要素がある。口唇部外面は帯状になり、断面が三角形を呈し、内外面共に波長の短い波状文を巡らす。頸部には粘土紐が貼付され、ヘラ状工具により連続刺突文が施される。この貼付文直下と体部上半部に２帯の細く浅い条線文で区画し、区画内を口縁部と同様の波状文を充填している。

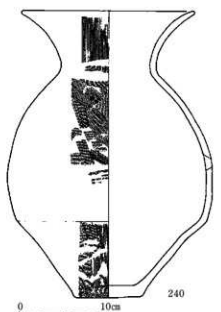
Ｅ１号土坑（ＥＳＫ１）

［遺構］（72図）　Ｅ区の北隅から確認された遺構で、調査区を拡張して全形を露呈した。形態は隅丸長方形を呈するが、掘り込みは長軸方向の西壁が傾斜を有している。検出面の規模は長軸2.25m・短軸1.2～1.3m・深さ60cm測り、底面の規模は長軸1.4m・短軸0.95m前後になる。底面は長軸方向では鍋底状になるが、短軸方向では北に傾斜を有する。遺構の北側中央付近に完形かつ体部が穿孔された壷が横臥していた。近接する方形周溝墓状遺構（ＦＳＤＺ１）の存在を考慮すれば、この溝遺構と親縁性あるものと思え、あえて本土坑に墓的性格を求める。そして壷は副葬品と推測する。

［遺物］（73図）　底面から完形の壷（240）が出土している。体部中央に焼成後外から打ち欠いた穿孔がある。外面の調整はハケナデが多用され、赤色塗彩が施される。



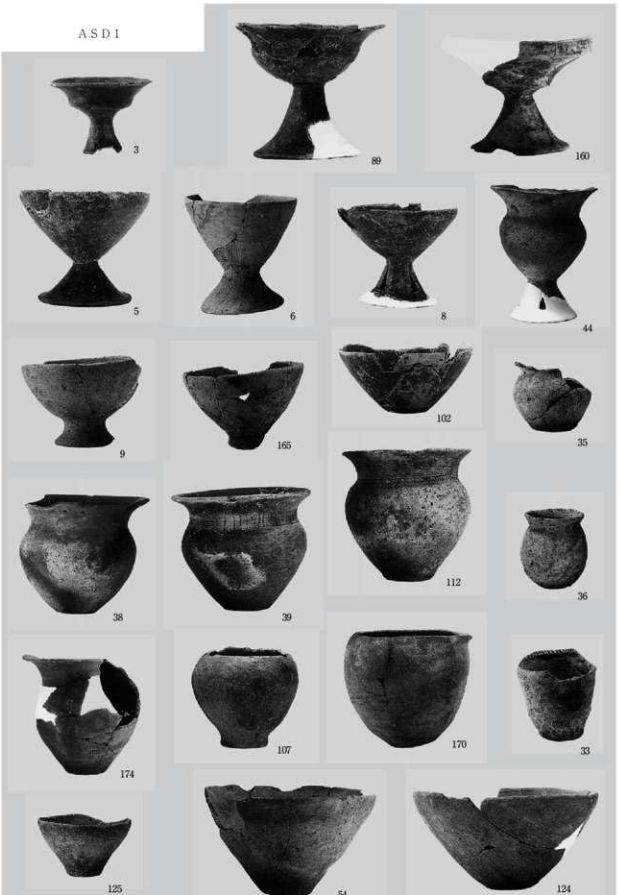
72図　ＥＳＫ１実測図（１：40）



73図　ＥＳＫ１出土土器実測図（１：４）

Ⅲ－48　ＥＳＫ１

Ⅲ－49　ＥＳＫ１土器出土状態


3
89
160
5
6
8
44
9
165
102
35
38
39
112
36
174
107
170
33
125
54
124

59

66

68

138

143

137

144

151

152

150

156

153

185

191

77

131

132

134

48

46

37

109

118

177

ESDZ 1

231

232

236

ESK 1

240

土器観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	成形・調整等	備考
ASD1－Ⅰ（57~60図）							
1	高坏	26.9			1/3	内外：ヘラミガミ・赤彩	Ⅰ－下
2	〃	16.6			3/4	内外：　〃　・〃	〃　・北陸系
3	〃	11.4			ママ	内外：　〃　・〃，三角透かし孔５個，内底叩打	〃　・　〃
4	〃				1/3	内外：　〃　・〃，　〃　４個	Ⅰ－上
5	〃	13.6	9.8	11.3	2/3	内外：　〃　・〃，　〃　３個	Ⅰ－下
6	〃	11.1	8.6	11.6	完形	外：ハケナデ→内：ヘラミガミ	〃
7	〃	13.0			ママ	内外：ヘラミガミ・赤彩	Ⅰ－中
8	〃	12.6			3/4	内外：　〃　・〃，三角透かし孔３個	〃
9	〃	13.3	6.0	8.6	5/6	口唇部面取り，内外：ヘラミガミ，内底叩打	〃　・北陸系
10	〃				ママ	内外：ヘラナデ，脚内：ハケナデ→ヘラナデ	Ⅰ－上
11	器台				1/6	外：ハケナデ→ヘラミガミ，内：ヘラミガミ	〃　・北陸系
12	高坏				ママ	内外：ヘラミガミ・赤彩	Ⅰ－中
13	〃				〃	内外：　〃	Ⅰ－下
14	〃				〃	内外：　〃　・赤彩	Ⅰ－上
15	〃				〃	外：ヘラミガミ，脚内：しぼり痕，円孔３個	〃
16	〃		9.5		1/4	内外：ヘラミガミ・赤彩	Ⅰ－下
17	〃		10.5		ママ	外：ヘラミガミ・赤彩	Ⅰ－中
18	〃				〃	内外：ヘラミガミ，脚内：しぼり痕，円孔３個	Ⅰ－上
19	〃				1/2	外：ハケナデ→ヘラナデ，円孔３個	〃
20	〃		10.5		ママ	外：ヘラミガミ，三角透かし孔３個	Ⅰ－下
21	〃		10.5		1/3	外：　〃　・赤彩，三角透かし孔３個	〃
22	〃				ママ	内外：ヘラミガミ	Ⅰ－上
23	〃				〃	内外：　〃　，円孔３個	Ⅰ－中
24	〃				〃	外：ヘラミガミ・赤彩，３段円孔５列	〃
25	〃		10.6		1/3	内外：ヘラミガミ・赤彩，三角透かし孔４個	Ⅰ－上
26	〃				ママ	外：ヘラミガミ，円孔４個	〃
27	〃				〃	内外：ヘラミガミ・赤彩，３段円孔12列	〃
28	〃		13.0		2/3	外：ヘラミガミ・赤彩	Ⅰ－中
29	〃				ママ	長脚，外：ヘラミガミ・赤彩，三角透かし孔４個	〃　・北陸系
30	〃				〃	棒脚，内外：ヘラミガミ・赤彩・連続刺突文	Ⅰ－下・　〃
31	浅鉢	15.4	5.2	6.6	1/4	内外：ヘラミガミ・赤彩	〃
32	〃	11.2	4.3	5.2	〃	内外：　〃　・〃	〃
33	コップ形土器	7.6	4.6	8.6	完形	外：ハケナデ→ヘラナデ，内：連続刺突文	〃　・北陸系

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	成形・調整等	備考
34	鉢	28.5			1/2	口唇部面取り，内外：ハケナデ→ヘラナデ	Ⅰ－上・北陸系
35	広口壷		3.6		ママ	内外：ヘラナデ・ナデ	Ⅰ－上
36	甕	5.8	丸	7.6	完形	ミニチュア，内外：ナデ	〃　・北陸系
37	壷				ママ	〃　，外：ハケナデ→ヘラナデ・T字状文，内：ヘラナデ・赤彩	Ⅰ－中
38	広口壷				完形	外：ヘラミガミ・赤彩，内：ヘラナデ，2孔1対小孔	〃
39	〃	14.6	4.9	12.0	〃	内外：ヘラナデ・赤彩，外：8本連止廉状文，2孔1対小孔	〃
40	〃	14.0			1/3	内外：〃　・〃，内：ヘラナデ	Ⅰ－下・北陸系
41	広口壷	14.5			1/4	外：ヨコナデ・ハケナデ→ナデ，内：ヘラナデ	Ⅰ－下・〃
42	〃	16.6			ママ	内外：ヘラミガミ・赤彩，2孔対小穴，突起4個	Ⅰ－中
43	壷	17.6			〃	外：ヘラミガミ・平行線文，内：ヘラナデ・赤彩・ヘラナデ	Ⅰ－下
44	有脚壷	12.6			〃	内外：ヘラミガミ・赤彩，内：ヘラミガミ，三角透かし孔3個	Ⅰ－中
45	〃				1/3	外：突帯・2個1対貼付文・ヘラミガミ・赤彩，内：ナデ	〃　・北陸系
46	〃	7.5	9.1	16.7	完形	内外：ヘラミガミ・赤彩，内：ハケナデ・ナデ	〃　・〃
47	壷				1/3	内外：〃　・〃，外：T字状文・貼付文・廉状文，内：ヘラナデ	Ⅰ－上
48	〃	9.3	5.1	16.4	1/8	外：ヘラケズリ・ヘラナデ，内：ナデ，口唇部：面取り	〃　・北陸系
49	〃	16.5			ママ	外：ヘラミガミ，内：ヘラナデ	Ⅰ－下
50	〃	5.5			〃	外：〃　・赤彩，内：ヘラナデ	〃
51	〃	4.2			1/3	内外：アレ	Ⅰ－上・北陸系
52	台付壷				ママ	内外：ハケナデ→ヘラナデ	Ⅰ－中
53	〃	7.8			〃	外：ヘラミガミ・赤彩，内：ヘラナデ	Ⅰ－下・北陸系
54	甕	19.1	5.4	11.3	2/3	外：ハケナデ→ヘラナデ，内：ヘラナデ	Ⅰ－中
55	〃	15.6	4.0	8.9	1/4	内外：ヘラナデ	〃
56	甕	20.8			〃	外：擬横線文・ハケナデ，内：ナデ・ヘラケズリ	Ⅰ－上・北陸系
57	〃	15.2			〃	外：ナデ・ハケナデ→ヘラナデ，内：ハケナデ→ヘラナデ	〃　・〃
58	〃	12.6			1/6	内外：ハケナデ→ナデ	〃　・〃
59	〃	13.7	5.0	16.8	完形	外：7本2連止廉状文・波状文，内：ヘラナデ	Ⅰ－下
60	〃	12.6			1/3	外：6本　〃　・〃，内：〃	〃
61	〃	13.0			〃	外：8本平行線文　・〃，内：〃	Ⅰ－中
62	〃	16.4			ママ	外：〃　・〃，内：〃	Ⅰ－下
63	〃	13.6			1/6	外：波状文，内：ハケナデ→ヘラナデ	〃
64	〃	17.2			1/2	口唇部面取り，外：8本平行線文・波状文，内：ヘラナデ	〃
65	〃	12.9			〃	外：5本2連止廉状文・波状文，内：ヘラナデ	Ⅰ－上
66	〃	14.3			1/3	外：6本3連止　〃　・〃　・〃，内：〃	Ⅰ－中
67	〃	19.8			1/4	外：11本平行線文・波状文・ハケナデ，内：ヘラナデ	〃

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	成形・調整等	備考
68	甕	21.3	7.0	31.9	完形	外：8本平行線文・波状文・ハケナデ，内：ヘラナデ	Ⅰ－中
69	〃	27.1			1/2	折り返し口縁，外波状文，内：ハケナデ→ヘラナデ	〃
70	〃	25.7			1/6	外：8本2段2連止廉状文・波状文，内：ヘラナデ	Ⅰ－上
71	〃	18.7			1/4	外：5本　〃　・〃，内：ハケナデ→ヘラナデ	Ⅰ－中
72	〃	19.4			〃	口唇部面取り，外：6本2連止廉状文・波状文，内：ヘラナデ	Ⅰ－下
73	〃				1/3	外：8本2連止廉状文，内：ハケナデ→ヘラナデ	〃
74	〃				〃	外：波状文・ハケナデ，内：ヘラナデ	〃
75	〃				1/4	外：8本2連止廉状文・波状文，内：ヘラナデ	〃
76	〃		7.0		1/10	外：波状文・ハケナデ→ヘラナデ，内：〃	〃
77	台付甕	13.0			5/6	外：6本4連止廉状文・波状文・ハケナデ，内：ハケナデ→ヘラナデ	Ⅰ－中
78	〃				3/4	外：波状文・ハケナデ	〃
79	〃		8.4		ママ	外：ハケナデ→ヘラナデ	Ⅰ－下
80	〃		7.6		1/3	外：アレ	Ⅰ－上
81	〃		8.5		ママ	外：ヘラナデ	Ⅰ－中
82	台付壺		7.0		ママ	外：ヘラナデ，内：ハケナデ	Ⅰ－下
83	〃		8.4		〃	外：ハケナデ→ヘラナデ，内：ヘラナデ	Ⅰ－上
84	〃		10.6		1/4	内外：ヘラナデ	Ⅰ－中
85	〃		10.2		ママ	内外：〃	Ⅰ－下
86	〃		8.0		〃	内外：〃	Ⅰ－上
87	〃		7.7		〃	外：ハケナデ・ナデ，内：ヘラナデ	Ⅰ－下
88	〃		8.5		〃	外：ヘラナデ・〃，内：〃	Ⅰ－中
ＡＳＤ１－Ⅲ（61～63・67図）							
89	高坏	16.2	11.1	13.7	1/3	内外：ヘラミガミ・赤彩，突起4個	Ⅱ－上
90	〃	21.4			2/3	内外：〃・〃，〃	Ⅱ－中・北陸系
91	〃	17.8			ママ	内外：〃・〃，〃	Ⅱ－上・〃
92	〃	13.4			〃	内外：〃・〃	〃
93	〃	12.8			〃	内外：〃・〃	〃
94	〃				〃	内外：〃・〃	Ⅱ－中
95	〃	14.3			1/2	内外：〃・〃	〃
96	〃		11.7		ママ	外：ヘラミガミ・赤彩，4段7列円孔	Ⅱ－上
97	〃		13.8		1/6	外：〃・〃，内：ハケナデ→ナデ	〃
98	〃		15.5		ママ	外：〃・〃，内：〃	Ⅱ－中
99	〃		11.8		2/3	外：〃・〃，三角透かし孔3個	Ⅱ－上
100	〃				ママ	内外：ヘラミガミ・赤彩，円孔・三角透かし孔各7個	Ⅱ－中・北陸系

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	成形・調整等	備考
101	高坏		19.8		2/3	外：ヘラミガミ	Ⅱ－中・北陸系
102	浅鉢	13.6	4.4	6.7	完形	内外：ヘラミガミ・赤彩	〃
103	〃	11.2	3.9	6.5	1/4	内外：　〃　・〃	〃
104	〃	15.1	5.0	8.8	〃	内外：　〃　・〃	〃
105	〃	12.0			2/3	内外：　〃　・〃	Ⅱ－上
106	〃	14.8			1/4	内外：　〃　・〃	Ⅱ－下
107	無頸壷	8.2	4.5	9.7	完形	外：ヘラケズリ・ナデ，内：ナデ	Ⅱ－上
108	広口壷	13.2			1/6	外：ヘラナデ，内：ナデ	〃　・北陸系
109	短頸壷	9.9	4.7	14.1	ママ	外：ハケナデ→ヘラケズリ→ナデ，内：ナデ	〃　・　〃
110	壷	14.6			〃	外：廉状文・ハケナデ→ナデ・赤彩，内：ヘラミガミ・赤彩	Ⅱ－中
111	広口壷		4.7		1/2	外：ヘラミガミ・赤彩，内：ヘラナデ	〃
112	〃	13.3	4.6	13.3	完形	内外：ヘラミガミ・赤彩・平行線文，内：ヘラナデ	Ⅱ－上
113	壷		6.3		ママ	外：ハケナデ→ヘラミガミ・赤彩，内：ハケナデ・ナデ	Ⅱ－中
114	広口壷	17.0			1/3	内外：ヘラミガミ・赤彩，2孔2対小穴，突起4個	Ⅱ－上
115	壷	26.4			1/10	内外：　〃　・〃，内：ヘラミガミ，二重口線	〃　・北陸系
116	〃		6.0		ママ	外：ヘラミガミ・赤彩，内：ヘラミガミ	〃
117	〃	23.8			〃	内外：ヘラミガミ・赤彩，外：平行線文，内：ヘラナデ	〃
118	〃		6.6		1/2	外：ヘラミガミ・T字状文，内：ハケナデ→ナデ	〃
119	〃		8.6		ママ	外：〃・赤彩，内：ヘラナデ	Ⅱ－中・北陸系
120	台付壷				〃	外：ハケナデ→ヘラナデ・粘土貼付，内：ヘラナデ	Ⅱ－上
121	〃		11.5		1/2	外：ヘラミガミ・赤彩，内：ヘラナデ	Ⅱ－中
122	壷		10.0		ママ	外：ヘラミガミ，内：ヘラナデ	Ⅱ－中
123	〃		6.6		1/3	外：　〃　・赤彩，内：ハケナデ→ナデ	〃
124	甕	21.8	5.5	11.6	完形	外：ハケナデ→ヘラナデ，内：ヘラナデ	Ⅱ－上
125	〃	7.8	3.6	5.5	〃	外：ヘラナデ，内：ハケナデ→ナデ	〃
126	〃	4.5			ママ	外：　〃　，内：ナデ	〃
127	甕	10.7			1/10	外：ナデ・ハケナデ→ナデ，内：ナデ・ヘラナデ	〃　・北陸系
128	〃	11.5			2/3	外：〃・　〃　，内：〃・ハケナデ→ヘラナデ	〃　・　〃
129	〃	15.1			1/10	口縁部面取り，内外：ナデ	〃　・　〃
130	〃	17.8			〃	〃　，内外：〃	〃　・　〃
131	〃	19.0	5.7	18.5	1/2	外：ナデ・ヘラナデ	〃　・　〃
132	広口壷	11.2	4.0	15.1	完形	内外：ヘラミガミ，内：ヘラナデ・ヘラナデ	Ⅱ－中・　〃
133	〃	11.4			ママ	外：ナデ・ハケナデ→ナデ，内：ナデ	Ⅱ－上・　〃
134	甕	11.4	5.7	14.5	完形	口唇部面取り，外：ハケナデ→ナデ・ヘラナデ，内：ヘラナデ	〃　・　〃

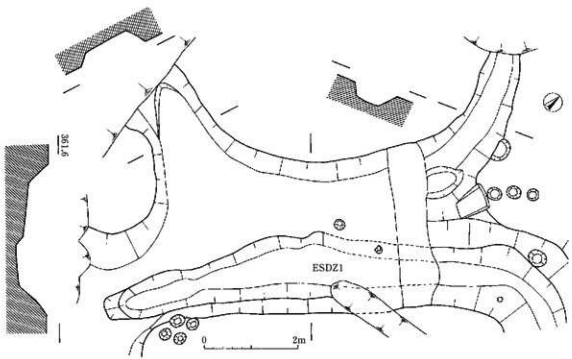
番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	遺存	成形・調整等	備考
135	甕	14.9		1/6	完形	口唇部面取り，外：ハケナデ→ナデ・ヘラナデ，内外：アレ	Ⅱ－上・北陸系
136	〃	10.8			ママ	〃 ，外：ナデ・ヘラナデ，内：ヘラナデ	〃 ・ 〃
137	〃	13.0	5.0	12.4	1/4	折り返し口縁，外：波状文・ヘラミガミ，内：ヘラナデ	〃
138	〃	10.0			1/2	外：波状文・ハケナデ→ヘラナデ，内：ヘラナデ	〃
139	〃	10.2	4.0	9.7	1/4	外：7本2連止廉状文・波状文・ヘラナデ，内：ヘラナデ	〃
140	〃	14.0			2/3	外：波状文，内：ヘラナデ	Ⅱ－中
141	〃	14.8			1/4	外：平行線文・波状文，内：ヘラナデ	Ⅱ－上
142	〃	12.2			〃	外：4連止廉状文・波状文，内：ヘラナデ	〃
143	〃	15.3	6.0	16.9	2/3	折り返し口縁，外：7本4連止廉状文・波状文・ヘラミガミ，内：ヘラナデ	〃
144	〃	15.5	5.7	20.6	4/5	口唇部面取り，外：波状文，内：ヘラナデ	〃
145	台付甕	13.4			2/3	外：5本4連止廉状文・波状文，内：ハケナデ→ヘラナデ	〃
146	〃	12.5			1/2	外：6本1連止 〃 ・ 〃 ・ヘラミガミ，内：ヘラナデ	〃
147	甕		2.1		ママ	内外：ヘラナデ	〃
148	台付甕		9.0		〃	内外： 〃	Ⅱ－中
149	〃	13.8			1/4	外：アレ・波状文，内：ヘラナデ	Ⅱ－下
150	〃	16.3			1/2	外：7本3連止廉状文・波状文・ヘラミガミ，内：ヘラナデ・ヘラ先痕	Ⅱ－中
151	甕	19.4	4.1	20.0	完形	外：平行線文・波状文，内：ハケナデ・ヘラナデ	Ⅱ－上
152	〃	18.7	5.5	23.7	3/4	外：5本4連止廉状文・波状文・ヘラミガミ，内：ヘラナデ	〃
153	〃	21.3	6.2	23.5	1/3	外：8本6連止 〃 ・ 〃 ・ハケナデ，内：ヘラナデ	〃
154	〃				2/3	外：8本2連止 〃 ・ 〃 ，内：ヘラナデ	〃
155	〃	19.5			1/6	口唇部面取り，外：8本4連止廉状文・波状文，内：ヘラナデ	Ⅱ－中
156	〃	20.5			3/4	外：8本3連止廉状文・波状文，内：ヘラナデ	〃
157	〃				ママ	外：篦描T字状文・ハケナデ，内：ハケナデ	Ⅱ－上
158	〃		7.7		1/3	外：波状文・ヘラミガミ，内：ヘラナデ	〃
159	〃		7.2		〃	外： 〃 ・ヘラナデ，内：ヘラナデ	〃
ＡＳＤ１－Ⅱ（64～66図）							
160	高坏	18.4	12.0	13.9	1/3	内外：ヘラミガミ・赤彩	Ⅲ－中・北陸系
161	〃	14.8			ママ	内外： 〃 ・ 〃	Ⅲ－下
162	〃	13.4			〃	内外： 〃 ・ 〃 ，内底叩打	Ⅲ－上
163	〃				1/6	内外： 〃 ・ 〃 ，三角透かし孔3個	Ⅲ－中
164	〃				ママ	内外： 〃 ・ 〃	Ⅲ－上
165	〃	13.4			〃	内外： 〃 ・ 〃 ，内底叩打	Ⅲ－中
166	〃		7.9		〃	裾部面取り，内外：ヘラミガミ・赤彩	Ⅲ－上・北陸系
167	〃		11.2		1/3	内外：ヘラミガミ・赤彩，三角透かし孔4個	〃

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	成形・調整等	備考
168	高坏		11.4		ママ	外：ヘラミガミ・赤彩，三角透かし孔3個	Ⅲ－上・北陸系
169	蓋	14.8	－	6.9	1/4	内外：ヘラナデ・ナデ	Ⅲ－中
170	片口鉢	10.8	5.0	12.2	完形	外：ハケナデ→ヘラナデ，内外：ヘラナデ	〃
171	無頸壺		4.4		ママ	内外：ヘラナデ	Ⅲ－上
172	直口壺	6.9			〃	内外：ヘラミガミ，内：ナデ	Ⅲ－中・北陸系
173	台付壺	10.4			〃	内外：　〃　・赤彩，外：8本廉状文，内外：ヘラナデ突起4個	Ⅲ－上
174	広口壺	18.6	4.9	16.2	1/4	内外：　〃　・〃，内：ヘラナデ，2孔1対小穴	〃
175	壺	24.4			1/6	内外：　〃　・〃	Ⅲ－下・北陸系
176	〃				1/3	内外：　〃　・〃，外：T字状文，内：ヘラナデ	Ⅲ－上
177	〃		7.0		ママ	内外：ヘラミガミ，外：T字状文，内：ヘラナデ	〃
178	〃				〃	内外：　〃　，外：　〃　，内：　〃	〃
179	〃		7.4		〃	外：ヘラミガミ・赤彩，内：ハケナデ	Ⅲ－中
180	〃		7.0		ママ	外：　〃　，内：ハケナデ→ヘラナデ	Ⅲ－上
181	〃		10.0		1/4	外：　〃　，内：ヘラナデ	Ⅲ－下
182	〃	38.2			1/10	内外：ヘラミガミ・赤彩，口縁部：直立・ヘラナデ	Ⅲ－上・北陸系
183	〃	50.6			1/3	内外：　〃　・〃，二重口縁・突起	〃　・　〃
184	〃		13.0		ママ	外：ヘラミガミ，内：ハケナデ→ヘラナデ	〃
185	甕	13.4	4.0	13.8	5/6	外：6本3連止廉状文・波状文，内：ヘラナデ	〃
186	〃	17.0			1/8	口唇部面取り，外：10本2連止廉状文・波状文，内：ヘラナデ	〃
187	〃	17.2			1/3	外：10本1連止廉状文・波状文，内：ヘラナデ	〃
188	〃	16.4			1/6	外：7本4連止　〃　・　〃　，内：　〃	〃
189	〃	22.3			〃	外：3連止廉状文・波状文，内：ヘラナデ	Ⅲ－中
190	〃		4.6		ママ	外：波状文・ヘラナデ，内：ヘラナデ	Ⅲ－上
191	〃	17.0	6.5	25.2	1/3	外：8本2連止廉状文・波状文・ヘラミガミ，内：ハケナデ→ヘラナデ	〃
192	〃	22.2			1/6	外：7本3連止　〃　・　〃　，内：ハケナデ→ヘラナデ	〃
193	台付甕				ママ	外：7本2連止　〃　・　〃　，内：ヘラナデ	〃
194	甕				〃	外：平行線文・波状文，内：ヘラナデ	〃
195	〃		8.0		1/8	外：ヘラミガミ，内：ヘラナデ	Ⅲ－中
196	〃	23.8			1/4	外：ヘラミガミ，内：ヘラナデ	Ⅲ－上
197	〃		5.5		ママ	外：ハケナデ→ヘラナデ，内：ヘラナデ	Ⅲ－中
A検出面（66図）							
198	壺	16.2			1/10	内外：ヘラミガミ・赤彩，内：ヘラナデ	北陸系
199	器台				ママ	内外：　〃　・〃，内：ヘラナデ	〃
200	高坏		8.2		1/2	内外：アレ	

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	遺存	成形・調整等	備考
ＡＳＫ２（69図）							
201	高坏				ママ	内外：ヘラミガミ・赤彩	
202	〃		9.6		1/4	外：ヘラミガミ・赤彩，三角透かし孔４個，３段円孔４列	
203	〃		7.7		〃	外：　〃　・〃，　〃　２段４個	北陸系
204	甕				1/6	外：14本３連止廉状文・波状文，内：ヘラナデ	
ＡＳＫ４（69図）							
205	台付壷	15.5			1/6	内外：ヘラミガミ・赤彩	
206	広口壷		4.0		ママ	外：ヘラミガミ・赤彩，内：ヘラナデ	
207	〃				1/10	内外：ヘラミガミ・赤彩	北陸系
208	甕	13.6			1/8	内外：ナデ	〃
ＡＳＫ５（69図）							
214	高坏	13.9			1/3	外：ハケナデ→ヘラナデ，内：ヘラナデ	
215	小型丸底鉢	10.6	丸	3.5	〃	内外：ヘラミガミ，底：ハケナデ→ヘラナデ	北陸系
216	広口壷				〃	内外：　〃　・赤彩，外：平行線文，内：ヘラナデ	
217	甕	17.8			1/6	口縁：ヨコナデ，外：ハケナデ，内：ハケナデ→ヘラナデ	北陸系
218	〃	14.0			1/8	口縁：　〃　，外：　〃　，内：ヘラケズリ→ヘラナデ	〃
219	〃	15.2			〃	口縁：　〃　，内外：ヘラナデ	〃
220	蓋				ママ	外：ヘラナデ，内：ナデ	
ＡＳＫ７（69図）							
221	高坏	15.5			1/6	内外：ヘラミガミ	
222	甕	12.4			1/3	口縁：ヨコナデ，内外：ヘラナデ	北陸系
223	台付甕				〃	外：ヘラケズリ・ヘラナデ，内：ヘラナデ	
224	〃		9.0		ママ	外：ハケナデ→ヘラナデ	
230	〃		8.7		〃	内外：ヘラナデ	
ＥＳＤＺ１（71図）							
231	壷	12.8	6.4	25.5	2/3	口縁：ヨコナデ，内外：ハケナデ→ヘラナデ	北陸系
232	〃	22.4	7.6	37.5	完形	内外：ハケナデ→ヘラナデ，内：ヘラナデ	〃
233	〃	23.8			1/8	外：ヘラミガミ，内：ハケナデ→ヘラナデ	
234	〃		6.5		1/3	外：　〃　，内：ヘラナデ	
235	〃				ママ	パレススタイル壷，外：平行線文・波状文，内：波状文，内：波状文・ヘラナデ	東海系
236	無頸壷	3.2	2.4	4.8	完形	外：ヘラナデ・赤彩，内：ナデ１孔１対小孔	
237	広口壷	10.8			1/4	内外：ヘラミガミ・赤彩，内：ヘラナデ	北陸系
238	〃		3.2		ママ	外：ヘラミガミ，内：ハケナデ→ヘラナデ	
239	壷		4.3		1/2	内外：ヘラナデ	
ＥＳＫ１（73図）							
240	壷	19.6	7.7	32.8	完形	外：ハケナデ→ヘラミガキ・赤彩，内：ヘラミガキ・赤彩	

4　平安時代の遺構と遺物

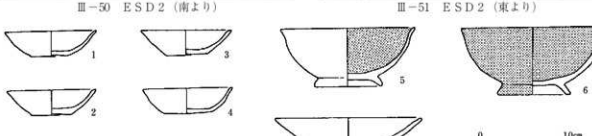
B区・E区・F区で当該期の遺構および遺物が確認されるが、遺構においては住居址等の居住遺構はなく、環状溝址（ＥＳＤ２）・溝址（ＥＳＤ３・４）・土壙墓（ＦＳＪ１）・長方形集石遺構（ＦＳＮ１～３）・土坑（ＢＳＫ10・ＥＳＫ４）・井戸址（ＦＳＥ１）・性格不明遺構（ＥＳＸ１・ＦＳＸ３）等を検出したにすぎない。また、



74図　ＥＳＤ２（環状溝址）実測図（１：80）

Ⅲ－50　ＥＳＤ２（南より）

Ⅲ－51　ＥＳＤ２（東より）



75図　ＥＳＤ２出土土器実測図（１：４）

遺物においても前記した遺構から若干の土器片を得たものの、図示可能な土器片を出土した遺構はＥＳＤ２・ＥＳＸ１・ＦＳＸ３があるにすぎない。調査地は集落跡というよりも墓域等の特殊な地域であったものと推定する。

Ｅ２号溝址（環状溝址、ＥＳＤ２）

［遺構］（74図）　ＥＳＤＺ１の北西に近接し、溝の一部が重複する。本遺構の西側半分超え部分は調査区域外に伸びていることと、撹乱が著しいため全形や規模等不明な点が多い。検出部は弧状を呈しており、全形は環状溝になるものと予想する。規模は内法の弧のあり方から推定して内周直径3.6～3.8m、北側の溝幅平均が0.8mであるので外周直径が4.4～4.6m規模を予想する。掘り込みの深さは40～50cmを測る。

［遺物］（75図）　器種には土師器坏（１～４）・台付皿（７）、黒色土器椀（５・６）がある。坏はロクロ調整で、底部に糸切り痕を残す。口径は９㎝代で、器高は３㎝に満たない。椀はヘラミガキの後黒色処理される。

Ｅ３号溝址（ＥＳＤ３）

［遺構］（70図）　ＥＳＤＺ１の北東部を南北に縦貫するものと思われ、ＥＳＤ４と直交するようである。溝幅は1.0～1.5mで、深さは30cm前後の規模になる。性格・用途は不明である。

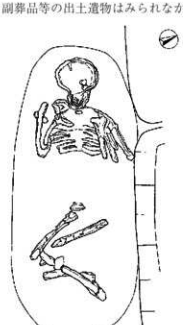
Ｅ４号溝址（ＥＳＤ４）

［遺構］（70･78図）　ＥＳＤＺ１の南東隅にかけて直線的に伸びる遺構で、この遺構の西側で終結をみる。終結部は溝幅40～80cm・深さ30cm前後の規模になるが、ＥＳＤＺ１付近では溝幅を拡張し、10cm程深くなる。

Ｆ１号土壙墓（ＦＳＪ１）

［遺構］（76図）　Ｆ区の東端に位置し、ＦＳＮ１・２と重複関係にあり、これらよりも古い遺構である。土壙の形態は隅丸長方形を呈し、長軸1.5m・短軸60～68cmの規模である。長軸方向はN65°Wである。埋葬人骨は仰臥屈葬形態で、胸部に抱石とも思える人頭大の河原石が置かれていた。

［遺物］　副葬品等の出土遺物はみられなかった。



76図　ＦＳＪ１実測図（１：20）

Ⅲ－52　ＦＳＪ1，ＦＳＮ１・２

Ｆ１号集石遺構（ＦＳＮ１）

[遺構]（77図）　ＦＳＡ１の南東隅部に構築された遺構で、ＦＳＪ１と重複し、ＦＳＮ２と接する。形態は隅丸長方形を呈し、長軸1.35m・短軸0.9～1.15m・深さ10cm程の規模になる。長軸はN61°W方向を指す。土壙内は拳大から人頭大の河原石が散き詰められ、集石の中には縄文時代の打製石斧が混じる。底面は平坦である。

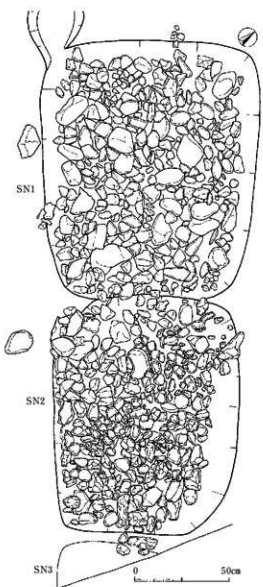
[遺物] 時代を判定する遺物の出土はない。ＦＳＮ２と共に縄文時代の打製石斧11本をはじめ凹石・石皿等が混在していた。

Ｆ２号集石遺構（ＦＳＮ２）

[遺構]（77図）　ＳＮ１の東に接して所在する。形態は隅丸長方形を呈し、長軸1.25m・短軸1.0m・深さ10cm程の規模になる。長軸方向はＳＮ１と同じであり、集石内容も変わるところはない。

Ｆ３号集石遺構（ＦＳＮ３）

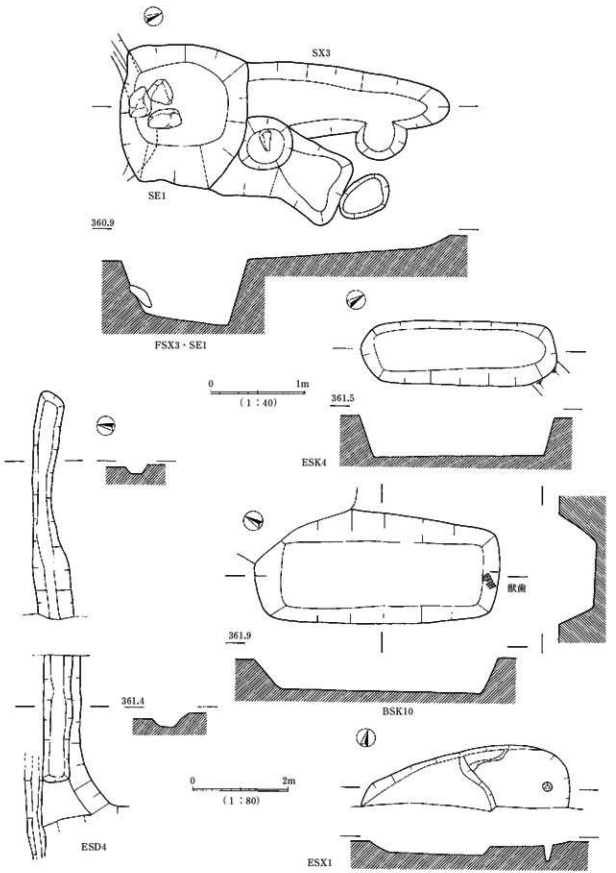
[遺構]（77図）　ＳＮ２に隣接する。遺構の大部分は調査区域外に伸びているため、詳細は不明であるが、ＳＮ１・２と同様の形態および内容のものと思われる。



77図　ＦＳＮ１次検出面実測図（１：20）

Ⅲ－53　ＦＳＮ１次検出面

Ⅲ－54　ＦＳＮ２次検出面



78図　土坑・溝址実測図（1：40，ＥＳＤ４・ＥＳＸ１は1：80）

Ｂ10号土坑（ＢＳＫ10）

［遺構］（78図） Ｂ区の中央付近に位置する。形態は長方形に近似し、長軸2.5m・短軸0.9～1.2m・深さ40cmを測る。長軸方向はＮ７°Ｗである。底面は平坦である。

［遺物］ 平安時代土器の小破片が出土したが図示できるものはない。南壁から馬と推定される獣歯が出土した。

Ｅ４号土坑（ＥＳＫ４）

［遺構］（78図） Ｅ区の南端に位置し、同期のＥＳＸ１と隣接する。形態は隅丸長方形を呈し、長軸2.1m・短軸0.7m・深さ40cmの規模になる。長軸方向はＮ33°Ｅである。底面は平坦である。

［遺物］ 平安時代土器の小破片が出土したが図示できるものはない。

Ｆ１号井戸址（ＦＳＥ１）

［遺構］（78図） Ｆ区の南西に位置し、弥生時代のＦＳＡ１と同期のＦＳＸ３と重複関係にある。形態は方形状を呈し、南北1.35m・東西1.4mを測る。掘り込みはＦＳＸ３の底面から最深70cmで、検出面からは１m程になる。底面は傾斜を有し、湧水の痕跡が認められないことから大型土坑の可能性もある。

［遺物］ 平安時代土器の小破片が出土したが図示できるものはない。

Ｅ１号性格不明遺構（ＥＳＸ１）

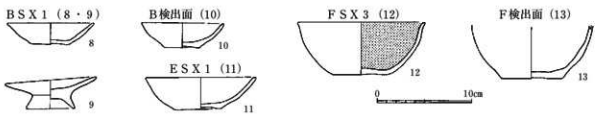
［遺構］（78図） Ｅ区の南端に位置し、遺構の半分以上は調査区域外に伸びている。形態は隅丸方形状になるが、底面が２段になる点から居住施設とは考えられない。規模等は不明である。

［遺物］（79図） 図示できるものは底面から土師器坏（11）１個体あるにすぎない。

Ｆ３号性格不明遺構（ＦＳＸ３）

［遺構］（78図） Ｆ区の西側位置し、井戸址（ＥＳＥ１）および土坑状遺構と重複関係にある。形態は長楕円形を呈するものと思われるが定かでない。長軸の規模は不明であるが、最大短軸幅は75cmを測る。掘り込みは傾斜を有し、鍋底状になるものと思われる。

［遺物］（79図） 黒色土器の坏（12）の破片が１個体出土している。



79図 ＳＸ・検出面出土土器実測図（１：４）

5 中世の遺物

明確な中世遺構を確認していないが、Ｅ区の遺構検出面において土器皿（カワラケ）（80図１～３）を採集した。共に非ロクロ製のもので、底部外面の調整はヘラナデによっている。色調は淡白褐色を呈する。

80図 Ｅ検出面出土土器実測図（１：４）

土器観察表

番号	種別	器種	法量 口径	法量 底径	法量 器高	遺存	成形・調整等
ＥＳＤ２（75図）							
1	土師	坏	9.6	3.6	2.7	5/6	ロクロ・糸切り
2	〃	〃	9.3	4.2	2.9	完形	〃　・　〃
3	〃	〃	9.5	4.2	2.8	1/2	〃　・　〃
4	〃	〃	9.4	4.9	2.7	完形	〃　・　〃
5	黒色	椀	14.2	7.0	6.2	〃	〃　・回転ヘラケズリ
6	〃	〃	15.2	7.6	7.2	3/4	〃　・　〃
7	土師	台付皿	15.2			ママ	〃　・糸切り
ＢＳＸ１（79図）							
8	土師	坏	9.1	3.6	2.6	完形	ロクロ・糸切り
9	〃	台付皿	9.6	5.2	3.2	3/4	〃　・　〃
Ｂ検出面（79図）							
10	土師	坏	8.5	3.6	2.6	1/6	ロクロ・糸切り

番号	種別	器種	法量 口径	法量 底径	法量 器高	遺存	成形・調整等
ＥＳＸ１（79図）							
11	土師	坏	11.5	4.7	3.3	1/2	ロクロ・糸切り
ＦＳＸ３（79図）							
12	黒色	坏	13.5	5.9	5.5	1/4	ロクロ・糸切り
Ｆ検出面（79図）							
13	土師	甕		6.3			ロクロ・糸切り
Ｅ検出面［中世］（80図）							
1	土器皿（カワラケ）		9.4	7.0	1.5	1/2	赤ロクロ・ヘラナデ
2	〃		9.7	6.6	1.7	1/3	〃　・　〃
3	〃		12.8	8.5	2.6	1/6	〃　・　〃

Ⅳ 結 語

発掘調査は遺跡をほぼ東西に横断するトレンチ状のもので遺跡の一部を露呈したにすぎない。また、中部電力（株）等の事業所が群立して地域でもあり、その基礎構造物による撹乱も著しく、破壊されていた部分も多くあった。そのため全容を把握するまでに至らなかった点残念である。特にD区は全面にわたり撹乱を受けており、遺構の存在が確認できなかった。以下調査で得た縄文・弥生・古墳時代の所見の概略をもって結語としたい。

縄文時代の住居址はC区のみに3軒認められ、中期後葉（ＣＳＡ３）・末葉（ＣＳＡ４）と後期初頭（ＣＳＡ５）の時期が与えられる。このうち竪穴形式をなすものはＣＳＡ３の1軒で、他の住居址は平地式と考えられ炉を中心に柱穴が円形に巡る形態のものである。後者のうちＣＳＡ５には入口部に巾着袋形の敷石施設が敷設される所謂「帆綾形敷石住居址」の一形態をなすものであるが、住居本体部には敷石が施されない。周辺における当該期の遺構を瞥見すると、本調査地からＪＲ信越線をはさんで南に約150mに所在する吉田四ツ屋遺跡がある。この遺跡はマンション建設にともない発掘調査されたもので、中期末葉から後期初頭に時期比定される住居址２軒が確認されており、このうち1軒は明確な根拠をもたないが敷石住居の可能性が指摘されている。さらに本調査地から北西方向約150m地点に、市街地再開発事業にともない発掘調査した吉田古屋敷遺跡がある。ここからは堀之内Ⅱ式の敷石住居址が検出されており、後続する加曽利Ｂ式の遺構も存在する。他の近隣の調査地から確認されていないことから、時間差はあるが縄文中期末葉から後期前半にかけての遺跡範囲は径300m前後の範囲で小規模集落が営まれていたことを窺わせる。ちなみに当該期の遺跡は浅川の上流域に松ノ木田遺跡が所在する。

弥生時代中期の住居址はC区に1軒・F区に2軒の計３軒が確認されているにすぎず、集落跡の東側外縁に位置するものと思われる。これに対して後期の住居址は散在的ではあるがF区に集中して５軒が検出された。前述した吉田四ツ屋遺跡では２軒、市街地再開発事業地点では２軒の居住施設が確認されているにすぎないが数量的にみれば当該調査地周辺に集落の核があるものと考えられる。この他、小型土器を供献し、ガラス玉等を出土した木棺墓（ＢＳＪ１）および合口土器棺墓（ＦＳＪ１）等の墓制に触れよう。浅川扇状地遺跡群の遺構の中で注目される遺構の一つである。吉田四ツ屋遺跡では赤色塗彩された小型壺・浅鉢・高坏坏部を供献した箱型小口痕のある木棺墓・ガラス小玉を内包する合口壺棺墓各１基、浅川扇状地扇央部に位置する本村東沖遺跡では円形周溝墓３基・木棺墓６基・土器棺墓１基等が検出されており、周溝墓埋葬主体部より鉄鉾をはじめガラス玉が、木棺墓のうち１基からは５帯の銅鉾・管玉35本・ガラス玉10個が出土している。広い範囲での部分的な調査所見ではあるが、当該期においては各地に首長層が存在する先進的な地域を思わせる。

更に弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての多量の土器群が出土している。環濠を推定させる大溝址（ＡＳＤ１）およびこれも前方後方型方形周溝墓を想定させる大溝址（ＥＳＤＺ１）からのものである。特にＡＳＡ１からの土器類は投棄された状態での出土であり、大まかに３層に分離されるものの時間差を感じさせない。また、在地の箱清水式土器系を主体とするものの北陸系土器の影響を受けた土器も数多くみられる。こうした傾向は小島柳原遺跡群の水内坐一元神社遺跡や中俣遺跡の大溝址にも認められる。これらとは若干の時間差があるものの土器類を投棄するという点では同じ行為を有してしており、溝址の性格や内容を解明する上では重要な要点になっているように思われる。しかし、何らかの祭祀行為の結果としか答えをもちあわせていない。次にＥＳＤＺ１の存在であるが、吉田四ツ屋遺跡でも同形態を想定させる遺構が確認されているし、同時期の遺物が出土していることから調査地周辺一帯は首長層の墓域であった可能性を指摘しておく。土器類の中に北陸系土器類が多いなかで濃尾平野に中核を有する「パレススタイル壺」が唯一１個体出土している点注目される。

報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん　よしだふるやしきいせき
書名	浅川扇状地遺跡群　吉田古屋敷遺跡（3）
副書名	―ＪＲ吉田踏切除去（市道吉田朝陽線）事業地点―
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第118集
編著者名	矢口忠良・飯島哲也・森田利枝
編集機関	長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センター
所在地	〒381－2212　長野県長野市小島田町1414番地　TEL 026－284－0004・FAX 026－284－0106
発行年月日	2007（平成19）年3月30日
印刷所	ほおずき書籍株式会社　（TEL 026－244－0235）

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	経緯度（日本測地系）	調査期間	調査面積	調査原因
吉田古屋敷（よしだふるやしき）	長野県長野市大字吉田3丁目860－10他（ながのけんながのしおおあざよしだ）	20201	A－087	北緯36°40′21″ 東経138°12′25″	19951225 19990709	2,400㎡	道路改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉田古屋敷	集落跡	縄文時代	【中期】住居址2・土坑10・溝址1 【後期】敷石住居址1・土坑9	中期末葉～後期前葉 土器・打製石斧他	C区を中心とする小規模集落跡
		弥生時代	【中期】住居址3 【後期】住居址5・木棺墓1・土器棺墓1・土坑10・大溝1	中期～後期 土器・打製石斧他、木棺墓出土ガラス玉	F区を中心とする小規模集落跡・墓域
		古墳時代	【前期】環濠？1・周溝墓？1・土坑1	弥生後期終末～古墳初頭土器	A区の南側に環濠集落跡？、E区は墓域？
		平安時代・中世	環状溝址1・土壙墓1・集石遺構3・井戸址1・土坑	土師器・黒色土器 土器皿（カワラケ）	集落跡の外縁遺構

長野市の埋蔵文化財第118集

浅川扇状地遺跡群
吉田古屋敷遺跡（３）

平成19年３月20日　印刷
平成19年３月30日　発行

編　集　長野市教育委員会
発　行　文化財課埋蔵文化財センター
印　刷　ほおずき書籍株式会社